
魔法少女リリカルなのはStrikerS ～白き円卓の騎士～

なるち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers ～白き円卓の騎士～

【Nコード】

N7599J

【作者名】

なるち

【あらすじ】

ダモクレスでのランスロットと紅蓮による最後の決着を迎える時、白き円卓の騎士の新たな物語が始まる。

第1話「Re;」（前書き）

二次創作を嫌う方はお戻りください。また、本編にはギアスキャラはスザクしか登場しません。

また、作者の国語の成績はやヴあいことになっています。それを理解したうえでお読みください。

第1話「Re;」

空には無数の人型を模した機械が飛行している。その機械の名をナイトメアフレーム^{KMF}という。

銃、あるいは剣を持って戦っている。そして戦っているKMFの上空には全長3kmを超える巨大な塔のような構造をし、最上部には城のようなものがある。さながら天空要塞と言ったところだ。

その天空要塞——ダモクレスの周辺部にて他のKMFとは次元が違うともいえるほど激しい戦闘を行っている2騎のKMFがあった。1騎は大型のクローのような右腕と赤い8枚羽根をもち、全体的に紅いカラーリングが施されたKMF——紅蓮聖天八極式。

もう1騎は白を基調とし、緑の6枚羽根を持ったまるで聖騎士のような印象を与えるKMF——ランスロットアルビオン。

2騎とも高速での飛行をしたまま攻撃を繰り返し、それを紙一重でかわしている。

「その為にレジスタンスとして戦ってきたのよ!」

「組織を使うという手だってあったはずだ!」

お互いに剣——メーザー^{MZ}バイブレーション^Sソードで斬り合い、お互いの主張をぶつけ合うパイロット。

ただ互いに持っている剣はMV^Sではあるもののその形状は異なる。ランスロットが持つMV^Sはまさに剣といった形状であるのに対し、紅蓮の持つ物は十手を融合させたような構造の小型ナイフを逆手持

ちにしている。

「その組織に、システムに入れ無い人はどうするの！それは「違う」って、どうやって言えばいいのよ！」

だがその紙一重の攻防もいつまでも続きはしない。

ランスロットが左手に持っている銃——スーパーヴァリスを紅蓮に向け弾丸を発射しようとした瞬間、紅蓮の撃ち出した飛燕爪^{スラッシュハーケン}牙がスーパーヴァリスに命中し爆発する。

「このっ！」

「高いところから偉そうに言うなあっ！」

そう叫ぶと紅蓮のパイロット——赤い髪をした気の強そうな少女、紅月カレンは紅蓮の右腕を前に突き出す。その瞬間、輻射波動と呼ばれる紅いレーザーのようなものが発射される。

しかしそれはランスロットの左腕に展開された緑色のシールド——ブレイズルミナスによって防がれる。

「組織に入るしかない人はどうなる！正義とは！」

そう言い放ち、ランスロットは新たに左手で2本目のMVSを抜く。そして2騎は高速での近接戦闘へと突入する。

10度近く交えた後、ランスロットの振り下ろしたMVSが紅蓮の背面に装備されている翼——エナジーウィングの片方を斬り落とした。

しかしそれもつかの間、紅蓮がとっさに伸ばした左手を避けるがエ

ナジーウィングを発生させている機械部分の付け根をつかまれてしまう。

ランスロットは2本のMVSを左から横薙ぎに振るがそれは輻射波動を発生させた右腕によって受け止められ、弾かれてしまう。その際にエナジーウィングを引きちぎられてしまう。

互いにエナジーウィングを失くし飛行が出来なくなった2騎は、ダモクレスの外装部に着地してなお近接戦闘を行う。

だが紅蓮のMVS――呂号乙型特斬刀はすでに失われており、ランスロットのMVSは今だ2本とも健在である。輻射波動も残弾数が少なく、無駄撃ちは出来ない。故に、ランスロットが圧倒的に優位に見える。

しかしそれでも紅蓮はランスロットと対等に戦っている。

「人は、世界は、こんなにも思い通りにならない。」

「だから思い通りにしようって言うの!？」

紅蓮の方が高い位置にいるため、上からスラッシュハーケンでランスロットを狙い撃つ。

その攻撃はランスロットの手にあたり、MVSを弾き飛ばす。

「それは！卑劣なのよ！」

壁と壁に挟まれた狭い空間の中、紅蓮は輻射波動を撃つ。しかしランスロットはそれをブレイズルミナスで防ぎ、ダメージは無い。

「くっ、これで輻射波動は弾切れ。」

「シールドエナジーも尽きたか。」

「それでも！」

互いにランドスピナーで壁を登り、先ほどよりは多少だが開いた場

所に出る。

紅蓮はスラッシュハーケンを撃ち出し、ランスロットの後ろで交差させる。

そしてそのままスラッシュハーケンを引き戻し、ランスロットを自身へと引き寄せ大きな右腕を突き出す。だがそれをランスロットは自身の左腕を盾とし防ぎ、右の拳を突き出す。が、紅蓮もまた左腕を盾として防ぐ。

それを見たランスロットのパイロットは目を見開き、思わず声を漏らす。

「決めきれない？ ギアスの呪いを使っているのに!？」

だがそう思っているのはカレンも同じだった。

「スペックはこっちが上のはずなのに。スザク、これだけの力があるって何で!!」

そして再びランドスピナーを使って壁を登る。

上りきった場所で激しい肉弾戦を行う。だが2騎は互いの能力がほぼ互角であるため相手を倒しきることが出来ない。そして、それはもはや常人が付いていけないような領域の戦いではなかった。

「終わりにしよう、カレン!!」

「あなたに正義さえあれば!!」

互いに叫んだ後、ランスロットは空中での回転から右足での蹴りを、紅蓮は右手首から輻射波動を拡散させたりするときに使用する6本の棒のようなものを出現させ、それで右手を囲うように展開して突きを繰り出す。

互いに足と手がぶつかり合う。だがランスロットは紅蓮に向かって

飛ぶように回転しての蹴りを放ったため、紅蓮はその勢いで後ろへ押されてしまう。

そのとき、右足と手首のパーツが破壊される。それでも尚、紅蓮は右腕を突き出す。

だがその腕はランスロットの左腕で防がれる。

「くうっ！」

隙が出来た紅蓮はランスロットが腰から放った2基のスラッシュハーケンに右腕と頭部を破壊されてしまう。

その直後、紅蓮のコックピットではピーというシステム音とともに機能停止してしまう。

「そんな・・・届かなかったの？」

悲痛な思いでカレンはそう呟く。

「いや、届いているよ。カレン。」

届かなかったと思われた紅蓮の右腕を突き出した最後の攻撃は、確かにランスロットに届いており、その胸部に刺さり致命的なダメージを与えていた。

「はぁ・・・」

それを確認すると共にカレンは気を失い、バランスを崩した紅蓮は海上へと落ちていく。

そして残されたランスロットは爆発四散したのだった。

森の中、少年が倒れている。外見から判断するに10代後半といったところだろうか。

「――んっ」

どうやら気が付いたようで、身体をゆっくりと起こす。

「ここはどこだ？」

周囲の光景に全く見覚えが無いらしく、自分が何故ここにいるのか分からないようだ。

座り込んでいても仕方が無いと思ったのか、周囲を探索するために立ち上がろうとする。

「くっ!？」

が、身体に痛みが走り膝をついてしまう。

「僕はたしか・・・カレンと戦ってお互い戦闘不能になったはず。それに戦っていた場所はダモクレスだ。こんな森の中にいるはずが――」

そこまで思い出していたとき、上のほうでなにやら爆発音のような音が聞こえた。

「まだ戦いは終わっていないのか？」

そして空を見上げると信じられない光景が目に入った。

「人が・・・飛んでる？空を？」

そんなこと普通に考えればありえない。人が空を飛ぶなんて。だが実際自分の目で見てしまった。

一瞬自分の目を疑うが、自分の視力は悪くないことを思い出す。

「そんな・・・まさか。」

だが自分の視力が悪くないと分かっているつもりでもやはり信じられない。夢でも見ているのかと思い、頬をつねってみた。

「痛い・・・」

どうやら夢ではない。そのとき彼が気づいたことがあった。

飛んでいる人が持っている杖のようなものから光を発射して小型の機械のようなものを破壊している。

「戦っている・・・のか？」

どうやら1人で戦っているようで、小型機械の数の多さに苦戦しているようだ。

「助けないと! あ、でも・・・」

助けようと思ったまではないものの、よくよく考えてみると自分に空など飛べる訳が無い。

ならばナイトメアで、と思い周囲を見回すがそれらしき物は一切見当たらない。

「そうか。ランスロットはもう無いんだったな。」

紅蓮との戦いでランスロットが爆発四散したことを思い出す少年。自分の目の前で戦っている人を助けられないのかと思うとくやしくてたまらないのだろう、表情を歪ませる。そのときだった。

<マスター!<

電子音ではあったが確かに声が聞こえた。

「なんだ? どこから?」

>ここです、マスター!<

「下のほうから?」

その少年が下を向くと、見覚えの無いネックレスをしていることに気が付いた。

そのネックレスについているのは、ランスロットの胸部についていた紅いカタチをした部品とそっくりな形をした白い宝石のようなも

のだった。

「なんだこれ？僕はこんなもの持っていなかったはずだけど。」

>ひどいですね、マスター。<

「うわっ！？宝石がしゃべった？」

宝石がしゃべったことに驚く少年。だがその宝石から声がするたびに点滅していることに気づかない。点滅する宝石なんか普通ないだろうに。

>宝石ではありません、マスター。ずっと一緒に戦ってきたというのにお忘れですか？<

「えっ！？一緒に戦ってきたって、僕と一緒に戦ってきたのはランスロットであって、君みたいな宝石を見るのは初めてだよ。」

>ですから、私がランスロットです。<

「は？いや、えーと・・・ランスロットはロボットであって、こんな小さくなんて――」

>詳しいことは後にしましょう、マスター。あなたは先ほど空で戦っている人を助けたいと言いましたね？<

「それは確かに言ったけど・・・」

だが少年は理解している。ナイトメアはないし、空を飛ぶことも出来ない。そんな自分が助けられるはずが無いと。

「ナイトメアが無いんだ、助けられないよ。」

>いえ、あなたが望むなら私は再びあなたと共に戦いましょう、マスター。<

「いや、宝石じゃ戦えないし・・・」

かなり冷静にツッコむ少年。

>あなたが空で戦っている人を助けたいと思うなら、Set up
!といってください。<

少年のツツコミを無視して続ける自称ランスロットの宝石。

「えっと・・・セットアップ？」

彼は助けたいと思っていることは確かなので、訳が分からないが言われるがままにそう口にする。
すると宝石が光を放ち、少年はその光に包み込まれる。

>使用者の認証を得ました。使用者に最適な形での起動を始めます。
Stand by Ready Set up!<

光が晴れると、そこにはランスロットの各部を鎧のように身体に纏った少年の姿があった。

「これは・・・ランスロット!？」

>ですから先ほど言いました。私はランスロットであると。<

「確かにそうだけど・・・」

>フロートユニットも装備されています。ですので飛行も可能です。
<

そう言われて少年は自分の背中を見ると懐かしいものがあった。そこには自分の記憶と同じ、赤いカラーリングが施されたフロートユニットが装備されていた。

「このフロートってことはランスロットエアキャヴァルリーってことかい？」

>はい、そうです。<

「アルビオンじゃないんだね。」

>アルビオンは今現在データ構築中のため使用不可能です。<

「そうか。でもこれでも助けるには十分だ。行くよ、ランスロット。」

┐

>イエス、マスター。あなたとならどこまでも。<

そしてランスロットを身に纏った少年は、空で戦っている人物を助けるために飛翔するのであった。

第1話「Re;」（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

それにしても・・・やってしまいました。

オリジナル小説のほうも完結どころか始まったばかりなのに・・・
orz

第2話「ファースト コンタクト」(前書き)

てか2月11日って休みなんですね。10日の夜に知りました。おかげでスケジュールが狂いました。もうリアルがΩ＼＼。）チーンです。

まだ1話しか投稿してないのに2話目を投稿する前にPV見たら3900→・・・

ちよ、なにこれWさすがなのはとギアスというビッグタイトルなだけありますね。

あ、それとあとがきにちょっとした発表があります。（というより訂正？）

では第2話です。どうぞ。

第2話「ファーストコンタクト」

お世辞にも整備されているとは言えない岩場をリニアレールが走っている。

きちんと整備はされていないが、安全運転を心がければ事故が起るような心配は無いだろう。

しかしそのリニアレールは安全運転を無視した速度で走行している。それを中心に小型の機械が大量に飛行している。

だがその小型機械に、桜色をした手のひらに収まる程の大きさの球体が当たり次々と爆発しては堕ちていく。

その桜色の球体を放っているのは、橙色の髪に全体的に白でまとめられた服を着た20歳前後程に見える女性だった。

「アクセルシューター！」

>Axel shooter<

その女性が叫んだ後に女性の声を思わせる電子音が同じ言葉を繰り返す。

するとその女性が持っている機械部品で構成されていると思われる杖のようなものから、先ほどと同じような球体が大量に撃ち出される。

その球体は次々に飛行している小型機械に命中し、撃墜していく。

「こうも数が多いとキリが無いよ。」

どれだけ攻撃してもなかなか数が減ったことを実感できないのか、愚痴をこぼす女性。

＞高速で接近する魔力反応を感知しました。フェイト執務官です。＜

電子音声が聞こえたその直後に黄色い光がいくつも飛来し、小型機械を貫いていく。

ただ、飛来した黄色い光は先ほどの桜色の球体とは違い先端が円錐のように尖っていた。

「お待ちせ、なのは！」

「フェイトちゃん！」

現れた人物は長い金髪をツインテールにし、紺色の服の上に白いマントを羽織った女性だった。

お互いに顔を見て頷きあったかと思うと、言葉を交わすことも無く見事な連携で次々と小型機械を撃墜していく。

あれほど大量にいた小型機械はあっというまに数を減らしていく。

「あと少しだなのは。さっさと終わらせよう。」

「うん。がんばろうフェイトちゃん。」

そう声を掛け合い、残りを撃墜すべく攻撃の態勢に入ったときだった。

下方より緑色の球体が飛来し、小型機械を撃墜する。

「何!?!」

「気をつけて!なのは!」

二人は球体が飛んできたほうへと視線を向ける。

その先にいたのは白い鎧のようなものを纏い、背中に赤いユニットのようなものをつけている少年だった。いや、自分たちとそう歳も変わらないように見えるあたり、青年と呼んだほうがいいのかもしれないが。

2人の女性は小型機械に気を配りつつも、近づいてくる少年を警戒する。

「僕も協力するよ。」

「えと・・・君は?」

協力を申し出た少年に対し、橙色の髪の女性が問いかける。

「今はそんなことよりこの小型機械を倒すことを優先した方がいい。」

「え、あ・・・うん。」

「ガジェットは私たちが落とすから君は安全なところへ！」

「大丈夫だよ。僕も手伝う。」

金髪の女性の気遣いを断り、少年は手に持っている銃で次々と小型機械を撃墜していく。

それを見た2人の女性は、これなら変に彼を止めて時間を食うより3人で一気に殲滅した方がいいと判断する。

「危険だと思ったらすぐに下がってくださいね！」

「ああ、分かった。」

それだけ言うと2人は攻撃を再開する。

3人が攻撃を始め、1分もすると小型機械はほぼ壊滅していた。

「ラスト1機・・・これで！」

少年がそう言うのと銃が変形し、銃身が伸びる。そこから放たれた弾丸は今までよりも大きかった。そしてその弾丸は小型機械を粉々に破壊する。全てが撃墜されると少年のところへ2人の女性が近づいてくる。

「協力感謝します。」

金髪の女性が少年に礼を述べる。しかしその表情は少しばかり陰しい。すると今度は橙色の髪の女性が口を開く。

「危ないですから、今後はこんなことしないでくださいね。」

「あ、はい・・・すみません。」

確かにその通りだなと思い謝る少年。

「それで、あなたは管理局員・・・じゃないですよね？」

「管理局員・・・って？」

金髪の女性の質問に初めて聞く単語があったために聞き返してしまう。

少年の発言に2人は顔を見合わせた後、橙色の髪の女性が再び質問をする。

「時空管理局、ミッドチルダ、聖王教会、魔法、この中で知っている単語はありますか？」

「・・・いえ、どれも聞いたことはありませんが？」

（フェイトちゃん、この人・・・）

（うん、多分間違い無いよ。）

二人は念話で会話をしているために少年には聞こえない。
ちなみに念話とは、魔法がつかえるものならば誰でも使える基礎中の基礎である。

携帯電話などを使う必要がないためかなり便利である。

「あの、詳しいことが聞きたいので私たちについてきてもらえますか？」

「えーと・・・」

橙色の髪の女性にそう言われたものの、いきなり付いてきてほしいと言われて「はい、そうですか」とおとなしく付いていくようなバカはそうそういないだろう。

「大丈夫です。悪いようにはしません。ただ、少し事情が聞きたいだけなんです。」

少年の考えていることが分かったのか、金髪の女性が付け足す。

「・・・わかりました。」

彼女たちの思いが伝わったのか、少年は承諾する。

「あ、そうだ。ごめんなのは。私車パーキングに止めたままだから取りに行かないと。」

「あ、そっか。じゃ、こっちは任せて。」

「ありがと、ごめんね。」

そういう残すと金髪の女性はどこかへ飛んでいってしまった。

「それじゃ、こっちです。」

橙色の髪の女性の誘導に従い少し移動するとヘリが空中にて待機している。

このへりです、中へどうぞ——そう言うとき女性は中へ入っていく。少年もそれに従い、中へと入る。すると先の二人以外にも4人と1匹……いや、5人といった方がいいのだろうか。

少年がそう思うのも無理は無い。1匹、いや1人だけ明らかに人間サイズではない人間がいるのだ。

身長は30cmほどだろうか。そして浮いているが、そこは先ほど既に見ているので驚かない。

少年がそんなことを考えていると先ほどの橙色の髪の女性と、既に中にいた4人と1h……いや、5人が話している。

「おつかれみんな。ご苦労様。大丈夫だった？」

「「「はい！大丈夫です！」」「」」

「リンから見えてどうだった？」

「はい、4人とも初めてにしては上出来だったですよ。ところでなのはさん、そちらの方はどなたですか？」

小さい人が少年のことを切り出すと、他の4人も気になっていたのか少年の方へと視線を向ける。

「この人はガジェットを落とすのに協力してくれたんだけど、どうも次元漂流者っぽくてね。詳しいことは六課で話を聞くからその後ね。」

「はいですう。」

少年は全く持って訳がわからずぽかんとした表情を浮かべていた。

そうこうしているうちにそれなりの大きさがある建物の屋上にへりは着陸した。

「こっちです。」

橙色の髪女性の誘導におとなしく付いていく少年。
そしてある部屋の前で立ち止まる。

「高町一等空尉です。」

少年の目の前にいる女性がそう言うと、どうぞ、という声と共にドアが開く。
中に入ると茶髪の若い女性が座っている。

「彼がさっき言ってた次元漂流者か？」

「うん。そうだよ。」

全く訳が分からないといった感じの少年にこの部屋の主であろう女性が生声をかける。

「初めまして、機動六課課長兼部隊長の八神はやて二等陸佐です。」

「あ、自己紹介まだしてませんでしたよね。機動六課スターズ分隊長の高町なのは一等空尉戦技教導官です。」

「ああ・・・えと、枢木スザクです。」

2人が自己紹介したため、それにつられて少年——スザクも自己紹介する。

「それで、枢木さん。なのはちゃんからの報告を聞く限りでは枢木さんは次元漂流者である可能性があるんですよ。」

「あの、その次元漂流者っていうのは何ですか？」

「次元漂流者っていうのはな、何からの理由で違う世界に飛ばされた人のことを言うんですよ。」

「あの・・・違う世界って意味が分からないんですが。」

スザクは次元漂流者がどういったものかを聞くと、この人たち頭大丈夫なんだろうか？と誤ってしてしまう。

「うーん・・・意味が分からんか。それやったら、柘木さんがいた世界の名前はなんていうん？あ、柘木さんが住んでた惑星名でええよ。」

「それなら地球・・・でいいのかな？」

「「ち、地球!？」」

なのはとはやての声が見事に重なる。

「ほんまか？」

「間違いないよ。」

「そうか・・・実は私たちの出身世界も地球なんよ。」

「えっ!？」

なのはやはやての出身世界が地球であることを知り、さすがに驚き

を隠せないスザク。

「でも僕のいた世界には君たちみたいに空を飛んで戦う人間なんていなかったよ。」

「それはそうだよ。地球は第97管理外世界って言って、魔法が全然発達して無い世界だから。」

「そこでこの世界はミッドチルダって言^ゆーんよ。」

スザクの疑問を解消できる回答をするのは。そしてスザクに新たな疑問を与えるはやて。

「ここは地球じゃないんですか？」

「そうや。第1管理世界ミッドチルダや。」

「そんなことが・・・」

ここが地球で無い事実を告げられ、もはや言葉が出ない。

「でもそうやとしたら枢木さんはデバイスをどこで手に入れたんや？地球ではまず手に入らんよ？」

「そうなんだよね。私もそれをずっと疑問に思ってた・・・。」

「え、デバイスって・・・これのことかな？」

そう言って首から提げている宝石——ランスロットを見せるスザク。

「そうそう、それや。」

「これはどうやって手に入れたかは分からないんだ。気づいたら持ってた……君は知ってるかい？」

「いえ、私の記憶メモリーにもありません。紅蓮との決着が付いた後はすぐにこの世界へと変わっています。」

「そうか、ありがとう。」

「「それってインテリジェントデバイスだったの（やったんか）！」」

二人が驚きの声を上げるが、当然スザクに分かるはずが無い。

「インテリ……？」

「……案の定の返答である。」

「インテリジェントデバイス……や。」

「簡単に言うとそのコミたいに人工AIを搭載したデバイスのことだよ。結構高価なんだよ。」

「そうなんだ。」

なのはの簡単な説明でようやく理解したスザクだった。

「何故これを持っているかは分からないけど、僕とランスロットはずっと一緒に戦ってきたから、こうやって傍にいてくれると心強いよ。」

>ありがとうございます、マスター。<

見ていてほほえましい光景ではあるが、なのはとはやては疑問を浮かべる。

「柘木さん、今ずっと一緒に戦ってきたって言^ゆーたけど、さっきはそのデバイスをどうやって手に入れたか分からへんって言^ゆーたよな？どーゆーことや？」

「2人とも名前の感じからして日本人ですよね？」

「うん、そうだよ。」

「この世界にはいつからいるんですか？」

「中学3年まではむこうにいたから、4年くらい前かな。それがどうかしたの？」

スザクが何を聞きたいのかよく分からないのはとてはやては首をかしげる。

「4年前なら・・・ランスロットは知らなくても、ナイトメアフレームくらい聞いたことありますよね？」

「ナイトメア・・・フレーム？」

「なんやそれ？」

聞いたことが無い単語にますます首をかしげる2人。

「え、知らないんですか!？」

（4年前ならすでに実践投入されてるのに。いや、それ以前に4年前なら既に日本はエリア11になってるんだ、知らないはずが無い。一体どういうことだ？）

スザクが1人で考えても答えが出ることの無い思考の無限ループに突入しかける。

だがそれははやてにより阻止される。

「樫木さん、樫木さんの世界のこと教えてもらえませんか？話の食い違いの理由が分かるかもしれません。」

「分かりました。」

そしてスザクは語る。

8年前、日本は神聖ブリタニア帝国との戦争に負け、自由と権利と名前を奪われたこと。

ブリタニアにより与えられた名前がエリア11であり、日本人はイレブンと呼ばれるようになったこと。

自身は名誉ブリタニア人としてブリタニアを中からいい国へ変えるために軍に入ったこと。

そこで人型自在戦闘装甲騎であり、世界初の第7世代KMF・ランスロットのパイロットになったことを。

だが決して必要以上に語るつもりは無く、ランスロットに騎乗した後に戦うことになった黒の騎士団のことはテロリスト、とだけ言っておき、彼らが原因で起こった事件などについては一切話さなかった。

そして最後に、テロリストのエースと戦った後、気がついたらこの世界にいたことを話した。

「……………」

スザクの話聞いた後、なのはもはやても言葉が上手く出せず、少々俯き気味になっている。

そうなるのも仕方が無い。まさかこんなにも重い話をされるとは思わないだろう。

「すまんな・・・なんて言ーたらええか分からん。」

「いいよ、気にしないで。」

「でも・・・」

「それより何か分かったことはありますか？」

スザクの質問に顔上げる2人。

「分かったことならある。枢木さんのいた地球は私らの地球とは違う次元に存在するってことや。」

「違う次元に？」

「うん。私たちの世界にはナイトメアはないし、ブリタニアって国もない。同じ地球でも違う次元に存在するから多少なりとも差異が生じてるんだと思う。」

「そうですか・・・僕は帰れるんでしょうか？」

スザクのその言葉に2人は顔を曇らせる。

「枢木さんのいた世界はおそらく管理局もまだ発見できて無い世界や。せやから今すぐに、って言ーのは無理やと思う。」

「どれくらい時間が掛かるか分からないけど、でも私たちが・・・管理局が必ず見つけるから。」

「・・・ありがとう」

すぐには帰れないということを聞いてさすがに落胆の色は隠せない。

「枢木さん、私ら機動六課に協力してもらえんやろか？」

「はやてちゃん!？」

はやてのいきなりの勧誘発言に驚くのは。

「僕が協力？」

「そや。機動六課は・・・いや、六課だけやない。管理局は常に人材不足なんよ。枢木さんはむこうの世界で軍に所属しとった言ーし、先のなのはちゃんたちに協力してくれたときの映像からも十分力があると判断してお願いしとるんよ。」

「確かに枢木君は空戦できるし戦力としては十分だけど、でも次元漂流者なんだよ?」

「それは分かってる。枢木さんはさっきの話の中で、中からいい国に変えるために軍に入ってたって言った。それが一番の理由や。」

「どういうこと？ はやてちゃん。」

なのはは、はやての意図が理解できずにいる。勧誘を受けている当の本人スザクは黙って聞いている。

「管理局にも公に出来ずに隠されてることはたくさんある。それは組織やったら仕方ないことかもしれない。せやけど・・・それでも私は管理局に今よりもっとええ組織になってほしい。その為に、中からいい国に変えるって言った枢木さんの力を貸してほしいんや。」

「はやてちゃん・・・」

なのはもまさかはやてがここまで考えていたとは思わず、黙ってしまえばスザクのほうへ顔を向ける。

「管理局そのものがよくわからないんですが、今までの話から簡単に言ってしまうえば色んな世界を守る組織ってことでいいんですか？」

「まあそんなとこやね。」

スザクは守る組織といったが、実際には世界を支配しているような

ものじゃないのかと考えていた。

管理する世界をだんだん増やしている所が、ブリタニアの植
民地エリア拡大と重なって見えるのだった。

「少し・・・考えさせてもらってもいいですか？」

「もちろんや。今すぐ答えを出してもらわない必要はないよ。答えが出るまでは六課の隊舎に滞在してもらってええかな？」

「いいんですか？」

「ええよ。次元漂流者の保護も私らの仕事やから、気にせんでええよ。」

「ありがとうございます。」

「なのはちゃん、空いてる部屋へ案内したってくれる？」

「うん。じゃあ行こっか？」

「はい。」

スザクとなのはは立ち上がり、失礼します、と部隊長室から出て行く。

残ったはやては1人呟いていた。

「枢木さん、協力してくれるとええな・・・」

「枢木君って歳いくつなの？」

「僕は18ですけど？」

「私は19歳。1つ下なんだね。枢木君っていつも敬語なの？」

「いえ、いつもじゃないですけど、目上の人とか初対面の人とかには敬語です。」

「じゃあ私には使わなくていいよ。気楽に行こう？」

「はい・・・あ、うん。よろしく高町さん。」

「なのはでいいよ、みんなそう呼ぶから。」

「じゃあ、なのは。僕もスザクでいいよ。」

「うん、よろしくねスザク君。」

「よろしく。」

そんな会話をしながら空き部屋へと向かう2人。

「ねえ、スザク君。」

「何？」

「スザク君は次元漂流者なんだし、無理に協力しようとか考えなくても大丈夫だからね？」

「うん、ありがとう。」

やはりなのはとしてはスザクに危険が及ぶのを避けたいようだ。そこまで話したときにはがドアの前で止まる。

「ここだよ。」

そういつて中に入るなのは、それに続くスザク。

「部屋にある備品は使っていいから。あと、何かあったらこの端末から私の部屋につながるから。使い方はね——」

こう使うんだよ、と使い方を説明し部屋を後にするなのは。

残されたスザクはとりあえず服を変える。代えの服はクローゼットの中にあつた備品のジャージだ。

スザクの着替え前の服装はナイトオブセブンの制服で蒼のマントを羽織っていた。

なぜ最後に来ていたナイトオブゼロの服ではないのか疑問だが考えなくても答えが出る訳がなかった。

「この世界にもジャージなんてあるんだな。」

そんなことを呟きながらベッドへ仰向けにダイブする。

「この部隊に協力・・・か。ランスロットはどうすべきだと思う？」

「なにがあらうと私はマスターについていくだけです。あなたの剣となり、盾となるために。」

「そうか・・・ありがとう。」

その後、スザクは小さな寢息を立てるのだった。

第2話「ファースト コンタクト」(後書き)

前書きで書きました発表(訂正?)ですが、

1話目の前書きにて書きましたギアスキャラはスザクしか出ないというやつですが、多分出ます。

ただ、ルルーシュは確実に出ないのでご了承ください。

ルルが出ると話が滅茶苦茶になっちゃいますので・・・

ギアスとかギアスとかギアスとかが使いちゃうから;;;

第3話「最善」(前書き)

リアルがひと段落したので更新速度が若干アップするかもしれません。

PV10000突破しました・・・Σ(。D；o)

あと、ここに書くとき長くなるのであとがきの方に設定とか色々載せておきます。では第3話です。どうぞ。

第3話「最善」

時はスザクが眠りにつくあたりから少し遡る。

正確に言えば、スザクがへりに乗る少し前である。

何かに使う機材がたくさん置かれている部屋で、2人の男性がモニターを見ている。

そこに通信が入り、20代ほどに見える女性が映る。

「刻印N.O. 9、護送体制に入ります。」

「ふむ。」

「追撃戦力を送りますか？」

「やめておこう。レリックは惜しいが彼女たちのデータが取れただけでも十分さ。」

それにしてもこの案件はやはり素晴らしい。私の研究にとって興味深い素材がそろっている上に、フッフッ・・・

この子達、生きて動いているプロジェクトFの残滓を手に入れるチャンスがあるのだからね。」

そう言って不気味に笑うのは白衣を着た、いかにも研究者といった

いでたちの男性。

「プロジェクトF？」

白衣の男性にそう問いかけるのは——大柄な体格で灰色の髪をしており、左目をピアスのようなもので塞いでいる男性だった。

「そうか、君は知らないんだったね。詳しいことはいずれ話そう。今はクローン技術のことだと思っておいてくれればいい。」

「そうか。」

片目を塞いでいる男性は自分で聞いておきながら、さして興味も無いのか生返事で返す。

「それより、さっきから怖い顔をしているが何かあったのかい？」

「先ほどモニターに懐かしい顔が映ってたな。」

「それは彼のことかな？」

白衣の男性がパネルを操作して、とある映像を映す。

「ああ。」

短く返事をした男性が見つめる先に映っていたのは、白い鎧を纏った少年だった。

まだ薄暗い部屋でスザクはゆっくりと目を開ける。
その視界に映るものは新鮮なものばかりだった。

「ここは？・・・そうか、僕は。」

少し記憶を辿ったところで自分がどういった事態に陥っているのかを思い出す。
窓の外を見るがまだかなり暗い。時間を確かめるための周囲を見回すが時計が見当たらない。

「時計・・・ないや。」

>時間が知りたいのですか？<

「ああ、分かるかい？」

>それでしたら、今はA M 4…30です。<

「そんな時間か・・・昨日は早く寝ちゃったみたいだし、こんな時間に目が覚めるのも無理ないか。

でもこんなにたくさん眠ったのは久しぶりだな。」

そう、スザクは昨日夕方にはもう眠りについていた。時間にしておよそ12時間である。

スザクは再びベッドに仰向けになると、地球にいたときのことを思い出す。

(向こうにいたときは戦いの連続で・・・こんなにゆっくり眠ってなかったな。そういえば、ゼロレクイエムはどうなったんだろう。本当なら僕が・・・)

スザクは向こうが今どうなっているのか、ゼロレクイエムはどうなるのかと、考え込んでしまいが帰れない以上分かるはずもなかった。

向こうの世界のことを延々1時間は考えていただろうか。部屋は少

しずつ明るくなってきた。
いつまでたっても答えが出ないことを考えているのに疲れたのか、
思考を切り替える。

「ここに協力するかしらないか・・・」

>結論は出ましたか？マスター。<

「ランスロット・・・いや、まだ分からない。少し相談に乗っても
らえるかな？」

>もちろんです。私でよければ。<

1人で考えても結論が出ないスザクはずっと一緒に戦ってきたパー
トナーに相談を持ちかける。

「八神はやて・・・だっけ？彼女には中からいい国に変える為に、
なんていったけど・・・」

いや、まあ実際最初はそう思ってたんだけどさ。正しい手段で正
しい結果を得ることで、認められて変えていける力をつて。

でもいつのまにかそれが変わってた。・・・過程よりも結果が必
要なんだったね。」

スザクの相談をランスロットは黙って聞いている。

「今までの信念を放棄して結果を重んじるようになってしまった僕に、彼女たちに協力する資格なんてあるんだろうか？」

仰向けのままそう続けるスザクに、ランスロットは点滅しながら返答する。

>あなたは今でも結果が全てだと思っていますか？<

「分からない・・・でも向こうの世界にいたとき、Cの世界で僕は知った。人々が明日を求めていることを。

だから僕とルーシユは世界が明日を迎えられるようにゼロレクイエムを・・・」

>では、もう答えは出ているではありませんか。違いますか？<

答えは出ている、そう言い切るランスロットにスザクは視線を向ける。

「答えなんか出ていないさ。だからこうして君に――」

>いいえ、出ています。向こうの世界であなたは人々が明日を迎えるという結果のために戦いました。<

「ああ。でもその結果を得るために手段は選ばなかった。そのせいで多くの犠牲が出てしまった。」

＞確かに大きな犠牲はありました。しかし、逆に言えばあなた方はそれが最善の手段だと思ったから選んだのではないですか？＜

「・・・そうかもしれないな。」

＞でしたら、こちらでも同じことではありませんか。＜

「同じ？」

＞はい。八神はやては管理局がよりよい組織になることを望んでいます。それに対して、あなたが望む結果が最善になるように、最善の手段を選べばよいのではないですか？＜

「最善を選ぶ・・・か。ありがとう、答え・・・出るかもしれない。」

＞お役に立てたのならば光栄です。＜

スザクは再び視線を上に向ける。その瞳には何かを決意したような力強さがあった。

ビルが密集する中、座り込んでいる4人と立っている1人の女性の姿があった。

「はい、早朝訓練はここまで。」

立っている女性――なのはが訓練終了の合図を告げる。
座り込んでいる4人は喋ることもせず、肩で息をしている。

「みんなお疲れ様。ちゃんと朝ごはん食べるんだよ？」

「はい！」

肩で息をしているのに元気に返事したのは青い髪の少女と赤い髪の少年である。

「あんたら・・・ハアハア・・・なんでそんな元気あるのよ？」

「だってご飯なんだよティア！」

「そうですよティアさん！」

「聞いたあたしが・・・ハアハア・・・バカだったわ。」

「あはは・・・」

青い髪の少女と赤い髪の少年の発言を聞いて倒れこむ、オレンジの髪をした少女。

ピンクの髪の少女は苦笑いしている。

「それじゃ、私は先に行ってるから。」

「え？一緒に行かないんですか？」

先に行くことを告げるなのはに青い髪の少女が問いかける。

「うん。ちょっと用があるから。それじゃ。」

短く返答するとなのははさっさと隊舎のほうへと行ってしまった。

「なのはさん、用事ってなんだろう・・・あゝお腹すいた！！ティア
！早くご飯行こうよ！！」

「スバルうっさい！」

「「あはは・・・」」

なのはが去ったその場にはいつもの光景が広がっていた。

なのはは隊舎の中を歩いていた。道中すれ違う隊員たちに挨拶しながら。

そんな中、なのははとある部屋の前で足を止める。

「スザク君、入るよ？」

なのはが立ち止まったのはスザクの部屋の前だった。入室するためにスザクに了承を得ようとするが、返事が返ってこない。

「・・・まだ寝てるのかな？」

（返事ないし、入っちゃってもいいかな？）

なのはも時間がたくさんあるわけでは無いので、悪いと思いつつも入室することにした。

入室したなのはの目に映ったのは、スヤスヤと眠るスザクだった。スザクの寝顔は起きているときとは違い、あどけない少年の顔をしていた。

その寝顔にほんの少し見入ってしまったのはだが、本来の目的を思い出しスザクを起こすべく声をかける。

「スザク君、朝だよ。起きて。」

「……ん、うん。」

熟睡していてもすぐに起きるあたりはさすが軍人といったところか。

「起きた？」

「ん……なのは？」

「おはよう、スザク君。」

「うん、おはよう。」

「それにしてもよく寝てたね。晩御飯の時間に呼びに来たらもう寝てるんだもん。」

かなり早い時間に寝てしまったスザクが可笑しかったのか笑いながら言うのは。

「自分でもあんなに早く寝ちゃうとは思ってなかったよ。」

そう返すスザクも自分で自分が可笑しいのだろう、笑みを浮かべる。

「それで、どうしたんだい？」

「あ、うん。朝ごはんどうかなって思ってた呼びに来ただけど……」

そのとき、タイミングを見計らったかのようにスザクのお腹が鳴る。

「あ……」

さすがにスザクも少し恥ずかしいのか、頬を赤くする。
それを見て笑いを堪えるのは。

「お腹……空いたかな？」

「じゃあ行こっか。」

「あ、着替えないと。」

「じゃあ外で待ってるから。」

そう言って出て行くのは。

（なんていうか……優しい人だな。）

スザクの面倒を見るのも仕事のうちだといってしまえばそれまでだ。しかし、たえそうであっても久しぶりに他人に優しくされたスザクは心が安らぐのを感じたのだった。

なのはに連れられて食堂へとやってきたスザク。
ラウンズの制服を着ているが、さすがにマントは邪魔だと思ったのかしていない。

「あ、なのは！こっちだよ！」

なのは声をかけてきたのは昨日戦いが終わった後、車がどうか言
って飛んでいった金髪の女性である。

「あ、フェイトちゃん。スザク君、行こう？」

どうやら一緒に食事を取るようだと思したスザクは頷く。

「なのは、その人は昨日の人だね？」

「うん、そうだよ。」

「柘木スザクです。昨日はどうも。」

「私はフェイト・T・ハラOWNです。テストロッサよろしく、えいと・・・スザク、でいいかな？」

「構わないよ。よろしく、フェイト・・・でいいかい？」

「うん。」

挨拶も済み、食事を取りに行くスザクとなのは。適当に取って戻ってくると、そこにはフェイト以外にもう1人、はやてがいた。

「おはよう、柘木さん。」

「おはようございます。」

「私にもっと砕けたしゃべり方してええよ。部隊長なんてやつとるけど、気にせんでええから。」

「うん、そうさせてもらおうよ。」

4人がテーブルに着き、食事を始めてすぐにスザクが話を切り出す。

「あの、昨日の話のことなんだけど・・・」

「ああ、アレな・・・考えは纏まったんか？」

「それなんだけど、この後時間取れるかな？話がしたいんだ。」

「ええよ、分かった。そんなら食事が終わったら部屋行こか。」

「ありがとう。」

「あゝ・・・私は教導があるから行けないや、ごめんね。」

なのはは申し訳なさそうに謝る。

「用があるなら仕方ないさ。教導っていうのは・・・何か教えてるのかい？」

「うん。私教導官の資格持ってるから、あの子達に色々指導してるんだ。」

そういつてあるテーブルのほうへ視線を向ける。

その視線の先には、昨日ヘリに一緒に乗った4人がいた。

皿に山盛りになったパスタあるが、山盛りというのは比喻ではなく

本当に数十cmの山になっている。

（あ、あれは見なかったことにしよう。）

そう思いながら若干顔を引きつらせるスザクだった。

「フェイトちゃんはどないや？」

「私は大丈夫。一緒に話聞くんよ。」

「そうか、そんならさつさと食べてしまおうや。」

その後は他愛も無い話を交えて食事を済ませ、なのはと分かれた3人は部隊長室へと向かった。

「そんで話^ゆって言^いーのは？」

「それなんだけど――」

そこまで言いかけたスザクはフェイトのほうを見る。

視線を向けられたフェイトはすぐにスザクの意図を理解する。

「私は昨日のうちにはやてから聞いてるから大丈夫だよ。」

「そっか、なら続けさせてもらおうよ。」

「うん。」

フェイトに確認を取ったスザクはやてのほうを向きなおして話を始める。

「管理局は世界を管理し守る組織だと聞いた。でも悪い言い方をするなら世界を支配しているともいえてしまう。それがブリタニアと重なって見えるんだ。」

「確かにそうも聞こえてしまうな・・・そやけど、管理局はそんなこと絶対にしやん。局員全員が世界を守るために命がけで戦ってるんや。それだけは言い切れる。」

ただ・・・世界を守るために間違った手段を選んでしまう人たちはおる。その手段の違いだけなんよ。」

「手段が大切ってことかい？」

「大切なのは自分がどれだけ最善の手段を選ぶか、そしてどれだけ最善の結果を得るかや。」

（驚いたな・・・まさかランスロットと同じようなこと言うなんて。）

そう思い、スザクは少しばかり驚いたような表情をする。

「スザク、どうかした？」

黙ってしまったスザクを心配したのかフェイトが声をかけてくる。

「いや、まさかランスロットと同じ事を言うなんて思ってなくて。」

「ランスロットと同じ事？」

「うん、ランスロットに言われたんだ。僕が望む結果が最善になるように、最善の手段を選べばいいって。」

「なんや私とランスロットは何か気が合いそうやな。」

あはは、と笑うはやて。だがスザクは今だ険しい表情をしていた。

「はやて。最後に1つだけ聞きたいことがある。」

「ん？なんや？」

「君は管理局をより良い組織に変えたいと言った。だけど良い組織といっても個人によって捕らえかたは違う。君にとって理想の管理局とはどんな組織なんだい？」

「理想の管理局、か。そうやね、私にとっての理想は・・・さっきもちょっと言いかけたんやけど、全ての世界が、そこに住む全ての人々が明日を望めるように、最善の手段を選び、最善の結果を得られるように局員全員で一丸となって立ち向かっていける組織、それが私の理想の管理局や。」

スザクは驚いた。はやての理想は自分とルーシュがやろうとしていたことと同じなのだから。

いや、同じというにはいささか御幣がある。自分たちはあくまで自分たちの世界でやろうとした。

だがはやては無数に存在する次元世界全てで、と言っているのだ。昨日、はやてから話を聞いた時点でスザクの答えは既に決まっていたのかもしれない。

それを彼女に伝えるために、スザクは最後の質問をする。

「確かにそれが出来れば理想かもしれない。だけど、そんなのどれだけ時間が掛かるか分からないし、可能性も限りなく0に近い。それでも望むのかい？」

「そうやね、かなりの時間が掛かるやろうし、私が生きてる内に来へん可能性のほうが高い。」

可能性も限りなく0に近い。それは分かってる。」

はやてはそこで言葉を止め、少し間を空ける。

スザクははやてをじっと見つめて次の言葉を待っている。

そんな二人をフェイトは見守るように見つめている。

そして、はやてが口を開く。

「そやけどな、可能性は0やない。0やないからやってみる価値はあると思うんよ。」

私が生きてる内に出来へんだとしても、私の意志を継いでくれる人が必ず居る。そう信じてるんよ。」

スザクへ強い意志の宿った瞳を真っ直ぐに向け、そう言い切ったはやて。

「そやから、私にあなたの力を貸してくれませんか？ 枢木スザクさん。」

最後にもう一度そう聞かれたスザクは、自分の意思を伝えるためにはやての目を真っ直ぐに見つめる。

スザクの瞳にも強い意志が宿っているように見えるのだった。

「僕がどこまで力になれるかは分からないけど、協力させてほしい。」

それを聞いたはやては最高の笑顔を浮かべて立ち上がる。

「ありがとうスザクくん。ほんまに・・・ありがとう！」

何度も礼を述べるはやての瞳にはうつすらと涙が光っていた。

「そんなに何度も言わなくていいよ。」

「よかったね、はやて。スザクもありがとう。」

苦笑いを浮かべるスザクにフェイトも感謝の言葉を述べ、笑顔を向けるのだった。

第3話「最善」(後書き)

なんか某タヌキがすごい壮大な理想掲げてますね。

でもこれぐらいしないとスザク氏が協力してくれなさそうで・・・
他の方が書かれているリリなのStS×●●系では結構淡泊に協力
することになってるのをよく見るのですが(協力要請する⇒分かつ
た みたいな)

そうじゃないだろう、といつも思っていたので長々と書いてしまいました。

さっそくギアスからあの人が出ましたね。しかし、彼だけではあり
ません。まだ出る予定です。

さて、前書きに書きました設定などですが・・・

リリなのについて

・1期時点は劇場版ベースとなっています。故にこの小説でも魔法
は劇場版と同じ表現などをさせていただきます。

なので見ていない方にはなのはやフェイトが使用する魔法にこんな
んだっけ?と思うものがあると思います。

(例…スターライトブレイカー ⇒ 大きさなど)

・一部のなのはキャラがBATTLE OF ACESの技を使いま
す。(多分)

・デバイスは基本、TVと同じく英語、ドイツ語などしゃべって
いますが作者が分からないので日本語表記です。分かる範囲で英語・
ドイツ語を使います。

ギアスについて

・ランスロットですが、話の途中でやられる⇒バージョンアップ
⇒ずっとアルビオンのターン とはなりません。

そうなるのとチート級の強さを誇ってしまうからです。アルビオン出現後もコンクエスターなど出ます。

なのはエクシードドライブと同じような感じだと思っていただければokです。

（ちなみに作者はギアス本編ではアルビオン最強主義です。）

・エアキャヴァルリー

火力不足であるが機動力は高い。

コンクエスターとの相違点はコンクエスターユニットの有無、

ブレイズルミナス、ヴァリスの出力の違い、

コアルミナスコーン使用不可。

・コンクエスター

ハドロンブラスター使用可能、及び出力そのもののアップにより火力増大。しかしユニットを搭載したため→に比べ空中での機動力低下。

ランドスピナーで地上を移動するときは変化なし。

当然ブレイズルミナス、ヴァリスの出力も上昇。

・アルビオン

言わずとしたランスロット最強形態。

とりあえず強くて速い。エアキャヴァルリーとコンクエスターのいいトコ足して、

2で割らずに10掛けた感じで。

イメージとしてフェイトの真・ソニックをデメリットが無いどころ

か、メリットありまくりといった感じ。

第4話「模擬戦」(前書き)

やっと投稿できました・・・

しかし、これでいいのだろうか。

いや、それ以前に話が全然進まないorz

スザクがミッドにやってきてまだ2日目って・・・

第4話「模擬戦」

海上にできた施設にたくさんのビルが立ち並んでいる。正確に言えば廢ビルで、地面にはたくさんの瓦礫がそこらじゅうに落ちている。こんな場所ではあるが、上へと視線を向ければ真っ青な空が広がっている。

そんな真っ青な空で何度も火花が散っている。その火花を散らしているのは一組の男女だった。

1人は真っ白な機械でできた鎧のようなものを纏った少年、ブリタニアの白き死神こと枢木スザク。

もう1人はピンクの髪をポニーテールにしている女性、烈火の将ことシグナム。

スザクはMVSで、シグナムは炎の魔劍レヴァンティンで斬撃を繰り出す。

だが互いに紙一重で回避、もしくはきっちりと防御するため未だに一撃すら入らない状態が続いていた。

そもそも何故この2人が戦っているのか。事は1時間程前まで遡る――。

「協力してくれるんはありがたいんやけどな、昨日の映像を見る限りスザクくんは全然本気やなかったやろ？」

「え、まあそうだけど。それが何か？」

「私らはこれから一緒に戦うことになる。そやけどちゃんと力量も計らずに前線へ送り出すことはしたないんよ。」

「つまり、僕の力がどの程度か見たいってことだね？」

「その通りや。」

はやてがそう言うのも当然だ。力量が分からなければ作戦を任せることも出来はしない。

「それでな、まずはランスロットのデータを取りたいんやけどええかな？」

「いいよ、僕に協力できることなら何でもするよ。」

「ありがとう。取ったデータは最小限の人にしか見せへんから安心してな。」

その言葉にスザクは1つ疑問が浮かぶ。ランスロットのデータをそこまで隠そうとする必要があるのか、と。

スザクのいた世界でならば分かる。仮にも世界初の第7世代KMFである。そんなもののデータが流出すれば大変なことになるだろう。しかし、聞く限りここではデバイスなど普通に入手することが出来るのだ。

ならば隠す必要などないのではないだろうか。

「この世界じゃデバイスは普通に手に入るみたいだし、隠すようなマネする必要があるのかい？」

「確かにこの世界では普通に手に入るよ。そやけどランスロットは別や。」

「別？ どういうことだい？」

スザクからすればそうだろう。デバイスの違いなどよくわからないのだから。

せいぜい形状や能力が違うと思う程度だ。

「杖みたいなデバイスもあれば、剣みたいなデバイスもある。その形状は色々あるんだけど。」

「ランスロットみたいなデバイスは見たことないんよ。」

やはり、フェイトもはやてと同じ事を考えていたようだ。

「これ見てくれるか？」

そう言うってはやては静止画を2つ表示する。映っているのはスザク、なのは、フェイトの3人。

もう片方はなのはが教導しているという4人の少年少女たちだ。

「これ見て何か分らんか？」

スザクに自分で気づかせようと、はやては問いかける。

が、デバイスのことについては全く無知のスザクが気づけるはずもない。

「いや、何を分かればいいかすら分からないんだけど・・・」

「まあそうやろね。」

「スザク、スザクのデバイスとみんなのデバイスで違う所って何だか分かる？」

すかさずフェイトがヒントを与える。

「違う所・・・形状？」

「まあそれもあるんやけど・・・」

「ごめん、分からないや。」

・・・フェイトの出したヒントは役に立たなかったようだ。

「デバイスって、その映像を見ても分かるとおり基本的に武器みたいな形してるでしょ？」

「うん、そうだね。」

「そやけどランスロットは機械の鎧みたいに全身に纏っとる。そんなデバイス見たことないんよ。」

それにな、スザクくんがこの戦闘で撃ってた魔力弾なんやけど、魔力反応があらへんのよ。そのせいかガジェットのAMFも効いてへんかった。まあ魔力反応ないのに魔力弾っていう表現もおかしいんやけどな。」

最後の部分を苦笑しながら付け足すはやて。

「今の説明でなんとなく分かったよ。ランスロットは君たちの知ってるデバイスとは違うから調べたいってことだね？」

「簡単に言つとそういうことかな。」

「そやから調べさせてもらつてええかな？」

「ああ、構わないよ。君の理想のために協力するって約束だからね。」

「ありがとう。じゃ、さっそく行こか。」

「行かつてどこに？ランスロットを調べるんじゃあ？」

ランスロットを調べるのかと思いきや、立ち上がりどこかに行こうとするはやてとフェイト。

「そうやけど・・・まあ着いてきたら分かるよ。」

「あ、うん。」

とりあえず付いて来いというはやてにおとなしく従い、部隊長室を後にするスザク。

数分程度歩き、とある部屋の前で止まるはやてとフェイト。

「着いたよスザク。」

そういつて中に入る2人。それにスザクも続く。

部屋の中には機材がたくさん置いてあり、その中でモニターに向かってキーボードを打っていたのだろうが、スザクたちが部屋に入ってきたことによりこちらを向いている女性が目に入る。

「八神部隊長にフェイトさん、それにそちらの方は次元漂流者の方でしたよね。何か御用ですか？」

「こちら私らに協力してくれることになった枢木スザクくん。そこでこちらはロングアーチスタッフで、通信とデバイス制作・整備の主任として働いてもらってるシャーリーや。」

「初めまして、シャリオ・フィニーノです。よければシャーリーと呼んでください。」

「・・・・・・」

「あの・・・・」

スザクの反応がない。それをシャーリーは自分が何かまずいことでも言ったのかと思い、少々不安そうな表情を浮かべる。

「あ、ごめん。僕は枢木スザク。スザクでいいよ、よろしく。」

「あ、はい。よろしくお願いします。」

やや遅れたが、スザクが微笑んで反応を返したことでシャーリーの表情にも笑顔が戻る。

「スザク、どうかしたの？」

フェイトはそれでも心配する。これも過保護な彼女の性格故だろう。

「いや、ちょっと元いた世界のことを思い出しちゃって。」

「元いた世界？」

「うん、向こうの世界の友達で、シャーリーって子がいたんだ。」

「へえ、シャーリーと同じ名前やん。あ、でもこっちのシャーリーは愛称やけど。」

「どんな方だったんですか？」

シャーリーの質問に少し俯き、表情を暗くするスザク。

「明るくて優しく、とてもいい子だったよ。」

「だったって・・・」

スザクの表情と「だった」という発言からなんとなく結果は分かっ
てしまうものの、やはり聞いてしまう。

「・・・死んだんだ。いや、殺されたと言ったほうがいいか。」

「殺された!？」

「誰にや!？」

既に故人になっていることは予想できたものの、まさか殺されたとは思わなかった3人。

シャーリーにいたっては声が出ていない。

「犯人は分らない。それに公式的には自殺となっているんだ。だ
けど、彼女は自殺するような子じゃない。おそらくテロに巻き込ま
れて・・・」

「・・・あゝ、この話はココまでにしとこか。」

「うん・・・」

「はい。あ、それで何の御用でしたか？」

スザクの気持ちを察してか話題を変えるはやてたち。彼女たちの氣遣いにスザクは感謝し思考を切り替える。

「あのな、スザクくんのデバイス、ランスロットを調べてほしいんだよ。」

「え!?! いいんですか!?!」

「え、ええよ。スザクくんも許可くれたし。」

シャーリーはよっぽどランスロットを調べたかったのだろう。

目をキラキラさせてスザクのほうを見ている。まるで新しい玩具を与えられた子供のように。

その様子に3人は若干引き気味であった・・・

「――解析終了つと。」

シャーリーがランスロットの解析を始めておよそ30分が経過した。その間シャーリーはブツブツと呟いていたり、ランスロットと話したりしていた。余談だが呟いていたシャーリーはかなり怪しい人に見えたとか。ちなみにスザクははやとフェイトに魔法やガジェットなどについて教わっていた。

「みなさんお待ちせしました。」

「あ、終わったんだねシャーリー。」

「ご苦労様や。」

「お疲れ様。」

「それでどんな感じや？」

劳いの言葉を掛けたのもつかの間、すぐにランスロットの解析結果を聞く。

「解析の結果ランスロットには特殊なパーツが使われていることが判明しました。」

「特殊なパーツ？」

「はい。ユグドラシルドライブという機関が搭載されているんです。」

「ユグドラシルドライブ、か。」

「それは一体何なの？」

はやてとフェイトは初めて聞く名前だが、スザクには馴染みがありすぎる名前だった。

「それについてはランスロットさんから説明をお願いします。」

く分かりました。ユグドラシルドライブは私の動力炉と考えていた
だければ問題ありません。＞

「動力炉か・・・でもそれがなんで特殊なんや？」

くユグドラシルドライブには核となるコアルミナスがあります。それにより高出力のエネルギーを形成することが出来るのです。＞

「なるほどな、そのコアルミナスって言ーやつが能力を増幅させてるんか。私らで言うカートリッジシステムってとこやな。」

くそんなところです。＞

「高出力のエネルギーを形成できるのはわかったけど、そのエネルギーの元となるものはどこにあるの？」

くそれはマスターの魔力をエネルギーへと変換しています。＞

「魔力を変換・・・あ、だから昨日の戦闘でガジェットのAMFが効かなかったんだ。」
アンチキマイラ

フェイトは昨日からずっと疑問に思っていたことがようやく解決できた・・・ように見えたがすぐに新しい疑問が浮かぶ。
そしてはやて、シャーリーも同じ疑問を浮かべる。

「魔力をエネルギーに変換って・・・スザクくんが魔力変換資質をもっとるってことやろか？」

「だとしたら4つ目の新しい変換資質ってことになりますね。」

「どうなの？スザク、ランスロット。」

「いや、僕に言われても・・・」

確かに知識として先ほどシャーリーが解析している間に教わりはした。

だが、教わったからといって自分が持っているかどうかなどスザクに分かるわけが無い。

くいえ、マスターは魔力変換資質を持っているわけではありません。
私に搭載されているユグドラシルドライブで変換しているのです。＞

「あ、そうなんや。」

「新しい変換資質の発見かと思ったのに・・・残念です。」

「これでランスロットの解析は終わったし、次はスザクの番だね。」

「僕の番？」

いきなりフェイトに指名され何のことか分からず、若干間拔けな表情を浮かべる。

そしてすぐにハツとした表情になる。

「ま、まさか僕の身体も検査するとか？」

スザクの発言に震えだす3人。

必死に笑を堪えているのだろうが、堪えきれず吹いてしまう。

「えっと・・・」

何故笑われているのか分からないスザクは言葉が続かない。

「違うよスザク。はやてが言ったでしょ？力量も測らず前線に送り出したくないって。」

「あ、そうか。今度は僕自身の能力ってことか。」

「そうや。急に何言い出すんかと思って吹いてしもたわ。」

「スザクさんって面白い方なんですね。」

フェイトたちはまだ笑っている。はやてに至ってはうつすら涙を浮かべてさえいる。

「それじゃあ訓練施設行こうか。そこで私と模擬戦——」

フェイトがそこまで言ったときドアが開く。

「その模擬戦、私が引き受けよう。」

突然入ってきた人物へ4人とも視線を向ける。

「あ、シグナム。」

入ってきたのは八神家の一員であり、ヴォルケンリッター守護騎士の将だった。

「シグナム、聞いてたんですか？」

「前を通りかかったら何やら面白そうな会話が聞こえてきたのでな。」

」

「さすが戦闘^{バトルマニア}狂や。」

「？主、何か仰られましたか？」

「い、いや。何も言うやらへんよ。」

それをシグナムが聞いたところで怒ったりするわけではないが、なんとなく聞こえてほしくはない。シグナムに聞こえなかったことにホッと胸をなでおろすはやてだった。

「お前が枢木スザクか。私は主はやての守護騎士、シグナムだ。話は主からすでに聞いている。よろしく頼む。」

「あ、はい。枢木スザクです。よろしくお願いします。」

「それで先ほど言っていた模擬戦だが、私とやらないか？お前の力を直に見ておきたい。」

「それは構いませんが――」

そこまで言って視線をフェイトへ向ける。それを見たフェイトはうなずく。

「ならお願いします。」

「ああ、では行くぞ。」

「はい。」

スザクはシグナムについて部屋を後にする。

「私たちも行こうか。」

「そやね。シャーリー、戦闘データしっかり取ってな。」

「はい、任せてください。」

そう言って3人はスザクたちの後を追うのだった。

海上にある機動六課の訓練施設では、いつもの光景が広がっていた。なのはによる教導である。今日はこれまた八神家の一員で、鉄槌の

騎士の名を持つヴィータも教導に参加している。

現在は10分ほどの小休憩を入れている所だった。そんな中、なのはに通信が入る。

「なのはちゃん、今ええか？」

「あ、はやてちゃん。大丈夫だよ。」

「今そっちに向かってるんやけどな、訓練施設ちよつと貸して欲しいんよ。」

「？、どうかしたの？」

「あんな、スザクくんが協力してくれるって言うてくれたんよ。」

「そうなんだ。」

「なんや、あんま驚かな。」

はやての予想に反し、スザクが協力することにさほど驚きを見せないのは。

「うん、なんとなく協力するって言うと思ってたから。」

「何でそう思って・・・まさか」

「ん？何？はやてちゃん。」

「愛の力、とか？」

「は、はやてちゃん！？な、何言ってるの！」

顔を真っ赤にして焦りまくるなのは。それを見たはやては笑い出す。

「冗談や冗談。そんな本気にせんでも。そやけどそんな反応見せるってことはもしかして——」

「そ、それで何でこっちへ向かってるの？」

焦ったなのはとにかく強引に本来の話題へと変える。

「あ、それはなスザクくんの実力を見たいんや。力量も知らずに前線へ送り出すわけにはいかんやろ？」

「それはそうだね。それで、相手はフェイトちゃん？」

「いや、シグナムや。」

「や、やっぱり・・・」

なのはの予感的中する。シグナムは模擬戦であっても本気かどうかは別として、手を抜くことはしないのだ。

それでスザクがもし怪我をしたらと思うと、なのはからすれば模擬戦の相手はフェイトのほうがよかった。

フェイトもヴィータ曰く戦闘^{バトルマニア}狂らしいが、それでもシグナムよりは手加減してくれると思ったのだ。

本音を言えば自分が相手をしたかったのだが。

「じゃあ準備しとくね？」

「うん、頼むわ。」

はやてとの通信を終えたなのははパネルを叩きながらフォワード陣に説明を始める。

「みんな、さっきの通信聞こえてたと思うけど、スザク君とシグナムさんが模擬戦するからちょっと場所空けようか。」

「なのはさん、その人って昨日一緒にへりに乗った人ですよね？」

「うん、そうだよ。」

「次元漂流者って言ってましたけど、どういうことですか？」

「実はスザク君が協力してくれることになってね。力量を見るために模擬戦するの。詳しいことは後ではやてちゃんが説明してくれると思うから。」

「はあ・・・そうですか。」

「おまたせゝなのはちゃん。」

フォワードに簡単に説明を終えるとスザクたちが到着した。

「ごめんな、教導の途中で。」

「いいよ、大丈夫。みんな、スザク君とシグナムさんの模擬戦みてしっかり勉強するんだよ？」

「」「はい」「」

気持ちいいくらいにそろった返事をするフォワード陣。
青い髪の少女がスザクへ声を掛ける。

「頑張ってください！えと・・・」

「僕は枢木スザク。スザクでいいよ。」

名前を教えられ嬉しそうな表情を浮かべ、自身も自己紹介をする。

「スバル・ナカジマ二等陸士です！よろしくお願いします！」

「ティアナ・ランスター二等陸士です！よろしくお願いします！」

「エリオ・モンディアル三等陸士です！よろしくお願いします！」

「キャロ・ル・ルシエ三等陸士であります！よろしくお願いします！」

スバルの挨拶に始まり、ティアナたちも続く。

「自己紹介も終わったことやし、模擬戦始めよか。」

「それじゃ二人とも、デバイスをセットアップして。」

なのはの言葉で2人は準備に取り掛かる。

「レヴァンティン、セットアップ！」

光に包まれ、その光が晴れると騎士甲冑を纏い、剣を携えるシグナムの姿があった。

「ランスロット、セットアップ。」

スザクもまた光に包まれ、それが晴れると機械の鎧を纏った姿で立っていた。

「ルールはどちらかがクリーンヒットを1撃入れるか、もしくは降参するまで。それじゃ始めるよ?」

なのはの声が聞こえるとシグナムはレヴァンティンを構え、スザクはMVSを二刀流で構える。

そして今、模擬戦の開始の合図が告げられる。

「レディー・・・ゴー!」

合図と共にシグナムは地を蹴り、スザクはランドスピナーでシグナムに向かい高速で地を駆けるのだった。

第4話「模擬戦」(後書き)

フォワード陣が入るだけで人数メチャ多く感じるんですが・・・
やっていけるのだろうか・・・

前回のあとかきの設定で

エアキャヴァリーのコアルミナスコーンを使用不可にしたつもりが
使用可になってました。修正しました。

あと、コンクエスターの機動力低下はフロートで空中にいるときの
ものです。

ランドスピナーでの移動は変化ないです。

第5話「ギアスの呪い」(前書き)

力量を見るために始めた模擬戦。

でも戦う相手はシグナムさん。以前私と血戦と呼ばれるような戦いをした人だから

スザク君がすごく心配です。無事に終わるといいけど・・・

あとがきに作者さんがシグナムさんの技についてなんか解説してるから、暇があれば見てみるといいと思います。

ちなみに当然ながら、ヒロインは私ですよ？・・・ですよ？

魔法少女リリカルなのはStrikerS~白き円卓の騎士~ 始まります。

第5話「ギアスの呪い」

「はあああっ！」

互いに相手へ直線的に距離を詰める。シグナムがスザクより僅かに早く剣を振りだす。

それを見たスザクはギリギリのタイミングで跳躍し、シグナムの背後へと着地しすぐさま横薙ぎに左手に持つMVSを振る。

「くっ！」

シグナムは横薙ぎに来ることを予想していたのか、身体を沈みこませて回避するとその勢いのまま斬り上げを行う。

（読まれていたか。しかし！）

スザクから見て右側から来たシグナムの斬り上げを右手に持つMVSで押さえ込む。

「はあっ！」

刹那のタイミングで左手のMVSを振り下ろす。
それをシグナムは後ろへ跳ぶことで回避する。

「まだだっ！」

そう叫んだスザクは腰の側面に装備されているスラッシュハーケン
2基を撃ち出す。

「何!?!」

そんな装備があるとは思っていなかったシグナムは驚きを隠せない
が、それでもシールドを展開しきつちりと防御する。
シグナムが地面に着地すると薄い緑色の弾丸が何発も飛来する。

（流れるように攻撃が来る。この男、やはり出来るな。）

「レヴァンティン、私の甲冑を。」

<J a w o h l . P a n z e r g e i s t . >

ヴァリスから放たれた弾丸はシグナムに命中する。
しかし、命中したにもかかわらず何事もなかったように立っている。

（通常の魔力弾程度の威力か。ならば！）

シールドを展開しスザクへ突撃をかけるシグナム。

（くっ、やはり防御魔法の前ではノーマルモードは牽制程度にしかないか。それなら！）

ノーマルモードでは効果が薄いと思ったスザクはバーストモードへと移行する。

（変形した？ かまわん、このまま突っ込む！）

「これならどうだっ！」

ヴァリスから先ほどまでよりも大きな弾丸が放たれる。大きさはおよそ3倍ほどだろうか。

（威力をあげてきたか。だが！）

シグナムはそれを僅かに横にずれることで突撃している速度を保ったまま回避する。

（疾い！？）

シグナムの素早い回避に驚きを隠せない。その間にシグナムはスザクへと到達する。

「はあああっ！」

スザクは左手に持つMVSで受け止める。が、シグナムは両手でレヴァンティンを振っているため受けきれず、後方へ弾き飛ばされる。

「くうっ！」

苦し紛れにヴァリスを撃つがそれをシグナムはレヴァンティンで両断する。

「そんなもの私には効かんぞ！」

再びシグナムは距離を詰め斬撃を繰り出す。
それをフロートを起動させることで空中へ逃れるスザク。

その間にヴァリスを腰へ戻し、再びMVSを抜き二刀流の構えをみせる。

「甘い！」

すぐさま地を蹴り、追撃を行うシグナム。

（この人、一撃一撃が重い！）

剣の腕はどう見てもシグナムのほうが上だった。

それはそうだ。シグナムはこれまでレヴァンティンと共に長い年月を戦ってきたのだ。

たかだか18年しか生きていないスザクが剣の腕で勝っているわけが無い。

スザクは防戦一方になっていく。

なのはたちが観戦しているところではフォワードが騒いでいた。

いや、性格に言えば騒いでいるのはスバルだが・・・

「ティア！ティア！スザクさんすごいね！シグナム副隊長に押されてるけどちゃんと戦えてるよ！」

「うっさいわね！そんなの見りゃ分かるでしょ！」

「でもホントすごいですよ。ね、キャロ？」

「うん。私たちが戦ったらきつと瞬殺されちゃうし・・・」

スバル、エリオ、キャロの3人は憧れのような眼差しをモニターに向けているが、ティアナは1人だけ複雑そうな表情を浮かべていた。

「へえー、やるじゃんかアイツ。シグナム相手にあそこまで持つなんてよ。」

「だね。」

短い返事だけ返すのはは、スザクが怪我をしないかとかく気が気でない様子だ。

「シャーリー、データから見てどうや？」

「そうですね、現段階ではそれなりに優秀な魔導師・・・いえ、騎

士といったところですね。先ほど撃っていた魔力弾・・・じゃなくて、えーと・・・エネルギー弾？とも言うべきでしょうか、それは通常の魔力弾程度の威力ですし。」

「そうか。引きつづき頼むよ。」

「はい。」

（スザクくん、まさかそれが本気なんか？そやったらシグナムには絶対勝てへんよ。）

はやてはスザクの本気がどの程度なのか今だ計りかねていた。

（この人相手に今の僕とランスロットが剣術で勝つのは無理だ。何か他の部分で勝つしかない。）

レヴァンティンを受け止め鏢競り合いになる。

「なかなか持つな。剣で私とここまでやりあうとはな。」

「ありがとうございます。ですが、負ける気はありませんよ。」

「ふっ、言うな。だがそれもここまでだ。」

そう言い放つと一端距離をとるシグナム。

（なんだ？）

優勢だったにもかかわらず、わざわざ自分から距離をとるシグナムの意図が分からないスザク。

自分から仕掛けたところで先ほどと同じ展開になるのは見えているので、相手の出方を伺い警戒する。

「レヴァンティン！カートリッジロード！」

<Explosion.>

その電子音と共に葉莢が排出され、同時に炎が刀身を包み込む。

（炎？あれも魔法なのか？）

スザクの目にはただ刀身が炎を纏っているようにしか見えない。
だが実際は違う。そのことをこの後スザクはその身をもって体験することになる。

「いくぞ枢木。気を抜くなよ。」

その言葉により一層警戒心を強めるスザク。

「紫電一閃・・・」

「っ!?!?どこだ!?!?」

何か呟いたかと思うと、次の瞬間左右に分身しながらこちらへ向かってきた。そう見えたが、左右のどちらにもいない。
上からの気配を察知し、ハッと顔を上げる。
そのとき既にシグナムは攻撃態勢に入っていた。

（くっ!回避は間に合わない!）

両腕を顔の前に構え、ブレイズルミナスを展開する。

「はあっ!?!」

振り下ろされたレヴァンティンは両腕を通し、スザクにものすごい衝撃を与える。

それだけではない。元いた世界ではかなりの防御力を誇っていたブレイズルミナスにヒビが入る。

（そんなまさか！？）

その間にもシグナムは2撃目に入る。

（まずい！）

1撃でブレイズルミナスにヒビが入ったのだ。2撃目は耐えられるかどうか怪しい。

しかし既に彼女は攻撃態勢に入っているために回避は難しい。となれば残された手段は防御のみである。普通は、だ。

瞬間、スザクの目の周囲がうっすらと赤くなる。だがその変化に気づくものはいない。

スザクはその場で一回転しての蹴りを繰り出す。

それと同時に炎を纏っているレヴァンティンが振り下ろされる。

次の瞬間爆発が起こり何かが下方にあるビルの上へと激突し、ビ

ル内部へと落ちていく。

砂埃を巻き上げているためにどうなったか視認することは出来ない。そのビルの上、つまり空中に浮かんでいるのはシグナムの姿だけだった。

そう、ビル内部へと落ちていったのはスザクだった。

「まさかあの状況から蹴りを入れるとはな。おかげで攻撃の威力が落ちた。」

（だが、先ほどのヤツの動き・・・それまでにないほど切れのある動きだった。楽しませてくれるやつだ。）

「シグナムさん！」

「ん？なのはか、どうした？」

さて、どうするかとシグナムが考えていたときだった。なのはから通信が入る。

その表情から察するにかなり焦っているように見える。

「どうしたじゃないですよ！やりすぎです！模擬戦なんですから！」

「模擬戦であっても手は抜かん。相手に失礼だからな。まあそんなこと関係なく手を抜くつもりなどないがな。」

「と、とにかく終わりです！」

「まだだ。」

スザクの身を心配するなのは模擬戦を終了させようとするが、シグナムはそれをよしとしなかった。

「え？だって——」

「先ほどの蹴りで攻撃の威力がそがれた。それにヤツは攻撃が当たる寸前にシールドを張ってさらに威力を落とした。吹き飛びこそしたが、大したダメージは入っていないだろう。」

「で、でも——」

「とにかくそういうことだ。続行する。」

そういつてシグナムは通信を切ってしまう。

「あつ、シグナムさん！……もう切れちゃった。」

（ホントに戦闘^{バトル}マニア^{マニア}なんだから……）

なのはに周囲にいたものたちは、なのはの心情を察して同情の視線を向けるのだった……

ビル内部の瓦礫の中でスザクは立ち上がる。

「なんとか威力は削ったけど、それでもこれだけの威力が……このままでは勝てないな。」

先ほどシグナムが言っていた通り、さほどダメージは無いようだ。しかし、一撃の威力の違いがここまでであると防戦に回るのは明らかに不利である。

「こちらから仕掛けるしか勝機は無いか。」

これがただの模擬戦ならここで降参するもありだろう。だが、これはスザクの力量を計るためのものなのだ。いや、それだけではない。

スザクにも元いた世界ではブリタニア帝国最強の騎士、ナイトオブゼロの称号を得たプライドがあるのだ。

一撃の威力の差や剣術レベルの差を見せられたからといって、簡単に投げ出すわけにはいかない。

「それに、さっきのやり取りで確信を得た。身体能力は間違いなく僕の方が高い。・・・まあギアスの呪いを使ったけど。」

スザクの元々の身体能力は体力バカと言われる程で、常人よりかなり高い。

が、人間は無意識の内に能力にブレーキをかけており、それはたとえスザクでも例外ではない。

ギアスの呪いの力を使わなければ身体能力を極限まで発揮することは出来ない。

だがその力を使うというのも生半可なものではない。強靱な精神力でギアスの力を押さえ込んで初めて可能となったのだ。

だからそれもスザクが自身の強さで手に入れた力の一つだ。スザクはそれをあまり快く思っていないが。

「長期戦になれば勝ち目は無い。ギアスの呪いを使って一気に決めるしかない。」

スザクがビル内部に落ちてから1分ほどが過ぎた。

「まだ出てこんか。まさか本当に——！？」

シグナムの発言の途中で今だ晴れない砂埃から何かが飛び出してくる。

「はああ！」

飛び出してきたスザクは十八番である回転キックを繰り出す。おはこ

とっさのことで反応の遅れたシグナムは左腕で受け止めるが、さすがに受け止めきれず軽く吹き飛ばされる。

尚も猛追するスザクの両手には既にMVSが握られており、怒涛の勢いで斬撃を繰り出す。

（くっ、動きが先ほどまでとは違う！？これは蹴りを見せたときと同じ感覚がする。）

「はああ！」

スザクがシグナムの体制を崩そうと、攻撃が僅かに大振りになる。そしてそれを見逃すシグナムではない。僅かに大振りになった隙を利用し、距離を開ける。

「先ほどのような攻撃なら次は当たらない！」

「ふっ、それは見てからのお楽しみだ。」

紫電一閃ならば次は当たらないと宣言するスザクに笑みを浮かべるシグナム。

「レヴァンティン！」

<Schlange form.>

再びレヴァンティンから葉莢が排出される。だが、今回は炎を纏うことは無く、外見に大きな変化は見られない。

「行くぞ、レヴァンティン！」

<Schlange bei?en.>

電子音と共にシグナムがレヴァンティンを振る。

「なっ!?!」

レヴァンティンの刀身は刃の着いた鞭のよう伸びる。しかも少し伸びた、などというレベルではない。

周囲一帯を覆うように、元の刀身の長さからはありえない程伸びているのだ。

「くっ！」

（まさかこんなことまで出来るなんて！でもこれを潜り抜けられれば一気にチャンスに変わる！）

その瞬間、スザクの瞳の周囲は再び赤く染まる。

ありえない程伸びた刃の鞭はスザクへ波状攻撃のように次々と襲い掛かる。

スザクは強引に身体を捻りながら回避し、シグナムへと飛ぶ。

「やるな。だが！」

シグナムの攻撃はより一層激しさを増す。周囲にあるビルは巻き添えを喰らい、次々と破壊されていく。

「邪魔だ！」

回避しシグナムに向かい飛んでいく中、後ろから来た攻撃を左手に持っていたMVSで弾く。

攻撃は防いだものの、あまりの衝撃でMVSは弾き飛ばされてしまう。

だがそれでもスザクはお構い無しにシグナムへと向かう。

（まずいな、これ以上近づかれては分が悪くなる。）

スザクがここまで回避することはさすがに予想外だった。最初の数撃くらいは避けると考えていたが、現実はどうだ。全て回避、もしくは防がれている。

「このままではまずい、レヴァンティン！」

<J a w o h l . S c h w e r t f o r m .>

シグナムはレヴァンティンを元の剣へと戻そうとする。

が、シグナムはとっさにシールドを張る。

次の瞬間、MVSが飛来する。が、ギリギリのところでシールドに防がれ宙を舞う。

「はぁあぁあ！」

投函されたMVSに続くようにスザクの回転キックがシグナムを襲う。

だがその蹴りはシグナムに届くことはなかった。

「甘い！見えているぞ！」

スザクはMVSに氣をとられている間に決めるつもりだったのだらう。

しかしシグナムには見えていたため通用しなかった。

スザクが地面に着地すると同時にレヴァンティンは剣へと戻る。

「終わりだ！ 枢木！」

そう叫び、刃はスザクへと向かう――

「決着ついたね。なのは、大丈夫？」

「え、何が？ フェイトちゃん。」

「あの、なのはさん。大丈夫ですか？ なんか若干やつれてますけど。」

フェイトだけでなくフォワード陣からも心配されるのは。

「だ、大丈夫。気のせいだよ、きっと・・・」

「な、ならいいんですけど。」

「あれくらいのことで心配しすぎなんだよ、オメーは。大体よ、非殺傷設定なんだから大丈夫に決まってんだろ？」

なのはを心配するフェイトとフォワード、元気づけようとしているのかバカにしているのかよく分からないヴィータ。おそらく本人は元気づけようとしているのだろうが。彼女らをよそに、はやてはシャーリーと取ったデータの確認をしている。

「どうやシャーリー？」

「すごいですね。紫電一閃の威力を削ぐときの動きと、シユランゲバイゼンを避けるときの動きは常人の身体能力では考えられないほどレベルの高いものです。おそらくフェイトさんでもスザクさんのような回避の仕方は出来ませんよ。」

「そんなにか。つまりスザクくんは身体能力が特に飛びぬけてるわけか・・・」

「そういうことになりますね。でもホント信じられません。あんな動きが出来るなんて。それに最後の――」

そんな話をしている間にスザクとシグナムは戻ってくる。

「スザク君、お疲れ様。もうシグナムさんやりすぎですよ。無事に終わったからよかったものの・・・」

「過ぎたことだ、気にするな。それに枢木もやる気だったんだ。問題なかろう？」

「そ、それは・・・」

「まあまあ、なのは落ち着いて。でも私もスザクとやりたかったな。」

なのはをなだめるフェイトだが、ポロリと本音が漏れる。
やはり彼女も戦闘^{バトル}マニアなのだろうか。

「スザクさん！お疲れ様です！」

「・・・お疲れ様です。」

「ありがとう。」

「シグナム副隊長の鞭みたいになってた攻撃を回避するところなんです！僕もあんなふうになりたいです！」

「スザクさんってすごく強いんですね！」

フォワード陣から絶賛され、尊敬の眼差しまで向けられるスザク。だが、ティアナ1人だけは沈んでいるようだった。そこへシグナムが近づいてくる。

「枢木、まさかここまでやるとは思わなかった。出来れば次は最初から本気でしてもらいたいものだ。引き分けて終わるのは詰まらないからな。」

「あれが今の僕に出せる本気ですよ。それに、引き分けになったのはシグナムさんこそ本気をだしていなかったからでしょう？」

「ふっ。その言い方ではまだ上があると聞こえる。次を楽しみにしているぞ。」

そういつてシグナムは隊舎のほうへ戻っていく。

模擬戦の結果は引き分けだった。

シグナムがレヴァンティンを振った瞬間、スザクもMVSを振っており、互いに首元で剣をとめたのだった。

だがここで疑問が残る。スザクは2本あるMVSのうち1本はシュランゲバイゼンにより弾き飛ばされ、残る1本は投函したはずである。故に残っているはずがなかった。

確かに手許には残っていなかった。だが、投函したMVSはシグナ

ムのシールドで弾かれたために、宙に舞っていたのだ。
それを着地する前に再び取り、引き分けに持ち込んだというわけだ。
あの時MVSを投函したのはこのためであり、回転キックを入れる
ためではなかったのだ。

「さてと模擬戦も終わったし、データの整理もしたいし、戻ろうか。
」

「うん、分かった。」

「なのはちゃん、ゴメンな。」

「いいよ。さあみんな、教導再開するよ！」

教導再開でなのはたちは再び施設の方へ行ってしまった。

「さ、私らも行こうか。」

はやてにそう言われ、スザク、フェイト、シャーリーは隊舎へ戻る
べく歩みを進めるのだった。

第5話「ギアスの呪い」(後書き)

やヴええ・・・4000字程度で終わるはずが。
もう気づいたら6時間くらい執筆してるんですがw

本編の中で、レヴァンティンが剣の状態を指してS c h w e r t F
o r mと言っています。

これはシュヴェアトフォルムと発音します。

シュベルトフォルムじゃないの？って思われる方もいるかと思いますが。

公式ではシュベルトフォルムとカタカナ表記されますが
実際にアニメ本編ではシュヴェアトフォルムと発音されています。
レヴァンティンの言語がドイツ語な為です。

また、シュランゲバイゼンはアニメで名称が出ませんでしたが、D
V D ブックレットに正式に登場しています。飛竜一閃とは別の技で
す。

簡単に解説しておきます。

シュランゲバイゼン

レヴァンティンのシュランゲフォルムから繰り出される攻撃の総称。
シュベルトフォルムでは不可能な範囲や、中距離への攻撃が可能。
敵の移動、機動力も削ぐ事が出来る。

シュランゲバイゼン・アングリフ

レヴァンティンのシュランゲフォルムから、長く伸びる連結刃にシ
グナムの魔力を乗せて行う空間攻撃。強力なバリア破壊能力がある。
但し、発動中の移動が不可能になり、防御も困難になるという短所

もある。

具体的に如何なる要素を付加すると単なるシュランゲバイセンの領域を脱せるのかは、明言されていないのはつきりしない。

本編中での描写から推測すると、レヴァンティンに魔力を乗せるか乗せないか、もしくはシュランゲフォルムの刀身の展開長の違いと思われる。他にも包囲攻撃説などもあるがどれも推測の域を脱しない。

尤も、シュランゲバイセンはシュランゲフォルムでの攻撃の総称と謂うのであるから、シュランゲバイセン・アングリフの上位概念に位置するものと言うべきではある。

飛竜一閃

鞘にレヴァンティンを収めた状態でカートリッジをロードし魔力を圧縮後、シュランゲフォルムの鞭状連結刃に魔力を乗せ撃ち出すミドルレンジ対応の決め技。

本来は斬撃だが、砲撃に相当するだけのサイズと射程がある。魔力と連結刃の同時到達によって高い貫通力を持つ。本編中ではフェイトのプラズマスマッシュと相殺したところから、威力はほぼ互角と推測される。

第6話「証明の果てに」(前書き)

遅くなってしまい、申し訳ありません。

課題提出が今日だったもので。(講師の独断で結局延びましたがw)
今回、スザクはあまり出てきません。それどころかなのはたちもです。

ですが、それは仕方ないことなのです。まだスザク回じゃないんです。

もう少し先です。今しばらくお待ちを。

それと前回のあとがきにシグナムの技の簡単な解説をしました、
今回からあとがきに技に限らず、リリなのをより知るためのちよつとした豆知識コーナーを作りました。

よろしければどうぞ。

魔法少女リリカルなのはStrikerS(白き円卓の騎士) 第
6話、始まります。

第6話「証明の果てに」

「ちょっと寄り道しよか」

はやての発したその言葉が全ての始まりだった。

シグナムとの模擬戦の後、取ったデータを詳しく見るために部隊長室に戻る――はずだった。

しかし途中で別れたシャーリー以外の3人が着いた場所は医務室だった。

「どうして医務室に？ 部隊長室に行くんじゃないっけ？」

「あ、そっちはシャーリーに任せてあるから大丈夫や。それより服脱いでくれるか？」

「「は？」」

はやての爆弾発言にびったり声の重なるスザクとフェイト。

10年来の付き合いのフェイトでも、はやてのこの発言は予想外だったようである。

「は、はやて！？急に何言い出すの！」

スザクの裸を想像してしまったのだろうか。フェイトは顔を赤く染め上げ、あたふたしている。

「さすがに僕もいきなり脱ぐのはちょっと・・・」

「そ、そうだよ。裸になれなんて・・・」

さすがのスザクも引いている。どれくらいかと聞かれれば、かなり引いていると答えよう。

スザクがはやてに向ける視線はかなり痛い人を見る視線だった。しかし当の本人は平然としている。

「裸になれなんて言うたらへんよ。制服用意しやんとあかんから、身体のサイズ計らせてほしいんやけど」

「「へ？」」

再び見事に声が重なる2人。その二人の顔は見当違いなことを考えていたことが恥ずかしいのか、少し赤くなっている。

「あ、そうだったのか」

「だ、だよね」

「ははくん、2人とも変なこと想像しとったやろ？」

2人の想像していたことが分かったのか、はやてはいやらしい笑みを浮かべる。

それはもう最高の玩具を見つけたかのような笑みだ。

「そ、そんなことないよ！」

「は、早くサイズ計っちゃおうよ！」

「ま、これくらいにしとくわ。さ、上脱いでくれるか？」

「分かったよ」

はやてが笑みを収めたことで安堵のため息を漏らし、上半身裸になるスザク。

「ところで計測ははやてがするのかい？」

「違うよ。シャマルがもう来るから」

「はやてちゃん、お待たせしました」

スザクにとってまた初めて聞く名前が出た。

初めて聞く名前なら誰だってどんな人物か聞いてしまうだろう。スザクもそれは例外ではなかった。

しかし、実際にスザクが聞くことはなかった。聞く前に本人が医務室に入ってきたのだ。

「待ってへんよ、私らも今来たところから」

「よかったです。あ、そちらの方がスザク君ですね？」

「そうや」

「始めまして、六課で主任医務官を勤めていますシャルです。よろしく願いします」

「柘木スザクです。よろしくお願いします」

挨拶したものの、シャルはスザクのほうをじっと見つめている。

「あの、どうかしましたか？」

「あなた・・・いい身体してるわね。すごく引き締まってるわ」

「そうだね。スザクの身体って細いのにしっかり筋肉ついてて引き締まってるね」

「確かにええ身体しとるわ。あのスゴイ身体能力をこんな細い身体が生み出してるなんてな・・・」

「そうかな？普通だと思うけど」

シャルの発言をきっかけに改めてスザクの身体をまじまじと見る
フェイトとはやて。

言い出した本人であるシャルは医務官ということもあり、見慣れ
ているのか大して気にしている風でもない。

しかし、フェイトとはやては歳が近いこともあり意識してしまうの
か、2人の顔にはやや赤みが差している。

スザクは身体を見られることくらいどうとも思わないのか、平然と
している。

「それで――」

「はやてちゃん」

スザクが何か言いかけたとき、なのはから通信が入る。

「なのはちゃん、どないしたんや？」

「スザク君のことだけど、怪我はして無いみたいだけど一応検査し
ていたほうがいいかと思って」

「あゝ、それならちょうどええわ。今医務室におるからついでにシ
ヤマルに見てもらおうわ。」

「え、なんで医務室にいるの？」

なのはの記憶ではデータの詳細を閲覧するために部隊長室へ向かったはずだ。

それが今、どうして医務室にいるのか分からなかった。

はやてもスザクの検査のために行ったのかとも思ったが、先ほどの発言から違うと結論を得た。

「いや、スザクくんの制服用意しなあかんやろ？そやからサイズ計ろうと思ってな」

「あ、そうだったんだ。制服まだ用意して無いもんね」

「それはそうとな、スザクくんってええ身体しとるよ」

「えっ？」

「ほら、見てみ。」

どうやらなのはと話しているうちに計測が始まっていたようで、シヤマルに計測されているスザクをモニターに映す。ちなみにフェイトは未だに頬を紅潮させてスザクを見ている。

「あ………」

なのはの目に映ったスザクの身体にはしっかり筋肉がついている。
だからといってムキムキマッチョな訳ではなく、スラリとした体型
をしている。

そして長い手足が身体の線の細さをより一層強調しているように見
える。

なのはもフェイトやはやて同様、異性関係は疎いためにこういった
ことで頬を紅潮させてしまう。

「どうや？ええ身体しとるやろ」

「・・・そ、そうだね」

「ほんま、あの細い身体があんな身体能力生み出してるなんて信じ
られへんわ」

「う、うん。わ、私教導あるから切るね。それじゃ！」

「あ、なのはちゃん——って、早いな。もう切れてしもたわ」

（スザク君の裸見ちゃった・・・ど、どうしよう。）

スザクの裸（正確には上半身裸）が頭に焼き付いて離れないのは
は、そちらにばかり意識が言ってしまう教導どころではなかったと
か。

これがスザクではなく、他の男性ならばなのはもこうはならなかっただろう。
上半身を見たくらいでこうなってしまうのだ、やはりスザクを1人の男性として無意識のうちにでも少なからず意識してしまっているのだろう。

——翌日

なのは、フェイト、はやて、リイン、シャマル、ザフィーラ、フォワード陣はミッドチルダ首都南東地区上空をへりにて飛んでいた。

「ほんなら改めて、ココまでの流れと今日の任務のおさらいや。これまで謎やったガジェットドローンの製作者及びレリックの収集者は、現状ではこの男。違法研究で広域指名手配されてる次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティの線を中心に捜査を進める」

「こっちの捜査は主に私が進めるんだけどみんなも一応覚えておいてね」

「」「はい」「」

スカリエッティとははやてが言ったとおり広域指名手配されている次元犯罪者であり、フェイトが数年前から追いかけている人物である。

先ほどまで2人の話を聞いていたリインがモニターの前まで移動し、フォワードたちのほうへ向き直る。

「で、今日これから向かう先はここ、ホテル・アグスタ」

「骨董美術品オークションの会場警備と人員警護。それが今日のお仕事ね」

行き先を告げるリインに続き、なのはが今日の任務の内容をフォワード陣へと伝える。

「取引許可の出ている古代遺失物ロストロギアがいくつも出品されるので、その反応をレリックと誤認したガジェットが出てきちゃう可能性が高い、とのことで私たちが警備に呼ばれたです」

リインが説明している途中、ザフィーラの耳がピコピコ動いているのが気になったスバルは撫で出す。

真面目な話をしているのになんと言う緊張感のなさか。

いや、それ以前に誰も注意しない方が問題じゃないのだろうか。

「この手の大型オークションだと密輸取引の隠れ蓑になったりもするし、色々油断は禁物だよ」

「現場には昨夜からシグナム副隊長と、ヴィータ副隊長にスザクくん。他にも数名の隊員が張ってくれる」

はやてが言うように、モニターには現場にいるスザクたちの姿が映っている。

実はスザクには昨日のうちに伝えられており、昨日の昼から既に警備に当たっていた。

「私たちは建物の中の警備に当たるから、前線は副隊長たちの支持にしたがってね」

「「「はい」」」

「あの、シャマル先生。さっきから気になってたんですけど、その箱って――」

キヤロがシャマルの足元にある3つの箱を指差しながら質問する。

「ん？ ああ、これ。うふつ、隊長たちのお仕事着」

笑顔で返すシャマルだった。

——ホテル・アグスタ（内部）

「会場内の警備はさすがに厳重っ」と

「一般的なトラブルには十分に対処できるだろうね」

「外は六課の子達が固めてるし、入り口には防災用の非常シャッターもある。ガジェットがここまで入ってくるゆーんはなさそうやしな」

「うん、油断は出来ないけど少し安心」

「ま、どっちにしても私たちの出番はホンマの非常事態だけや。それにしてもこのドレス姿、スザクくんに見せたかったな」

「わ、私はいいよ」

「なのはちゃん赤なってるで。見せたところ想像したんとちゃう？」
物騒な会話をしているかと思えば、急に関係ない会話をしだしたの

はドレスに身を包んだ2人の女性——なのはとはやてだった。
ここに来る前、ヘリの中でシャルマルが言っていたお仕事着とは、こ
のドレスのことだったのだ。

廊下を歩く金髪の女性——フェイトも同じくドレスに身を包んで
いる。

「オークション開始まであとどれくらい？」

<Three hours and twenty seven
minutes>

「うん」

——ホテル・アグスタ（外部）

『でも今日は八神部隊長の守護騎士団全員集合か』

『そうね、アンタは結構詳しいわよね。八神部隊長とか副隊長たち

のこと』

『うん、父さんやギン姉から聞いたことくらいだけど、八神部長の使ってるデバイスが魔道書型で、その名前が夜天の書っていうこと。副隊長たちとシヤマル先生、ザフィーラは八神部隊長個人が保有している特別戦力だってこと。で、それにリイン曹長合わせで6人そろえば無敵の戦力ってこと。ま、八神部隊長の詳しい出自とか能力の詳細は特秘事項だから私も詳しくは知らないけど』

スバルとティアナは警備をしつつも念話で会話しているようだ。

『希^{レア}少^{スキル}能力持ちの人は皆そうよね』

『ティア、なんか気になるの？』

『別に』

『そう、じゃまた後でね』

警備に専念するために念話は終わったようだ。

しかしティアナの表情はあまり晴れない。何か悩んでいるかのよう
な、少し沈んだ表情をしている。

（六課の戦力は無敵を乗り越して明らかに異常だわ。八神部隊長が
どんな裏技使ったのかは知らないけど、隊長格全員がオーバーS。
副隊長でもニアSランク。他の隊員たちだって前線から管制官まで

未来のエリートたちばかり。あの歳でもうBランクを取ってるエリオと、希少^{レア}で強力な竜召喚師のキャロは2人ともフェイトさんの秘蔵っ子。危なっかしくはあっても潜在能力と可能性の塊で、優しい家族のバックアップもあるスバル。それに・・・枢木スザク。ランクに当てはめるならA Aは硬い。それに本人の発言が本当ならまだ上がある。やっぱりウチの部隊で凡人はあたしだけか。」

そこまで考えたティアナは一端目を閉じる。
そして再び開いた目には強い意志が感じられる。

（だけど、そんなの関係ない。あたしは、立ち止まるわけにはいかないんだ）

とある森の中、フードを被った男と少女が手をつないで立っている。
雰囲気からして家族というわけでもなさそうだ。

「あそこか。お前の探し物はココにはないのだろう？」

男がそう問いかけるが、少女は男の顔をじっと見つめたままだ。

「何か気になるのか？」

「うん」

そのときだった。小さな機械の虫のようなものが飛んでくる。少女が人差し指を出すと、その虫のようなものはそこに止まり、動く。足をじたばたさせているという表現が一番ぴったりだろうか。

「ドクターの玩具が近づいてきてるって」

——ホテル・アグスタ（外部）

屋外にて警備中のシャマルのデバイス、クラーレルヴィントが光を発

する。

「クラールヴィントのセンサーに反応。シャーリー」

「はい。来た来た、来ましたよ」

「ガジェット・ドローン陸戦？型、機影30・・・35」

「陸戦？型、2、3、4！」

シャーリーと同じくロングアーチスタッフであるアルトとルキノが、
捉えた反応の正体を告げる。

——ホテル・アグスタ（地下駐車場）

「エリオ、キャロ、お前たちは上に上がれ。ティアナの指揮でホテル前に防衛ラインの設置をする」

「「はい」」

「ザファイラは私と迎撃に出るぞ」

「心得た」

「えっ！？」

「ザフィーラって喋れたの!？」

「ビックリ・・・」

エリオとキャロはザフィーラが喋れたことを知らなかったようだ。とくにキャロはかなり驚いている。

「守りの要はお前たちだ。頼むぞ」

そういう残し、ザフィーラはシグナムと共に迎撃に向かう。

「前線各員へ、状況は広域防御戦です。ロングアーチ01の総合管制とあわせて私、シャマルが現場指揮を行います」

「スターズ03、了解!」

「ライトニングF、了解!」

「スターズ04、了解!」

フォワード陣全員がホテル前に防衛ラインを設置すべく移動する。

「シャル先生、あたしも状況を見たいんです。前線のモニター、もらえませんか！」

「了解、クロスミラージュに直結するわ。クラールヴィント、お願いね」

<Ja.^{ヤー}>

シャルがクラールヴィントに口付けすると、一瞬のうちにバリアジャケットへと換装する。

『シグナム、ヴィータちゃん』

『おう、スターズ02とライトニング02出るぞ！』

これまた一瞬にしてバリアジャケットへと換装した2人は当然ながら飛行し、ガジェット迎撃へと向かう。

「新人共の防衛ラインまでは一機たりとも通さねえ。速攻でぶっ潰す」

「お前も案外過保護だな」

「うるせえよ」

シグナムにからかわれ（？）ながらもガジェットへ向け、降下して
いくのだった。

——ホテル・アグスタ（会場内）

『フェイトちゃん、主催者さんは何だって？』

『外の状況は伝えただけど、お客の非難やオークション中止は困
るから開始を少し延ばして様子を見るって』

『そう』

何機ものガジェットがアグスタへ向かって移動している。

陸戦？型は素早く木を避けながら、陸戦？型は木をなぎ倒して進んでいる。

そこへ到着したシグナムとヴィータ。

「私が大型を潰す。お前は細かいのを叩いてくれ」

「おおよ」

それだけ言うとシグナムは？型を潰すべく、森の中へと降りていく。

「行くぞアイゼン！」

<Ja^{ヤヴォール}wohl.>

ヴィータは足元に魔法陣を展開し、8つの魔力弾を作り出す。

「まとめて……ぶち抜けー！ー！」

ハンマーフォームのグラーフアイゼンを2度振り、全弾を打ち出す。打ち出された弾丸はガジェットが展開するAMFをいともたやすく

貫通し、爆散させる。

地面に降り立ったシグナムもヴィータ同様に足元に魔法陣を展開する。

「レヴァンティン」

＜Explorion＞
エクスプロズイオン

レヴァンティンの刀身に炎が発生する。

スザクとの模擬戦時にもみせたが、本来レヴァンティンに寄せられているのは魔力である。

炎が追加効果として付与されるのはシグナムとレヴァンティンが持つ、魔力を炎熱変換する能力のためである。

レヴァンティンを上段に構え、ガジェット？型へと飛び掛る。

「紫電・・・一閃！」

シグナムもまた一撃でガジェットを沈めていく。

少しはなれた場所ではザフィーラが迎撃している。

ザフィーラに向け、ガジェットがレーザーのようなものを何発も撃ち出す。

だがそれがザフィーラに届くことはなかった。全て障壁で弾かれる

だけだったのだ。

障壁を展開したまま足元に魔法陣を展開する。

「ここは通さん！うおりゃあああ！」

ザフィーラの雄叫びと共に地面が割れ、棘にも見えるモノがガジェットを貫き次々と爆散させていく。

この魔法は鋼の軛くびきという拘束魔法であるため、本来の用途と違う気がしないでもない。

「副隊長たちとザフィーラすごい！」

「これで能力リミッター付き」

シグナムたちの強さを見て、若干はしゃいでいるように見えるスバル。

それと対照的なのがティアナだった。自分との能力の違いを見せ付けられたティアナは拳を強く握る。

男と少女が、六課メンバーとガジェットにより行われている戦闘を見ていた。

そこへ、通信が入る。

「御機嫌よう。騎士ゼスト、ルーテシア」

「御機嫌よう」

「何のようだ」

通信はスカリエッティから入っていた。

ルーテシアと呼ばれた少女はごく普通に返していたが、ゼストと呼ばれた男の方はろくに挨拶もせず、要件を聞き出す。

この態度からゼストはスカリエッティに対してあまりいい感情を持っていないようだ。

「冷たいね。近くで状況を見ているんだろう？あのホテルのレリックはなさそうだったが、実験材料として興味深い骨董が一つあるんだ。少し協力してはくれないかね？君たちなら実に造作も無いはずのことなんだが」

「断る。レリックが絡まぬ限り、互いに不可侵だと決めたはずだ」

「ルーテシアはどうだい？頼まれてくれないかな？」

ゼストに言っても無駄だと瞬時に理解したスカリエッティはルーテシアへと言葉を向ける。

「いいよ」

「優しいな。ありがとう、今度ぜひお茶とお菓子でも奢らせてくれ。君のデバイス、アスクレピオスに私のほしいもののデータを送ったよ」

「うん。じゃあ、御機嫌ようドクター」

「ああ、御機嫌よう。吉報を待っているよ」

通信を切ると、着ていた上着を脱ぐルーテシア。

「いいのか？」

「うん。ゼストやアギトはドクターを嫌うけど、私はドクターのひとそんなに嫌いじゃないから」

「そうか」

アスクレピオスを起動させ、足元に魔方陣を展開するルーテシア。彼女のデバイスはキャロのケリュケイオンに酷似している。その点からしておそらくブーストデバイスなのだろうか。

「あの男の方はなかなか出来るようだが、娘の方がどうみても戦士には見えんな」

眼帯をつけた男が白衣の男、スカリエッティに向かって投げかける。

「あの子は召喚師ではあっても、君のように戦士ではないからね。」

「使えるのか？」

「ああ、とても優秀な子だよ」

「まあじっくり見させてもらおう」

スカリエッティと眼帯の男が話している中、もう1人の男が口を開く。

「ああ、このサルどもを早く殺してみたいものだ」

発言からして常人が発するものとは思えないことを言い出す。

「そう慌てるな。今はまだそのときではない。今しばらく待て」

「分かっていますよ、ヴァルトシュタイン卿」

ヴァルトシュタインと呼ばれた男は、ならいいがとだけ返し、再びモニターに視線を向ける。
そんな2人にスカリエッティは面白いモノを見つけたかのような視線を向けていた。

「あっ!？」

ケリユケイオンが突然反応を示したことに少し驚きの声を上げるキヤロ。

「ん？キヤロ、どうしたの？」

「近くで、誰かが召喚を使ってる」

「クラールヴィントのセンサーにも反応。だけど、この魔力反応って！？」

「お、大きい・・・」

反応した大きな魔力反応に驚くシャマルとシャーリー。

ルーテシアは大量の超小型羽虫、インゼクトを召喚した。
インゼクトの大群はガジェットへと取り付く。

シグナムがレヴァンティンを振り下ろすが？型はアームを伸ばして受け止める。

ヴィータも魔力弾を撃ち出すが回避され、一機たりとも落ちなかった。

「何！？」

「な、なんだ？急に動きがよくなりやがった」

「自動機械の動きじゃないな」

「有人操作に切り替わった？」

「それがさっきの召喚師の魔法？」

戦闘しているシグナムたちだけではなく、映像を見ているシャマルたちのほうにも伝わる。

「ヴィータ、ラインまで下がれ。向こうに召喚師がいるなら新人たちの下へ回り込まれるかもしれん」

「わ、分かった」

ヴィータは慌てて防衛ラインへと引き返す。

『ザファイラ、シグナムと合流して』

『心得た』

「遠隔召喚、来ます！」

同じ召喚師であるキャロは召喚が来ることを察知する。
フォワードメンバーの前に十数機のガジェットが召喚される。

「これって、召喚魔法陣!？」

「召喚ってこんなことも出来るの!？」

「優れた召喚師は転送魔法のエキスパートでもあるんです」

「何でもいいわ。迎撃行くわよ」

ティアナはクロスミラージュにカートリッジを装填しながら迎撃開始の指示をだす。

「「おう」「」」

（今までと同じだ。証明すればいい。自分の能力と勇気を証明して、あたしはそれでいつだってやってきた。）

ティアナは足元に魔法陣を展開する。自分の能力を証明^{ちから}するため。

「ドクターの探し物、見つけた。ガリユー、ちょっとお願いしていい？ 邪魔な子はインゼクトたちが引き付けてくれる。荷物を確保して。気をつけて行ってらっしゃい」

ルーテシアがそう言うときアスクレピオスから黒い影が飛んでいく。ガリユーとは一体何なのだろうか。

防衛ラインではフォワード陣が攻撃しているが、ガジェットが有人

操作されているような動きをするため、一向に数が減らない。

おまけに？型改と呼ばれる、T字型シールドをバックに着け左右に6連装ミサイルポッド×2を装備しているものまでいる。

ティアナはそのミサイルを打ち落とすが、そちらに気を取られるあまり後ろから迫ってきたガジェットに反応が遅れる。

「ティアさん！」

「くっ！」

キヤロが叫ぶが回避は間に合わない。直撃する——ティアナもキヤロもそう思った。

しかし、それよりも早く直上よりものすごい勢いで急降下してくるモノがあった。

ティアナの前に降りたソレは、着地と同時に360度旋回して勢いを殺し、腕から緑色のシールドを発生させ、ガジェットの攻撃からティアナを守ったのだった。

そしてすぐに銃から緑の弾丸を発射し、ガジェットを撃墜する。

「枢木さん・・・」

「大丈夫かい？」

「あ、はい。・・・ありがとうございます」

「気をつけるんだ。一方ばかりに気をとられていてはダメだ」

「は、はい！」

（何やってんのよあたし！能力を証明しなきゃいけないのに！）
ちから

悔しそうな表情を浮かべながらも次のガジェットへと攻撃を再開する。

ティアナは攻撃しつつも意識を少しスザクへと向ける。

華麗な動きでガジェットの攻撃を回避し、剣で両断していく様が目に映る。

そんなとき、シャマルから通信が入る。

「防衛ライン、もう少し持ちこたえててね」

「はい！」

「ヴィータ副隊長がすぐに戻ってくるから」

「守ってばっかじゃ行き詰ります！ちゃんと全機落とします！」

「ティアナ大丈夫！？無茶しないで！」

「大丈夫です。毎日朝晩練習してきてんですから」

心配をよそに、ティアナは打って出る。

「エリオ、センターに下がって。私とスバルの2トップで行く」

「あ、はい」

「スバル！クロスシフトA行くわよ！」

「おう！」

元氣よく返事を返したスバルはウイングロードをガジェットのほうへ向け、注意を引き付ける。

（証明するんだ。）

ティアナはツーハンドモードにしているクロスミラージュのカートリッジを格2発つつロードし、魔法陣を展開する。

（特別な才能やすごい魔力がなくなっちゃって、一流の隊長たちがいる部隊でだって、どんな危険な戦いだって）

ティアナの周囲に十数発の魔力弾が出現する。

「私は、ランスターの弾丸はちゃんと敵を打ち抜けるんだって」

『ティアナ、4発ロードなんて無茶だよ。それじゃティアナもクロスミラージュも！』

「撃てます！」

<Yes.>

シャーリーの静止を聞かず、クロスミラージュを正面に構える。

「クロスファイヤー」

それと同時に腕を横へと引く。

「シュート！」

腕をクロスさせるように振ると同時に、魔力弾が発射される。

「うあああああ！」

それだけではなく、さらに正面に構えると本体からも魔力弾を連発する。

放たれた魔力弾は次々にガジェットに命中し、落としていく。

そんな中、1発外れた魔力弾が注意を引いていたスバルのほうへと向かっていく。

「はっ！？うわっ！」

スバルもそれに気づくが、既に回避不能のところまで来ている。突然の出来事に防御することすら出来ない。
当たる――スバルはそれだけは理解できた。

「ヴィータ副隊長！？」

「ティアナ！このバカ！無茶やった上に味方撃ってどーすんだ！」

「ああっ・・・」

ティアナは自分がミスをしたことにショックを受けたのか、呆然と立ち尽くしている。

結果として、スバルにティアナのミスショットは当たらなかった。
スザクがヴァリスから放った弾丸で撃ち落としたのだ。
そしてそこへちょうどヴィータが到着したのだった。

「あの、ヴィータ副隊長。今のもその、コンビネーションのうちで――」

「直撃コースを撃つのがコンビネーションなのかい？」

「違うんです！今のは私がいけないんです！」

スバルの言葉を遮るように質問をぶつけるスザク。さすがにスザクも先ほどのミスショットは見過ごせる範囲ではなかったのだろう。

その言葉には怒りが込められていた。

何とかしてティアナを庇おうとするスバルだが、そんな行動が余計にヴィータを怒らせる。

「うるせえバカ共！もういい、後はアタシとスザクでやる。2人まとめてすっこんでろ！」

その頃、地下駐車場ではトレーラーが荒らされているのが警備員によって発見されていた。

「ガリユー、ミッションクリア。いい子だよ。じゃあ、そのままドクターに届けてあげて」

「品物はなんだったんだ？」

「分かんない。オークションに出す品物じゃなくて密輸品みたいだ

けど」

「そうか」

ルーテシアはゼストから受け取った上着を着る。

「戦いもう終わりだ。前線の騎士たちが中々良い戦いをした」

着終わったルーテシアがゼストのコートをつかむ。

「さて、お前の探し物に戻るとしよう」

それに頷いたルーテシアは、ゼストと共に森の中へと消えていった。

「おーし、全機撃墜」

「こっちもだ。召喚師は追い切れなかったがな」

スザクとヴィータの元にシグナムとザフィーラが戻ってくる。

「だが、居ると分かれば対策も練れる」

「だな」

「ん？ ティアナは？」

スバルとティアナが見当たらないのでエリオ達に聞くヴィータ。さつき自分ですっこんでろ言ったことを覚えてないのだろうか？ いや、そうではない。叱ったとはいえ、どこかへ行くとまでは思わなかったのだろう。

「裏手の警備に」

「スバルさんも一緒です」

「・・・・・・」

それを聞いたヴィータは何を思ったのだろうか。

ホテルの裏手にスバルとティアナはいた。

「ティア、向こう終わったみたいだよ」

あんなことがあったあとだ、さすがのスバルでも話しかけずらそうにしている。

「・・・あたしはここを警備してる。あんたはあっち行きなさいよ」

返すティアナはやはり元気が無い。むしろあったほうが問題だが。

「あのね、ティア」

「いいから行って」

「ティア、全然悪く無いよ。私がつとちゃんと――」

「行けって言ってんでしょ！」

大声を上げるティアナにビクっとするスバル。
今優しい声をかけられたところでティアナにはつらいだけだ。

「ごめんね、また後でねティア」

それを察したスバルはそれだけ言い残すと走り去る。残されたティアナは壁に手をつく。

「あたしは・・・あたしは・・・」

その瞳からは涙が次から次へと溢れ出てくるのだった。

第6話「証明の果てに」(後書き)

早速いつてみましょう、リリなの豆知識コーナー！

注) あくまで深く知らない人のためのコーナーであるということを理解したうえで読みください。

正式にコーナーとして発足したのが今回からなので第1回ということにします。

第1回は、作者が大好きなのはさんの切り札、スターライトブレイカー(以降SLBと表記)についての豆知識です。

SLBは収束砲の一種といわれています。

ですが！そもそも収束砲って何？って話ですよ。

簡単に言ってしまうと、術者自らの魔力のみならず、周囲に散らばった魔力を集めて放つ魔法です。

故に、術者に僅かな魔力しか残っていなくても状況によっては強力な砲撃を行えるということですね(トリガーを引くための最低限の魔力は必要)。

自分で出した発射体を戻したり集めたりするのは少し練度の高い魔導師なら誰でも可能ですが、使用を終えて空中に拡散した魔力をもう一度実使用レベルで集めるのはSクラス以上の技術とされています。

SLBは発射時間はデインバスターに比べて短く、収束中は全く動けない上に、距離による減衰が激しいため距離をとられると威力が落ちるという欠点があります。

また、アニメ本編では明言されていませんが、2期2話にて結界を破るために使用されたSLBは、スターライトブレイカー+というもので、結界機能完全破壊能力を備えます。

欠点には目を瞑り、長所である破壊力をさらに伸ばしています。ちなみにチャージは約10秒。

そして、エクセリオンモードで放つのがスターライトブレイカーexと呼ばれます。

マガジン内のカートリッジを全て使用するため、チャージ時間がおよそ半分まで短縮されます。

発射後は本人が一定時間魔法行使不可能、レイハの機構にも負担が掛かるため、ほぼ戦闘不可能に。

まだあります。StSにおいてブラスターモードで使用したものはスターライトブレイカーex-fbといいます。

exに加え、ビット4基からの砲撃も加えた全方位型です。

限界をはるかに超えるため、術者デバイス共に計り知れない負担が掛かります。

スターライトブレイカーすごいですね・・・

こんな感じにやっていこうかと思えます。別に知らなくても困らないような知識ですが、なのは好きとしては知っていると嬉しくなります。

作者だけでしょうか？

読者様からの質問にも答えようかと思えます。

●●ってSLBみたいにバリエーションあるの？とかで構いません。なければ作者が勝手にチョイスして書こうと思います。

長くなりましたが、これからよろしくお願いします。

P・S・

まだ始まったばかりなのに、既に続編の構想考えてたりします（笑
まあ、執筆するかどうかは別としてですがw

第7話「願い」(前書き)

ようやく投稿できました。

第7話です、どうぞ。

第7話「願い」

「みんなお疲れ様。じゃあ今日の午後の訓練はお休みね」

「明日に備えてご飯食べて、お風呂でも入ってゆっくりしてね」

「」「はい！」「」

ホテル・アグスタの一件が片付き六課の職員寮へと戻ってきたメンバーたち。

夕日が沈む少し前くらいの時間になっていた。

フォワード4人が寮の入り口の前まできたとき、ティアナが少し重い口を開く。

「スバル・・・あたしこれからちょっと1人で練習してくるから」

「自主練？私も付き合うよ」

「あ、じゃあ僕も」

「私も」

「ゆっくりしてねって言われたでしょ。あんたたちはゆっくりしてなさい。それにスバルも、悪いけど1人でやりたいから」

「・・・うん」

エリオとキャロの2人は断られると思っていなかったのか、少々意外だといった感じの表情を浮かべる。
それに対してスバルは、暗い表情を浮かべるのだった。

「あのさ、2人ともちよつといいか？」

「あ、うん」

寮内を歩く隊長副隊長陣、シャーリー、スザク。

先ほどヴィータがなのはとフェイトに時間を作ってもらったことで、一同はとある一室にいた。

「訓練中から時々気になってたんだよ、ティアナのこと。強くなりたいなんてのは若い魔導師ならみんなそうだし、無茶も多少はするもんだけど時々ちょっと度を越えてる。あいつ、ココに来る前なんかあったのか？」

「それは僕も少し思ったよ。戦っているのを見たのは今日が初めてだけど、かなり無茶をしているように見えたよ」

「来たばかりのスザク君にもそう見えちゃうんだ・・・」

ヴィータの質問にスザクも同じようなことを思っていたようだ。まだこちらへきて数日だというのにそんなことに気づくあたり、やはりこういった戦いに関することではスザクは天才的である。

スザクとヴィータの言葉を聞いたのはは、少々くらい表情を浮かべ俯くのだった。

夕日が差し込む寮の自室でティアナは1人いた。机に待機モードのクロスミラージュを置くと引き出しを開ける。

そこには小型の銃と一枚の写真が入っていた。その写真にははしやいでいる少女と、優しそうな笑みを浮かべる青年が写っていた。

「ティアさんのお兄さん」

「うん。執務官志望の魔道師だったんだけど、ご両親を事故で亡くしてからはお兄さんが1人でティアを育ててくれたんだって」

そう話すスバルとキャロは一緒にお風呂に入っている。やはり寮のお風呂なだけあって広く作られている。

「だけど・・・」

「亡くなっちゃったんですか？」

「ティアがまだ10歳のときにね」

なのはモニターに1人の青年の映像を映し出す。

「ティアナのお兄さん、ティード・ランスター。当時の階級は一等空尉、所属は首都航空隊。享年21歳」

「結構なエリートだな」

「そう、エリートだったから、なんだよね。ティード一等空尉が亡くなったときの任務、逃走中の違法魔導師に手傷は負わせたんだけど取り逃がしちゃって」

「まあ地上の陸士部隊に協力を仰いだおかげで犯人はその日のうちに取り押さえられたそうなんだけど」

「その件についてね、心無い上司がちょっと酷いコメントをして一時期問題になったの」

「コメントって、何て？」

お風呂から上がったスバル、エリオ、キャロは一緒にドリンクを飲んでいた。

「犯人を取り逃がすなんて首都航空隊の魔導師としてあるまじき失態で、たとえ死んでも取り押さえるべきだった、とかもつと直球に任務を失敗するような役立たずは云々とか」

「ティアナはそのときまだ10歳。たった1人の肉親を亡くして、しかもその最後の仕事が無意味で役に立たなかったって言われて・・・きつともものすごく傷ついて悲しんで」

そう語るなのはの表情はやはり暗いものである。
そして当然、その話を聞いている一同も暗い表情を浮かべているの

だった。

「だからティアは証明するんだって、お兄さんが教えてくれた魔法は役立たずじゃない。どんな場所でも、どんな任務でもこなせるって。それで残された夢を、お兄さんが叶えられないで終わっちゃった執務官になるって夢を叶えるんだって。ティアがあんなに一生懸命で必死なのはそのせいなんだよ」

エリオとキャロに語るスバルもやはり沈んだ表情を浮かべているのだった。

なのはとスバルがティアナの過去を語っていたころ、ティアナは外で1人訓練をしていた。

現在、すっかり日は沈んでしまい辺りはすっかり暗くなっている。今もティアナは訓練を続行しているため、すでに数時間続いていることになる。

そこへ誰かが近づいてくる。背丈からして男性だろう。

「もう4時間も続けてるぜ。いい加減倒れるぞ」

「ヴァイス陸曹」

ティアナへと近づいてきた男性は六課でヘリパイロットをしているヴァイスだった。

「見てたんですか？」

「ヘリの整備中にスコープでちらちらとな。ミスショットが悔しいのは分かるけどよ、精密射撃なんざそうホイホイ上手くなるもんじゃねえし、無理な詰め込みで変なクセつけるのもよくねえぞ」

それを聞いたティアナは軽くヴァイスを睨み付ける。ヘリパイロットでしかないヴァイスに言われたことが許せないと言った所だろうか。

ティアナに睨まれ若干たじろぐヴァイス。

「つて、昔なのはさんに言われたんだよ。俺はなのはさんやシグナム姐さんとはわりと古い付き合いでな」

「それでも詰め込んで練習しないと上手くななんないんです。凡人なもので」

そう言ってヴァイスに背を向けて訓練を再開するティアナ。

「凡人か・・・俺からすりゃお前は十分に優秀なんだがな。うらやましいくれえだ」

だがティアナはもう聞いていないのか、返事を返さない。

「はあ・・・ま、邪魔する気はねえけどよ、お前らは身体が資本なんだ。体調には気いつかえよ」

「ありがとうございます。でも大丈夫ですから」

ヘリの整備に戻ろうとしたヴァイスの視界にとある人物が映る。ヴァイスはその見知った人物へと近づいていく。

その人物も気づき、顔をヴァイスのほうへと向ける。

「よっ、スザク」

「ヴァイス？どうしてここに？」

「ヘリの整備してたんだが、ちよいとティアナの様子見にな」

「そうか」

この2人、実は既に打ち解けている。ではいつそう思ったと思うだろう。

昨日の午後ホテル・アグスタへとスザクやシグナムたちを連れて行ったのがヴァイスなのである。

そのときから名前で呼び合うようになっていたのである。

「スザクから見てもうだ？ティアナはよ」

「僕から見ても無茶しているように見えるよ」

「やっぱそうか。でも俺が言ったところで聞きやしねえし。スザク、お前の言うことなら聞くんじゃねえか？」

「ここに来て日が浅くてよく知らない僕の言うことなんかもつと聞かないさ」

「そうだよなあ、スザクの言うこと聞いてりゃ今頃ここで訓練なんかしてねえな」

じゃあ俺ヘリの整備に戻るわ、と立ち去るヴァイス。

スザクも少しティアナのほうを見ていたあと、その場を後にするの

だった。

既に日付は変わっていた。スバルは寮の自室にてリボルバーナックルの手入れをしていた。そこへドアが開きようやくティアナが戻ってきた。

「ん？ティア」

「なんだ、まだ起きてたの？」

「うん」

「あのさ、あたし明日4時起きだから目覚ましうるさかったらごめんね」

そう言うときとさつさとベッドへ入り、寝る体勢になるティアナ。

「いいけど、大丈夫？」

「うん」

それを聞いたスバルは部屋の電気を消し、自らも眠りに着くのだった。

早朝、けたたましい目覚ましの音が部屋に響き渡る。

「ティア、ティア起きて4時だよ。おゝきて」

するとうつつ伏せに寝ていたティアナが頭の先へと腕を伸ばし、目覚ましを止める。

その表情からとても眠そうであることが伺える。対するスバルはいつもどおりといった感じで全く眠そうではない。

「あ・・・ゴメン、起きた」

「練習いけそう？」

「行く」

「そう、じゃあはい。トレーニング服」

「ありがとう」

「さて、じゃあ私も」

眠そうな目をしながら服を着替えようとするティアナの横でスバルも着替えを始める。

ティアナはスバルのその行動で一気に目が覚める。

「って、なんでアンタまで!？」

「1人より2人のほうが色んな練習できるしね。私も付き合う」

「いいわよ、平気だから。あたしに付き合ってたらまともに休めないわよ」

「知ってるでしょ？私、日常行動だけなら4〜5日寝なくても平気だって」

「日常じゃないでしょ。アンタの訓練は特にきついんだから、ちゃんと寝なさいよ」

「や〜だよ。私とティアはコンビなんだから、一緒にがんばるの！」

「あ・・・勝手にすれば？」

「えへへ」

ティアナはスバルに背を向ける。その顔は少し赤くなっていた。

「で、ティアアの考えてることって？」

「短期間で、とりあえず現状戦力をアップさせる方法。上手くできればあんたとのコンビネーションの幅もグッと広がるし、エリオやキャロのフォローももっとできる」

「うん、それはワクワクだね」

「いい？まずはね——」

そういつてスバルとティアナ、2人だけの早朝訓練が始まるのだった。

「じゃあ引き続き個人スキルね。基礎の繰り返しになるけど、ここはしっかりがんばろう！」

「「「はい！」」」

いつもより張り切った返事をするスバルとティアナに少し驚いた表情を浮かべるのはたち。

「ティアナとスバルはなんだかご機嫌だけど、何かいいことあった？」

「あ、いえ」

「なんにも」

なのはの訓練が始まる。ティアナはいつもどおり、スフィアを素早く精密射撃で落としていく内容だった。

ティアナとスバルは早朝だけでなく、夜遅くまで自主練に励んでいた。

（まずは急いで技数を増やさないといけないんだ。幻術は切り札にはならないし、中距離から撃ってるだけじゃそれが通用しなくなつたとき必ず行き詰る。あたしのメインはあくまでシャープシュート。兄さんが教えてくれた精密射撃だけど、それしか出来ないからダメなんだ）

なのはの早朝訓練が始まる前の早朝自主練、午後の訓練が終わった後の夜遅くまでの自主練、その自主練にいつのまにかエリオとキャロも加わり数日が過ぎていく。

（行動の選択肢をもっともっと増やすんだ。）

時には吐いてしまうこともあった。でも、それでもティアナは自主

練をやめない。

全ては強くなるために。自分の力を証明するために――

そんな様子を少し離れた場所から見ている影があった。

それは何とも形容しがたい微妙な表情を浮かべるスザクだった。

寮の自室でティアナはクロスミラージュの手入れをしていた。

自主練を加えたことで今まで以上に酷使し、ボロボロになっている。

「悪いわね、クロスミラージュ。あんたのことも結構酷使しちゃって」

<No problem.>

「明日の模擬戦が終わったらシャーリーさんに頼んでフルメンテしてもらおうから」

<Thank you.>

「ただいま」

そこへスバルがドリンクを持って帰ってきた。

「ティア、はい」

「ありがとう」

「明日の模擬戦・・・いけるかな」

「成功率はいいところ6割くらいかな」

「うん、そんだけあればきっと大丈夫」

スバルは励ましを入れるものの、ティアナの表情は晴れない。

「でもアンタはホントにいいの？」

「何が？」

「アンタの憧れのなのはさんに・・・ある意味逆らうことになるから」

そう言いながらドリンクの缶を握りつぶすティアナ。スバルを巻き込んでしまうことに後ろめたさを感じずにはいられないのだろう。

「私は怒られるのも叱られるのも慣れてるし、逆らってるっていつでも強くなるための努力だもん。ちゃんと結果だせば分かってくれるよ。なのはさん、優しいもん」

ティアナはスバルのその言葉で頬を少し赤くし、スバルは憧れである優しいなのはを思い浮かべて頬を少し赤くする。そしてそのままニヤケ顔になる。

「さあ！明日の早朝特訓は最後のおさらい。早く寝とこ」

「うん」

「さうて、じゃあ午前中のまとめ、2on1で模擬戦やるよ。まずはスターズからやろうか。バリアジャケット、準備して」

「「はい！」」

「エリオとキャロはあたしと見学だ」

「はい」

ティアナとスバルはバリアジャケットを展開し準備を整える。

「やるわよ、スバル」

「うん」

ヴィータに連れられスザク、エリオとキャロの3人はビルの屋上から見ていた。

そこへ屋上のドアが開きフェイトが姿をあらわす。

「あ、もう模擬戦始まっちゃった」

「フェイト」

「私も手伝おうと思ってたんだけど」

「今はスターズの番」

「ほんとにスターズの模擬戦も私が引き受けようと思ったんだけどね」

「ああ、なのはもここん所訓練密度濃いいからな、少し休ませねえ」

と」

「なのは、部屋に戻ってからずっとモニターに向かいっぱなしなんだよ。訓練メニュー作ったり、ビデオでみんなの陣形チェックしたり」

「なのはさん、訓練中もいつも僕たちのこと見ててくれるんですね」

「ほんとに、ずっと」

エリオとキャロなのはがいつも自分たちのことを見ていてくれることにとても感謝しているようだった。

「おっ、クロスシフトだな」

ヴィータが下で魔法陣を展開し、魔力弾を作り出しているティアナに気づく。

「クロスファイヤーシュート！」

何発もの魔力弾なのはへと向かう。しかしヴィータとフェイト、スザクは違和感を感じた。

「なんか、切れがねえな」

「ああ、アグスタのときに一度見たんだけど、確かにそうだ」

「コントロールはいいみたいだけど」

「それにしたって」

当然、コントロールがいただけでなのはに当たるわけが無い。

なのはは簡単に回避していくが、やはりその表情にはスザクたちと同じく違和感を感じているようだった。

「ん？」

そのとき、前方よりウイングロードがなのはに向かって展開される。それを見たなのはは数発の魔力弾を作り出し、自分の周囲に待機させる。

「フェイクじゃない、本物!？」

ティアナは幻術も使えるため、この前方からの攻撃はフェイクかと思ったがどうやら違うようだ。

真正面からバカ正直に突撃してくるスバルに向かい、先ほど出した魔力弾を撃ち出す。

「うおおおおお！」

スバルはプロテクションを発動し正面から受け止める。

なのはの攻撃を防ぎきったスバルはそのまま右の拳をなのはに向け突き出す。

「うりゃあああああ！」

そんな真正面からの攻撃がなのはに通用するはずもなく、ラウンドシールドで受け止められる。

「くううう」

なのはがレイジングハートを振り切るとシールドが割れる。

「きゃあああああ」

その衝撃でスバルは体勢を崩してしまいウイングロードから落ちてしまう。

「こらスバル、だめだよそんな危ない軌道」

そうスバルに注意している最中にもティアナの放った魔力弾がなのは後ろから飛んでくるが、それを見もせずに回避をやったのける。

「うわぁっと」

なんとか既に展開されていたウイングロードの上に着地するスバル。

「すみません！でも、ちゃんと防ぎますから！」

スバルの発言に少々驚きを見せるなのは。だがすぐにティアナが居ないことに気づき、周囲を見回す。

すると離れたビルの屋上で光るものが見える。

そこに居たティアナはクロスミラージュをツーハンドモードで正面に構え、砲撃の体勢に入っていた。

すでに照準もなのはへと向けられている。

「砲撃？ティアナが！？」

驚くフェイトとは別に、ヴィータは少々睨んでいるような表情だ。

スザクは何も言葉を発さずにことの成り行きをただじつと見ている。

『特訓成果、クロスシフトC。行くわよ！スバル』

「おお！」

スバルが元気よく返事をすると共にリボルバーナックルからカートリッジがロードされ、再びなのはにむけて突っ込む。

「でええりやあああ！」

なのはも再び数発の魔力弾を発射する。しかしスバルはそれを見事に回避し、なのはへと到達する。
再びラウンドシールドで防御を行うなのは。

「うぐう」

『ティアアア！』

少し苦しそうな声で念話を送るスバル。やはり1人でなのはの相手をするのはきついだろう。
すると突然先ほどまで砲撃の構えを見せていたティアアナが消える。

「あっちのティアさんは幻影！？」

「本物は！？」

エリオとキャロは幻影だったことに驚き、本物のティアナを探すためにキヨロキヨロする。

なのはとスバル激突している上に、ティアナの姿はあった。

ウイングロードを駆け、なのはの直上へと向かっていた。

2発のカートリッジをロードし、クロスミラージュから魔力刃が形成される。

その長さは短刀といったところか。

（バリアを切れき、フィールドを突き抜ける。一撃必殺！）

「でええええええ！」

「レイジングハート、モードリリース」

>A l l r i g h t . <

その直後、なのはを中心に爆発が起こる。

「おかしいな・・・2人とも、どうしちゃったのかな」

徐々に煙が晴れていく中、なのはは呟く。

しかし、俯いているために表情をうかがい知ることが出来ない。

「あ、ああ・・・」

「え!？」

スバルとティアナは驚きのあまり、言葉が出ない。

「頑張ってるのは分かるけど、模擬戦はケンカじゃないんだよ。練習のときだけ言うこと聞いてるフリで、本番でこんな危険な無茶するんなら・・・練習の意味ないじゃない」

2人が驚くのも無理はなかった。なのははレイジングハートを待機モードへ移行し、展開していたシールドも解除していた。そしてその上で、素手で2人の攻撃を受け止めていたのだ。そしてティアナの魔力刃を受け止めたために、右手からは血が流れていた。

「ちゃんとさ、練習どおりやろうよ。ねえ――」

顔を上げたなのはの表情は2人が見たことの無いような無表情だった。

「あ・・・あの」

なのははティアナを見上げて尚も続ける。

「私の言ってること、私の訓練、そんなに間違ってる？」

「・・・っ!？」

< B l a d e e r a s e . >

クロスミラージュが発した電子音と共に魔力刃は消え、ティアナは後方にあるウイングロードへと大きく距離をとり、着地と共にカートリッジを各1発ずつロードする。

「あたしは! もう、誰も傷つけないから! 失くしたくないから!」

涙ながらに叫ぶティアナは、先ほどの幻術のティアナと同じように砲撃の体勢に入る。

「ティア・・・」

「だから! 強くなりたいんです!」

悲痛な思いで叫ぶティアナ。だが、それでもなのはは容赦しない。

「少し、頭冷やそうか」

右の人差し指をティアナに向けると共に、足元の魔法陣が展開される。

「あっ!？」

「クロスファイヤー」

スバルはなのはが攻撃しようとしていることに気づくが既に遅く、発動させている。

「うあああああ!ファントムブレイ——」

「シュート」

なのはは無表情でティアナへ向け、クロスファイヤーシュートを撃ち出す。

「っ!？」

ティアナへ到達した攻撃は爆発を起こす。

「ティア——っ、バインド!？」

ティアナの元へ向かおうとするスバルだが、いつの間にかバインドがかけられている。

「じっとして、よく見てなさい」

なのははティアナを打ちのめす様をスバルに見せるために、フープバインドをかけたのだった。

そして意識が朦朧とし、ただ立っているだけの状態のティアナに2発目の攻撃が撃たれようとしていた。

「なのはさん!」

スバルの叫びもむなしく、攻撃は行われた。

再び爆発を起こす。今度はただ立っていた状態なために、ティアナはウイングロードから落ちていく。

「ティアアアアアア!」

ティアナは下方にあったウイングロードへ落ちた。

「ティア！ティ——」

すぐに駆け寄るスバルだが、すでにそのときティアナに意識はなかった。

「模擬戦はここまで。今日は2人とも撃墜されて終了」

「くうっ！」

スバルはティアナを攻撃されたこと、そして自分が憧れたなのはに裏切られたように思い、なのはへ怒りの籠もった瞳を向けるのだった。

離れた場所から見ていたスザクは少しばかり悲しそうな表情を浮かべ、ただ見つめていた。
そう、言葉を発することも無くただじっとティアナのほうを見つめ

ていたのだった。

第7話「願い」（後書き）

実は、本当なら今回でティアナ編は終わるはずだったんです。しかし予想を超え長くなってしまったために、次回まで続いてしまいます……

スザクの影が薄くなってる！しかし、次回こそは！

さて、今回は他の方が執筆されているリリなのでもよく出てくるティアナ達となのはの模擬戦です。

他の方の場合、リリなのに介入した主人公がなのはを止めることがほとんどだと思います（作者が見たものは全て止めに入っていました）。

ですが作者はあえて止めに入れませんでした。何故かは言いませんが。

第2回 リリなの、豆知識コーナー！

さて、豆知識コーナーなのはいいんですが……何にしましょうか。前回さりげなく疑問など募集してみたのですが来なかったので。

今回はそうですね……StrikerSでも重要なポジションにいる

スバル・ナカジマにスポットライトを当ててみましょう。

スバルは初登場の1話で魔導師ランクがCでした。

2話以降がB、エピソード以降はAAになっているんですね。

まあ今回はプロフィールはこの辺にして、能力を見ていこうと思います

ます。

何より特筆すべきなのが、戦闘機人であることですね。

そしてインヒューレントスキル（IS）は一撃必殺の威力をもつ「振動破碎」。

これは四肢の末端部から目標の物体に振動波を送ることで、共振現象を発生させる事によって対象を粉碎するという事なんです。

それによる破壊効果は対象の外装・装甲に留まらず、内部の骨格や機械部品にまで瞬時に及びます。

アニメでもチンクは、直接触れられていないにも関わらず、基礎骨格から造り直さなくてはならないほどの大ダメージを受けました。

ここまでは皆さんよく知っていると思います。ここからはちょっと知らない人が増えるのではと思います。

実は、振動破碎を使うと、振動がスバル自身にも伝わり身につけたデバイスと共に甚大な影響を被る場合もあるんですね。

チンクとの戦闘ではそれに加え、チンクのオーバーデトネーションを受け切れなかったことにより、甚大な被害を被りましたね。

また、26話のゆりかご内においては振動破碎を制御・応用しており、振動拳として扉を破壊していました。

事件後には訓練でも使用しており、能力から技に昇華されたようです。

今回はこの辺りにしておきます。

それでは、また次回お会いしましょう。

第8話「無茶の代償」(前書き)

まさかのハイペースで投稿ですw

長くなりましたがようやくティアナ編が終わりました。
ずっと暗い話ばっかでしたね・・・作者も疲れました。

第8話「無茶の代償」

とあるベッドの上で1人のオレンジの髪をした少女が眠っていた。だがその時間もう終わりのようで、その目がゆっくりと開けられていく。

まだ完全に目覚めてはおらず、ぼんやりとした目をしている。これではまだしばらく起きないだろうと思った矢先、突然ハツとしたように飛び起きる。

「あ、あれ？」

少し記憶が混乱しているのか、何故自分が寝ていたのか分かっていないようだ。

そこで扉が開き女性が1人入ってくる。

「あらティアナ、起きた？」

「シャル先生・・・えと、え？」

シャルが入ってきたことにより、ティアナは余計に訳が分からな

くなったようだ。

「ここは医務室ね。昼間の模擬戦で撃墜されちゃったのは覚えてる？」

シャルにそう聞かれたティアナは少し記憶の糸を辿る。

そしてティアナは思い出す。自分がやったことに対するなのは言葉、なのはの行動を。

「はい」

「なのはちゃんの訓練用魔法弾は優秀だから身体にダメージは無いと思うんだけど。どこか痛い所とかある？」

「いえ、大丈夫です」

ティアナがそう答えると通り、怪我など一切していない。攻撃が直撃だったにもかかわらず、だ。

そのあたり、やはりなのはの優秀さが伺える。

ティアナが何気に視線の向きを変えると時計が目に入った。

「9時過ぎ！？え、夜？」

「すごく熟睡してたわよ。死んでるんじゃないかって思うくらい。最近ほとんど寝てなかったでしょ？溜まっていた疲れがまとめて来た

のよ
」

すでに午後9時を回っているというのに、訓練場にはまだなのはの姿があった。

別に1人で訓練しているという訳ではない。モニターに向かって色々と操作している。

戦技教導官であるために色々やっておかなければいけないことがあるのだろう。

「なのは」

「ん？」

1人モニターに向かっていて彼女に声を掛け、近づいてくる人影があった。

「スザク君」

「さつきティアナが目を覚ましてね、スバルと一緒にオフィスに謝りに来ていたよ」

「なのはは訓練場にいるから明日朝一で話したらって言ったんだけど、よかったかな？」

「うん、ありがとう」

なのははモニターの操作を切り上げ、スザクと共に六課隊舎へと歩いていく。

「でもゴメンね、監督不行届きで。スザク君やみんなまで巻き込んでやって」

「いいよ、気にしなくて」

「ティアナとスバル、どんな感じだった？」

「やっぱりまだ不満がありそうな顔をしていたよ」

「まあ、明日の朝ちゃんと話すよ。フォワードの皆と」

「うん」

そこまで話すと急になのはが足を止める。

「ねえスザク君。スザク君から見て私がティアナを打ちのめしたことで、どう見えたかな？」

（やっぱりあんなところ見せちゃったから、鬼教官とか思われちゃったかな）

俯いているなのは表情は暗く、少々不安の色が浮かんでいる。

初めは何故わざわざ自分にそんなことを聞くのかと思ったスザクだが、なのはの表情をみてなんとなく彼女の気持ちを察したようだ。

「ティアナを打ちのめしたことで、悪いと思ってるのかい？」

「悪いとは思って無いよ。叱り付けて怒鳴ってる暇があったら、模擬戦できっちり打ちのめす。それが教導だから」

「だったらどうしてそんなこと聞くんだい？」

「スザク君、管理局のことよく知らないでしょ？だからそういう人から見ると、どんな風に見えるんだろうって思ってる」

「そっか。」

そう呟くと、スザクは近くにあったベンチに座り夜空を見上げる。空には月が2つ浮かんでおり、ここが地球ではないことをスザクに今更ながら実感させる。

「隣・・・いい？」

「うん」

スザクの返事を聞くと隣に腰掛けるなのは。事情を知らない人が見れば恋人に見えなくもない。
だが2人が漂わせている雰囲気重いために、そうは見えないのが現状だ。

「僕は君が間違ったことをしたとは思ってないよ」

「ほ、ほんとに？」

「うん、僕がなのはの立場でもきつと同じことをしたよ。」

「同じ・・・ことを？」

なのははスザクがそこまで言うとは思っていなかったらしく、意外そうな表情を浮かべる。

対するスザクは真剣な表情になって言葉を紡ぐ。

「ああ、戦場で無茶をすればそれは死につながる。それは僕も経験したことだ。だから模擬戦できっちり打ちのめして分からせる。それは間違っていないと思う」

「私もそう思ってる」

（スザク君、今自分も経験したって・・・）

スザクの発言が引つかかるのはだが、今はそんなこと聞ける雰囲気ではなかった。

だがいずれは聞こうと思い、頭の片隅に追いやるのだった。

「さっきも言ったけど、間違ってはいないと思う。だけどなのはが悪くないと思ってるわけじゃない」

「・・・」

その言葉を聞いたのははより一層落ち込んでしまったように見える。

少し気になっている男性ひとから言われれば誰だってそうなるだろう。

「もちろん君が一方的に悪いわけじゃない。ティアナだって悪い。だけど君にも悪いところがあった、僕はそう思ってる。ゴメン、なんか偉そうなこと言っちゃって」

「ううん、いいの。私も悪いって言ったけど、どこが悪いと思ったの？」

「それは――」

スザクが言いかけたとき、けたたましくアラートが鳴り響く。
鳴っているのは六課の隊舎内からだが、すぐ近くのベンチに座っていたために鳴っているのが分かったのだ。

「なんだ？」

「とにかく行こう！」

「ああ！」

「東部海上にガジェットドローン？型が出現しました！」

「機体数、現在12機。巡回飛行を続けています」

アルトとルキノが出現したガジェットの情報を告げる。

「レリックの反応は？」

そう聞くのは六課部隊長補佐、グリフィス・ロウラン准陸尉である。彼はフェイトの義母リンディ・ハラオウンの友人である、レティ提督の息子であり、シャーリーの幼馴染でもある。

ちなみにレティ提督の息子だけあって、そっくりな顔をしている。

「現状では付近に反応はありません」

「ただ・・・これ機体速度が今までよりもだいぶ——いえ、かなり早くなってます」

とある白衣の男がモニターに向かっている。ジェイル・スカリエツティである。そんな彼のところに通信が入る。

「おや、これはめずらしい。君から連絡をくれるとは嬉しいじゃないか。ゼストとアギトはどうしたね？」

「今別行動。遠くの空にドクターの玩具が飛んでるみたいだけど」

「直にキレイな花火が見れるはずだよ」

「レリック」

「だったら君に真っ先に報告しているさ。私の玩具の動作テストなんだよ。破壊されるまでのデータが欲しくてね」

ルーテシアから入った通信に最初はその画面を見て話していたスカリエッティだが、途中から再びキーを打つ。

「壊されちゃうの？」

「ハハハ、私はあんな鉄屑に直接戦力は期待してないんだよ。私の作品たちがより輝くために、デコイとして使うガラクタさ」

「そう。レリックじゃないなら私には関係ないけど」

「それに今回は彼も出たようだしね」

「彼？」

「ビスマルクの部下の1人さ」

「ふーん。じゃあ頑張ってね。御機嫌ようドクター」

「ああ、ありがとう。優しいルーテシア」

そこで通信は切れた。その直後、スカリエッティは不気味な笑い声を上げる。

「フッフ、やはり私の作品は素晴らしいな」

「航空？型4機編隊が3対、12機編隊が1体」

「発見時から変わらず、それぞれ別の定演軌道で旋回飛行中です」

アルト、ルキノは相変わらず変化のないガジェットの行動を報告する。

その場にはすでにはやて、なのは、フェイト、スザクが到着している。

「場所は何にもない海上。レリックの反応もなければ付近には海上施設も船もない」

「まるで打ち落としに來いと誘っているような」

「そやね」

はやてとグリフィスが現状についてガジェットの行動の意図を探っている。

「テストタロツサ・ハラオウン執務官、どう見る？」

はやてはいつもの呼び方であるフェイトちゃんではなく、わざわざファミリーネームで呼んだ。

さすがにこの場において、フェイトちゃんというような呼び方は出来ないのである。

「犯人がスカリエッティならこちらの動きとか、航空戦力を探りたいんだと思う」

「この状況なら超長距離攻撃を放り込めば済むわけやし」

「一撃でクリアですよー」

リインがその場に似合わない明るい声を上げる。

「うん、でもだからこそ奥の手は見せないほうがいいかなって」

「まあ実際、この程度のことで隊長たちのリミッター解除って訳にもいかへんしな。高町教導官はどうやる？」

「こっちの戦力調査が目的ならなるべく新しい情報を出さずに、今までと同じやり方で片付けちゃう、かな」

「それでいこう」

そういつて頷く一同。だがスザクだけは違った。

「僕はどうすればいい？」

「スザクくんはもちろん待機や」

「やっぱりそうか・・・でも——」

「反論は聞かへんよ」

「そう言うと思ったよ」

無駄だとは分かっている一応食い下がろうとしたスザクだが、言い切るまえに却下されてしまうのだった。

六課隊舎の屋上にあるヘリポートに前線メンバーが集まっていた。

「今回は空戦だから出撃は私とフェイト隊長、ヴィータ副隊長の3人」

「みんなはロビーで出動待機ね」

「そっちの指揮はシグナムだ。留守を頼むぞ」

「「はい」」

「・・・はい」

ライトニングの2人はしっかり返事を返すものの、スバルはあまり元気がない。

ティアナにいたってはワンテンポ遅れてしまう始末だ。

そんなティアナを少し見ていたなのはは口を開く。

「ああ、それからティアナ。ティアナは出動待機から外れところか」

「っ!？」

「「えっ!?!」」

なのはの無情の宣告にフォワードは驚きを隠せない。
だがフォワード以外のメンバーはさも当然といった風で、動揺などは見えない。

「そのほうがいいな、そうしとけ」

ヴィータに至っては賛同の意見すら上げる。

「今夜は体調も魔力もベストじゃないだろうし」

そんななのはにティアナは顔を俯かせ、外されたであろう理由を口にする。

「言うことを聞かないヤツは使えないってことですか」

「自分で言ってる分らない? 当たり前のことだよ、それ」

「現場での指示や命令は聞いています。教導だってちゃんとサボらずやっています」

そこまで言ったティアナにヴィータはキレかかり、歩みを進める。

「それ以外の場所での努力まで教えられたとおりじゃないとダメなんですか？」

が、なのはは左腕をヴィータの前に出して制する。

「あたしはなのはさんたちみたいにエリートじゃないし、スバルやエリオみたいな才能も、キャロみたいな希少能力レアスキルもない。少しくらい無茶したって死ぬ気でやらなきゃ強くなるとなれないじゃないですか！」

ティアナがそこまで強く言い切ったとき、横から手が伸びてくる。その手はシグナムが伸ばしたもので、胸倉をしっかりと掴んでいる。そしてその直後、シグナムはティアナを殴り飛ばす。

「シグナム！」

「シグナムさん！」

「心配するな、加減はした。駄々をこねるだけのバカは、なまじ付き合ってやるから付け上がる」

スバルはすぐにティアナに駆け寄り、抱き起こす。

「ヴァイス！もう出られるな？」

「乗り込んでいただけりゃあ、すぐにでも！」

ヘリのプロペラの回転数が上がっていく。いよいよ発進の前といった感じだ。

「ティアナ！思いつめちゃってるみたいだけど戻ってきたらゆっくりはなそう？」

「こら付き合うなっのに！」

ティアナに声を掛けるなのはをヴィータは力づくでヘリ内へと引っ張っていく。

『エリオ、キャロゴメン。そっちのフォローお願い』

『はい』

『がんばります』

フェイトがヘリの窓から顔を見せて念話を送ったのを最後に、ヘリはガジェットが待つ会場へと飛んでいった。

残されたスザク、シグナム、フォワード。だがスザクは今の時点で

どう声を掛けるべきか分からず、とりあえずロビーでの待機へと移ろうとしたそのときだった。

「目障りだ。いつまでも甘ったれてないでさっさと部屋に戻れ」

シグナムが滅茶苦茶厳しいこと言い出したのだった。

「あ、あのシグナム副隊長、そのへんで・・・」

「スバルさん、とりあえずロビーに・・・」

エリオとキャロがなんとかその場を収めようとする。
が、スバルは立ち上がるとシグナムを真っ直ぐ見据える。

「シグナム副隊長」

「なんだ？」

シグナムのあまりに堂々とした態度に気圧されたのか、少し俯いてしまうスバル。

「命令違反は絶対にダメだし、さっきのティアの物言いとかそれを止められなかった私は確かにダメだったと思います」

その発言にティアナはスバルを見上げる。殴られた頬は赤くなっている。

「だけど・・・自分なりに強くなろうとするのとか、キツイ状況でも何とかしようと頑張るのってそんなにいけないことなんでしょうか！自分なりの努力とか、そういうこともやっちゃいけないんでしょうか！」

スバルは自分の思いをシグナムへとぶつける。後半はすでに涙声になっており、肩が震えている。

「自主練習はいいことだし、強くなるための努力もすごくいいことだよ」

突然自分たちが居る場所とは離れたところから声が聞こえてきたため、一同はそちらへ顔を向ける。

そこにいたのは、本来此処に居るはずのないシャーリーだった。

「持ち場はどうした？」

「メインオペレートはリン曹長が居てくれますから。なんかもう・・・皆不器用で見えられなくて。皆、ちょっとロビーに集まって。私が説明するから。なのはさんのことと、なのはさんの教導の意味」

一同はシャーリーに言われたとおり、ロビーに集まっていた。途中シャマルも合流したようだ。

スザク以外はソファーに向かい合うように座っている。スザクはシグナムたちの後ろの壁にもたれかかるようにして立っている。

しばらくシャーリーがモニターを操作した後、そのまま操作を続けながら語りだす。

「昔ね、1人の女の子が居たの。その子は本当に普通の女の子で魔法なんて知りもしなかったし、戦いなんてするような子じゃなかった。」

そこまでシャーリーが言うと、モニターにまだ魔法に出会う前の幼き日のなのが映し出される。

「友達と一緒に学校へ行って、家族と一緒に幸せに暮らして。そういう一生を送るはずの子だった。だけど、事件が起こった。魔法学校に通っていたわけでもなければ、特別なスキルがあったわけでも

ない。偶然の出逢いで魔法を得て、たまたま魔力が大きかったっただけのたった9歳の女の子が、魔法と出会ってから僅か数ヶ月で命がけの実戦を繰り返した。」

「これ・・・」

「フェイトさん!？」

当時の映像が映っているため、当然フェイトとぶつかり合っていたものも流れる。

それを見たフォワードは今からでは想像できないことに驚きを隠せない。

なのはの過去を知らないスザクも当然驚くが、お互いの正体を知っているかいないかの違いこそあれ、自分とルルーシュにどこことなく似ているということを感じていた。

そして過去の話の続きをシャルが語りだす。

「フェイトちゃんは当時家族環境が複雑でね、ある古代遺失物を巡って敵同士だったんだって」

「この事件の中心人物はテストロッサの母、その名をとってプレシア・テストロッサ事件、あるいはジュエルシード事件と呼ばれている」

そのとき映像にはちょうどなのはが切り札であるスターライトブレイカーを放っているシーンが映し出されていた。

「収束法！？こんな大きな」

「9歳の・・・女の子が」

「ただでさえ大威力砲撃は身体に酷い負担が掛かるのに・・・」

エリオ、スバル、キャロの順で映し出されている映像に驚きの言葉を発する。

だがティアナだけは何とも言いがたい微妙な表情で見つめているだけだった。

「その後もな、さほど時も置かず戦いは続いた。」

「私たちが深く関わった、闇の書事件」

映像はなのはとヴィータの戦っている様子に切り替わっている。その映像を見る限りなのはが圧倒的に押されている。

「襲撃戦での撃墜未遂と敗北」

「「「っ！？」「」」

なのはがヴィータの攻撃で敗北したシーンを見て、驚きのあまり声になっていない声をあげるフォワード。

エースオブエース、絶対無敵のエースなどといわれている現在からは、なのはの敗北などやはり想像できないのだろう。

「それに打ち勝つために選んだのは――」

シグナムはそこでいったん言葉を切り、モニターに向けていた顔をフォワードへと向ける。

「当時はまだ安全性が危うかった、カートリッジシステムの使用。身体への負担を無視して自身の限界値を超えた出力を無理矢理引き出すフルドライブ、エクセリオンモード」

映像では闇の書の管制人格、後にはやてによりリインフォースと名づけられる存在と戦い、大規模な爆発が起こっている。

その映像を見て、自分たちの想像を遥かに超える経験をしてきているなのはに、もはや声が出ないフォワードたちだった。

「誰かを救うため、自分の思いを通すための無茶をなのはは続けた」

へりは既にガジェットのいるポイントに到達しており、フェイトとヴィータが先行して攻撃に向かっていた。

「んじゃあ、なのはさん気いつけて」

「うん、ありがとうヴァイス君。行くよ、レイジングハート」

<All right, my master.>

「こちらスターズ01、中距離下方支援行きます！」

「了解」

「おお」

なのはは足元に魔法陣を展開し支援を始めるのだった。

「だが、そんなことを繰り返して身体に負担が生じないはずもなかった」

「事故が起きたのは入局2年目の冬」

シャルはより一層表情を暗くして話を続ける。

「異世界での捜査任務の帰り、ヴィータちゃんや部隊のみんなと一緒に出かけた場所。不意に現れた未確認体。いつもののはちゃんならきつと何の問題もなく、味方を守って落とせるはずだった相手。だけど、溜まっていた疲労、続けてきた無茶がなのはちゃんの動きをほんの少しだけ鈍らせちゃった。その結果がこれ」

そういつてシャルが映し出したモニターには、呼吸器をつけ、腕にチューブを挿され包帯を巻かれた、痛々しいなのは姿が映っていた。

フォワード陣からは驚きの声しかでない。さすがのスザクも若干驚きの表情が顔に出てしまう。

「なのはちゃん、無茶して迷惑掛けてゴメンなさいって、私たちの前では笑ってたけど・・・もう飛べなくなるかも、とか立って歩くことさえ出来なくなるかもって聞かされてどんな思いだったか・・・」

「無茶をしても、命を掛けてでも譲れぬ戦いの場は確かにある。お前がミスショットをしたあの場面は、自分の仲間の安全や命を掛け

てでもどうしても撃たなければならない状況だったか？」

「あっ・・・」

「訓練中のあの技は、一体誰のための何のための技だ」

ティアナは自分が犯したミスの重大さによりやく気づいたのか、酷く落胆している。

「なのはさん、皆にさ自分と同じ思いさせたくないんだよ。だから無茶なんてしなくてもいいように、絶対絶対皆が元気に帰ってこられるようにって、ほんとに丁寧に一生懸命考えて教えてくれてるんだよ」

（確かに基礎は大事だけど、なのはがそこまで基礎にこだわる理由がようやく分かったよ）

スザクは基礎が大事だと分かっているから、教導で基礎をあそこまで徹底的に叩き込んでいるのだと思っていた。

確かにそうなのだが、なのはの過去を知ることと真に教導の意図を理解することが出来たのだった。

「僕からも一つだけ言わせて貰っていいかな？」

「構わん、言ってみろ」

シグナムからの許可を得たスザクはティアナへと視線を向ける。
ティアナも元氣のない表情でスザクのほうを見る。

「これはティアナだけに言うことじゃないんだけど、実戦で、戦場で無茶をすれば死に繋がる。そしてそれは仲間すら危険な目に会わせることになる。それだけは覚えておいて欲しい。まあさっきの話で分かったとは思うけど、特にティアナはどことなく僕に似ているから、僕と同じようにはなって欲しくないんだ。だから言わせて貰ったんだ」

（似てるってどういうことだろう・・・それに今の発言、まるで経験したことがあるみたいなかんじだった）

スザクの発言はティアナの中に疑問を生むのだった。

「ヴィータ！ラスト1機、お願い」

「あいよ、行くぞアイゼン！フォルムツヴァイ！」

<Explosion. Rocket reform.>

カートリッジをロードすると共に柄の長さが2倍ほどまで伸び、ハンマーヘッドの片方が推進剤噴射口に、その反対側がスパイクに変形する。

その場で回転を始めるが、推進剤を噴射していることにより速度はどんどん上がっていく。

「ラケーターーンハンマーーー！」

回転し、速度を保ったまま上空にいるガジェットへと一直線に突撃していく。

見事に命中しガジェットは粉々に爆発する。

「スターズ02、24機目を撃墜。これで全滅です」

「増援ありま——あ、新たな機影を確認！数1！」

ルキノが新たな機影を確認し、モニターに映し出す。

「これはガジェットやない。人や・・・」

「ど、どうしますか八神部隊長！」

「とにかくなのはちゃんたちに警戒するように伝えて！」

「は、はい！」

海上に居るなのはたちの元へ1人、男性が近づいてきていた。

その男はスザクと同じように薄紫と濃い紫で構成された鎧のようなものを纏っており、右腕には鉤爪のようなものが4本つき、左手には盾を持っていた。

それに気づいたなのはたちは警戒を強める。

「誰ですか？何故此処にいるんですか？」

フェイトが質問を投げかけるとその男は動きを止める。

「戦場で質問を投げかけるとはずいぶんと余裕があるんだな」

「なっ！？ここは戦場じゃない！」

「いいや、戦場だ。その証拠にお前たちは武器を取り戦っている」

「何が目的だ！」

敵に目的を聞いたところで聞き出せない確立のほうが高い。
だが目の前の男は先の質問にも答えた。ならば目的も聞きだせる可

能性があった。

「目的？戦場での目的など決まっているだろう。それは――」

男が纏うただならぬ雰囲気になのはたちはより警戒心を強める。

「サルどもを殺すことに決まっているう！」

その叫びと共に男はフェイトに向けて突撃をかける。

突撃と同時に右腕の鉤爪は回転を始め、緑色の膜のようなものに覆われ槍のようになっていく。

その膜は3人にスザクのシールド、ブレイズルミナスを思い出させるのだった。

ほんの僅かな時間でフェイトに到達した男は右腕を突き出す。

「っ!？」

<Defensor.>

突然の攻撃に反応が僅かに遅れたフェイトにバルディッシュが自動詠唱で防御を発動させる。

だがフェイトの薄い防御でその突きを防ぐことなど出来ず、いとも簡単に突き破られる。

しかしその突き破るまでにほんの僅かではあるが時間を稼ぐことは

出来た。

<S o n i c M o v e .>

その隙にフェイトはソニックムーブを発動させて大きく距離をとった。

「うおおおおお！」

そこへ上空へガジェットを破壊しに行っていたヴィータが戻ってきた。

降下してくる勢いのままハンマーフォームのグラーフアイゼンを叩きつける。

が、簡単によけられてしまったうえに右腕がヴィータを貫かんと迫る。

「くっ!？」

ヴィータはやられる——ただそう思った。だがその槍の右腕はヴィータに届くことはなかった。

先ほどまでその男が居た場所を何発もの魔力弾が通る。

そのことに気づいていた男はヴィータから距離を取っていた。

「さすがに今の状態で3人を相手にするのは厳しいか。残念だが今日はこの辺にしておこう」

「待て！」

「そう慌てるな、いずれまた戦うことになる。次は必ず殺してやる」

「逃がさない！」

なのは先ほど撃ちだした魔力弾をその男へと向かわせる。
だが太股の付け根にあったふくらみが開き、そこから赤黒く人の頭ほどの大きさがある弾丸が連続で撃ち出される。

その弾丸はなのはの放ったアクセルシューターを全て撃ち落としたのだった。

「なっ!?!」

「慌てるなと言っただろう。それに今日はまだ万全ではない。次に会うときまでおとなしく待っているサル共」

そういう残し、男は飛び去ってしまった。

残された3人は飛び去った方向をじっと見つめているのだった。

「えー!？」

「ご、ごめんなさい」

六課に戻ってきたなのはを待っていたのは両手を合わせ、謝罪するシャーリーだった。

「だめだよシャーリー、人の過去勝手にばらしちゃ」

「だめだぜえ口の軽い女はよお」

「その、なんかこう・・・見てられなくて」

「ま、いずれはばれる事だしな」

ヴァイスはなのは側についたようだがヴィータはシャーリー側についたようだ。

「シャーリー、ティアナ今何処に居るかな？」

「あ、えっと多分――」

「あっ・・・」

ティアナが隊舎の外の海が見えるところに座っていると、後ろからなのは近づいてきた。
なのはは笑みを浮かべるとそのまま隣に腰掛ける。

「シャーリーさんやシグナム副隊長に色々聞きました」

「なのはさんの失敗の記録？」

「じゃなくて・・・その」

「無茶すると危ないんだよって話だね」

「すみませんでした」

そんな2人の様子を少しはなれた草の陰から見守るフォワード陣と

シャーリー、フリードの影があった。

そしてそれとは別の場所にもう1人、スザクの影もあった。

「じゃあ分かってくれた所で少し叱っとこうかな。あのね、ティアナは自分のこと凡人で射撃と幻術しか出来ないって言うけど、それ間違ってるからね。ティアナも他の皆も今はまだ原石の状態。デコボコだらけだし本当の価値も分かりずらいけど、だけど磨いていくうちにどんどん輝く部分が見えてくる。エリオはスピード、キャロは優しい支援魔法、スバルはクロスレンジの爆発力、3人を指揮するティアナは射撃と幻術で仲間を守って、知恵と勇気でどんな状況でも切り抜ける。そんなチームが理想型で、ゆっくりだけどその形に近づいていってる。」

星空を見つめていたなのはは、そこで一旦言葉を切りティアナを見つめる。

その瞳には優しいく、暖かい光が宿っていた。

「模擬戦でさ、自分で受けてみて気づかなかった？ティアナの射撃魔法ってちゃんと使えばあんなに避けにくくて、当たると痛いんだよ」

「あ・・・」

「一番魅力的なところをないがしろにして慌ててほかのところをやるうとするから、だから危なっかしくなっちゃんだよ。って教えたかったんだけど」

そういつてなのは視線を下に向ける。それを見たティアナも気まずいのか下を向くのだった。

「でも、まあティアナが考えたこと間違っではないんだよね。システムリミッター、テストモードリリース」

<Yes.>

「命令してみて、モード2って」

そういつてなのはクロスミラージュをティアナに渡す。
受け取ったティアナは正面に構える。戸惑いながらも言われたとおりに命令を出す。

「モード・・・2」

<Set up. Dagger Mode.>

するとクロスミラージュは変形し、魔力刃が形成される。

「あ、これ・・・」

「ティアナは執務官志望だもんね。此处を出て執務官を目指すようになったらどうしても個人戦が多くなるし、将来を考えて用意はし

てたんだ」

なのはティアナから再びクロスミラージュを受け取ると通常の状態に戻る。

ティアナはなのはがそこまで考えているとは思わず、感情の高ぶりで涙が次から次へと溢れてくる。

「うえっ・・・ひっく・・・」

「クロスもロングももう少ししたら教えようと思ってた。けど出勤は今すぐにでもあるかもしれないでしょ？だからもう使いこなせてる武器をもっともっと確実なものにしてあげたかった。だけど、私の教導地味だから、あんまり成果が出てないように感じて苦しかったんだよね。ゴメンね」

「うえええん・・・ごめんなさい、ごめんなさい。ひっく、ごめんなさい、ごめんなさい」

ティアナは何度も謝り、大粒の涙を流す。その涙には色々な感情が込められていた。

しかし、ホテル・アグスタのときのように悔しさが込められた涙ではなかった。

それを影から見ていたスザクやフォワード陣、シャーリーは安堵の笑みを浮かべるのだった。

それからティアナは泣き続けたがしばらくすると涙も止まったようだ。

そんなティアナを見てなのは口を開く。

「実はね、私もスザク君に少し怒られちゃったんだ」

「スザクさんに、ですか？」

「うん、ティアナも悪かったけど私も悪かったって」

「な、なのはさんは悪くないです！私が悪いんです！」

「ううん。スザク君はあれで結構人を見てるから、きっと私も悪いんだよ。どこが悪かったか聞く前に出勤掛かったから聞きそびれたんだけどね」

苦笑いを浮かべながらそう言うのはにティアナは先ほど浮かんだ疑問が再び蘇る。

「あの、スザクさんって一体何者なんですか？」

「私も詳しく聞いたわけじゃないんだけど、元居た世界では軍人だったんだって。」

「軍人・・・ですか」

（軍人なら戦場に出ても可笑しくない、それに・・・）

軍人と聞いて何考え込んでしまうティアナ。先ほどスザクに言われた時に感じたことを照らし合わせると結論が出るのだった。

「どうかしたの？」

「い、いえ。なんでもないです」

「じゃあ戻ろうか？」

「はい」

2人は立ち上がり、皆の待つ隊舎へと戻っていくのだった。

翌朝、早朝訓練のためにティアナが寮の入り口から出てくる。

「「おはようございます!」」

「うん、おはよう」

既に全員がそろっており、教導に参加するためにフェイトもいる。

「おはようございます」

「うん、よく眠れた?」

「はい」

一同が訓練場へ向かっている道中フェイトが口を開く。

「技術が優れてて華麗で優秀に戦える魔導師をエースって呼ぶでしょ? そのほかにも優秀な魔導師を表す呼び方があるって知ってる?」

フォワード陣は皆知らないのか、お互いに顔を見合わせる。
それを見て尚もフェイトは続ける。

「その人が居れば、困難な状況を打破できる。どんな厳しい状況でも突破できる。そういう信頼を持って呼ばれる名前。」

全員気になるのか足を止めてフェイトへ顔を向ける。
フェイトは笑みを浮かべこう言う。

「ストライカー」

全員が始めて知った、という風な声を上げる。

「なのは、訓練を始めてすぐの頃から言ってた。うちの4人は全員一流のストライカーになれるはずだって。だからうんと厳しく、だけど大切に丁寧に育てるんだって」

「しかし教官つつーのも因果な役職だよなあ。面倒な直に手えかけて育ててやっても、教導が終わった後は皆勝手な道を行っちまうんだから」

「まあ一緒に居られる期間があんまり長くないのはちょっと寂しいけどね。ずっと見ていられる訳じゃないから、一緒に居る間は出来

る限りのことを教えてあげたいんだ」

「」「おはようございまーす！」「」

声のしたほうを振り向くと、フォワード陣とフェイトが走ってくる。

「何があっても、誰が来てもあの子達は落とさせない。私の目の届く間はもちろん、いつか1人でそれぞれの空を飛ぶようになって」

「ああ、僕も可能な限り協力するよ」

そういつてスザクはなのはに笑みを向ける。なのはは若干頬を赤くしつつも笑みを返すのだった。

そして今日もなのはの厳しい教導で一日が始まるのだった。

第8話「無茶の代償」(後書き)

あの人が登場！皆さんお分かりでしょうがここでは名前を伏せておきます。

次回からようやく物語が核心へと近づいていきます。

しかしこのペースで行くと完結はいつになることやら・・・
みなさんお気づきかと思いますが、スザク君になっていたりスザクくんになったりしていますよね。

なのは↓スザク君 はやて↓スザクくん
となっています。なぜなのかといいますと、完全に作者のイメージです。

なんとなくそんな感じがするので・・・

第3回 リリなの豆知識コーナー！

やっべ、どうしよう・・・面倒臭くなってきましたw

今回はエクセリオンバスターについて書きましようか・・・
ディバインバスターとエクセリオンバスターの違いって分からない方も多いのではないのでしょうか？

簡単に違いを言ってしまうえば、DBは長距離、超長距離砲撃の魔法です。

それに対してEBは中距離砲撃用の魔法なんですね。

A's時のエクセリオンバスターフォースバースト(最大出力)にくらべ、

発射速度は大幅に向上し、カートリッジ消費量も1発に減少しています。

ただし、エクシードモード時に搭載されるカートリッジは大口径化しているため1発に込められた魔力量は増大しています。

エクセリオンバスターA・C・S

エクセリオンバスターの大威力砲撃を零距离で使用するもので、攻撃対象だけでなく使用者にも多大なダメージを与えます。

StrikerS本編では未使用で、シャリーの説明の中でのみ使用してます（A'sの時のです）

第9話「動き出す物語」(前書き)

劇場版 Fate UBW 見てきました (今更かよ W)。アチャカツ
ケー!

では9話です、どうぞ。

第9話「動き出す物語」

スザクは部隊長室に居た。朝食中、はやてに後で部隊長室へ来るように言われていた。

部屋にははやてだけでなく隊長陣がそろっていた。ちなみにヴィータはフォワード陣の訓練、シグナムは他の仕事をしているためここにはいない。

「それで、話っているのは？」

「うん、昨日の出撃のことなんやけどな。ガジェットを撃墜した後、に正体不明の人物が現れたんよ」

「正体不明？」

「まずはこれを見てからや」

そう言うてはやては昨日なのは達がガジェット撃墜後に交戦した男の映像を映し出す。

その人物を認識した瞬間スザクは目を見開く。

「この人なんやけど——って、スザクくんではないしたんや？」

「……え？あ、いや」

（なぜ彼が生きて……）

「昨日私たちが少しだけ戦ったの」

「それでね、ランスロットに似てたから何か知ってるんじゃないかなって」

映像に映し出されている男が纏っているものは、確かにランスロットに似ていた。

形状が似ているなどといったことではなく、デバイスの種類が似ているということだ。

その男のデバイスはスザクと同じく全身に纏う様に展開されているのだ。

「ああ、知っているよ」

「ほんまか!？」

「なら、知ってること教えてくれないかな？」

「分かった」

スザクはそこで一呼吸置いて間を空ける。

そして視線を映し出されている男へと向ける。

「彼の名は、ルキアーノ・ブラッドリー。かつて僕と同じくブリタニア軍に所属していた」

「ってことは仲間ってことやろか？」

「いや、僕自身彼を仲間だと思ったことは無い」

「どうして？ 同じ軍に入ってたんでしょ？」

なのはの疑問は当然のことだった。同じ軍に属している、ということとは普通に考えて仲間だろう。だがスザクは仲間ではないと言い切った。それにはフェイトもはやても同じ疑問を浮かべたはずだ。

「彼は人を殺すことに喜びを見出す殺人者だ。そんな人間を仲間だとは思わない」

「殺人者・・・」

「でも、そう言われると何となく分かる」

「うん、実際この人は普通じゃなかった」

昨日ルキアーノと直に戦った2人は特にその実感が強いのだろう、

表情が少しこわばっている。

「皆、彼のことは僕に任せてくれないか？」

その言葉に3人は黙り込む。そしてはやてはじつとスザクを見つめてゆっくりと口を開く。

「・・・分かった。この人物についてはスザクさんに任せる。」

「ありがとう」

そういい残してスザクは部隊長室を後にする。

スザクが出て行った後、なのはとフェイトははやてのデスクへ詰め寄る。

「はやてちゃん、いいの？」

「ちゃんと皆で対応したほうがいいよ」

「きっとスザクくんは、何の志もなく人を殺すこの人が許せへんのかなと思う。そやから私はスザクさんに任せたんよ」

部隊長がそう決定したため、なのはたちも納得せざるを得ないのだった。

もちろんはやて個人としてはちゃんとした対応をしたかっただろう。いくらルキアーノが強いからといって、そちらにばかり戦力を割くわけにもいかない。

部隊長という立場がそれを許さなかったのだった。

――数日後

フォワード達は六課に入ってから訓練漬けの毎日だったため、第2段階のテストをクリアということもあり1日休日を貰い、街に出ていた。

なのは達隊長陣も六課にて待機ということになっていた。

「本当はスザク君にもお休みあげたかったんだけど」

「ゴメンね。私たちと待機ってことになっちゃって」

「いいよ、気にしなくて。それに僕は毎日が休みみたいなものだし」

スザクがそう言う様に、民間協力者ということになっているスザク

にはデスクワークなどはない。
それ故にトレーニングくらいしかすることが無く、時間を持て余しているのが現状だった。

「だからこうやってゆっくり話が出来る機会が出来てよかったよ」

「ス、スザク（君）・・・」

笑みを浮かべるスザクに頬を紅潮させるのはとフェイト。
2人とも先ほどは謝っていたものの、立场上普段ゆっくりスザクと話をしたりする機会が無い2人は内心はとても喜んでいた。

「―――当日は首都防衛隊の代表、レジアス・ゲイズ中將による、管理局の防衛思想に関しての表明も行われました」

「魔法と技術の進歩と進化、素晴らしいものではあるがしかし！それが故に我々を襲う危機や災害も10年前とは比べ物にならないほどに危険度を増している。兵器運用の強化は、進化する世界の平和を守るためである！」

3人が少し遅めの朝食を取っていたところへニュースが流れ、厳ついおっさんというのがピッタリの人物が演説している映像が映し出される。

「首都防衛の手は今だ足りん。非常戦力においても我々の要請が通

りさえすれば地上の犯罪も発生率で20%、検挙率においては35%の増加を初年度から見込むことが出来る」

「この人はまだこんなこと言ってるんだね」

「レジアス中將は武闘派だからね」

「あの、この人って？」

2人だけで話が進んでいく状態に当然ながらスザクはついていけない。

「あ、ゴメンねスザク君」

「この人はレジアス・ゲイズ中將っていうの。まあ事実上地上本部の総司令官ってところかな」

「優秀な人ではあるんだけど、黒い噂もある人なの」

「そうか・・・この人も力づくでって人なんだろうね」

スザクは今だ表明の演説を続けている映像の中のレジアスを見て、きつとこの人物とはやての歩む道は交わらないのだろうと思うのだった。

ミッドチルダのトンネル内にてなにやら騒ぎが起きている。
どうも事故が起こったようで、現場検証をしている最中のようだ。

「陸士108部隊、ギンガ・ナカジマ陸曹です。現場検証のお手伝いに参りました」

「ありがとうございます」

「横転事故と聞きましたが」

現場に現れたのは腰まで届く長い髪をした女性だった。ナカジマというファミリーネームを名乗っているが、スバルと何らかの関係があるのだろうか。それともただ単に同姓なだけだろうか。

「ええ、ただ事故の状況がどうも奇妙でして。運転手も混乱してるんですが、どうも何かに攻撃を受けて荷物が勝手に爆発したとか言うんですね」

「運んでいた荷物は缶詰や飲料ボトル、爆発するようなものじゃないですね」

「それと下のほうに妙な遺留品があつてですね」

それを聞いたギンガはその遺留品を確認する。

そこには自分が追っている人物と関係があるモノが破壊された状態で残っていた。

そして近くにもう一つ不審なものが残されていた。

「これは・・・生体ポット!？」

「レリック反応を追跡していたドローン? 型6機、全て破壊されたようです」

「ほう、破壊したのは局の魔導師か、それともアタリを引いたか」

「確定は出来ませんがどうやら後者の様です」

スカリエッティは相変わらず薄暗い部屋で、モニター越しに女性と

会話している。

「素晴らしい、早速追跡を掛けるとしよう」

「それなら私も出よう」

「ねえドクター。それならアタシも出たいんだけど」

「ノーヴェ、君か」

そこへノーヴェと呼ばれたボーイッシュな少女が現れる。
声がスバルと似ているのは気のせいだろうか。

「ダメよノーヴェ。あなたの武装はまだ調整中なんだし」

「そいつも出るんだろ？それに今回出てきたのがアタリなら、自分の目で見てみたい」

モニターに映る女性が止めるがそれでも少女は聞かない。

「別に焦らずとも・・・あれはいずれ必ず此処にやってくることになる訳だがね。まあ落ち着いて待っていて欲しいな。いいかい？」

「・・・分かった」

さすがにスカリエッティに言われてしまったては従うしかなく、不機嫌になりながらも少女は戻っていく。

「ルキアーノとドローンの出撃は状況を見てからにしましょう。妹たちの中から適任者を選んで出します」

「ああ、後は・・・愛すべき友人達にも頼んでおくでしょう」

薄暗い下水道の中を幼い少女が歩いている。外見は10歳に見えるかどうかいったところか。

その少女の左腕には2つのケースに繋がった鎖が絡みついており、ケースを引きずるようにして歩いている。

が、ケースの重みで少女がよろけた際のちょっとした衝撃でケースの一つが下水の中へ落ちてしまう。

そのまま引きずられてしまうかと思ったが、どうやらケースの重みで鎖が切れてしまったようだ。

「――さなぎゃ」

何かを呟いた少女は、残っているケースを引きずりながら何処へともなく歩いていくのだった。

エリオとキャロはシャーリーに作ってもらった休日のデートプランを順次クリアしていった。

このことから分かるように、シャーリーはデートプランのつもりで作っていたが、この2人にはその意図は全く伝わっていなかった。シャーリー・・・残念。

笑いながら歩いていた2人だが、エリオが急に立ち止まる。

「エリオ君？」

「キャロ、今何か聞こえなかった？」

「何か？」

「ゴトツつというか、ゴリツつというか」

エリオは周囲を見回すとビルとビルの隙間にある狭い路地へと走っていく。キャロもそれに続く。

すると下水道の蓋が開き、中から手が出てくる。

「「っ!？」」

ホラー映画じみた出来事に息を呑む2人。

この2人でなくとも、現実でこんなことが起きれば誰だって驚くだろう。

「こちらライトニング04、緊急事態につき現場状況を報告します。サードアベニューF23路地裏にてレリックと思しきケースを発見。ケースを持っていたらしい小さな女の子が1人」

「女の子は意識不明です」

「指示をお願いします」

キャロから六課メンバーへ全体通信が入る。全体通信のため六課の隊舎へも繋がっている。

「スバル、ティアナごめん、お休みは一旦中断」

「救急の手配はこっちです。2人はそのままケースと女の子を保護、応急手当をしてあげて」

「はい！」

——聖王教会 本部

教会の一室に金髪の女性と紺の髪をした青年が椅子に腰掛けていた。

「それにしても、あなたの制服姿はやっぱり新鮮ですね」

「制服が似合わないというのは、友人どころか妻にまで言われますよ」

「ふふっ、そんな。いつもの防護服姿と同じくらい凛々しくていらっ
っしゃいますよクロノ提督」

「ありがとうございます、騎士カリム」

会話している2人のうち、男性のほうはフェイトの義兄でもあるク
ロノ・ハラOWN提督。

もう1人の女性は聖王教会 教会騎士団 騎士、カリム・グラシア
である。

また聖王教会は管理局と協力関係にあるため、彼女は名目上管理局
に籍を置いており、局内での立場は理事官となっている。

「失礼します」

そう言って入室してきたのはシグナムと、聖王教会所属でカリムの
補佐的存在で秘書であるシャッハ・ヌエラだった。通称はシスター・
シャッハである。

「シグナム、お帰りなさい」

「合同捜査の会議はもう？」

「ええ、滞りなく」

「こっちはちょうど六課の運営面での話が済んだところだよ」

この会話からも分かるように八神家とカリム、シャツハは旧知の間柄である。

特にシグナムとシャツハは互いの腕を認め、磨きあう剣友だったりもする。

八神家とクロノの関係については言うまでもないだろう。

「ここからは今後の任務についての話。あなたも同席して聞いておいてね」

「はい」

「あら、直接通信？はやてから？」

「エリオ！キャロ！」

「スバルさん、ティアさん」

路地裏で女の子の応急手当を済ませ、待機していた2人の元にスバルとティアナが到着する。

「この子か、また随分ボロボロに」

「地下水路を通ってかなり長い距離歩いてきたんだと思います」

「ケースの封印処理は？」

「キャロがしてくれました。ガジェットが見つける心配は無いと思います。それからこれ・・・」

「ケースはもう1個あった？」

エリオがティアナに見せたケースには切れた鎖が巻き付いていた。

「今、ロングアーチに調べてもらってます」

「隊長達とスザクさん、シャマル先生にリイン曹長がこっちに向かってくれてるそうだし、とりあえず現状を確保しつつ周辺警戒ね」

「「はい」」

「そう、レリックが」

「それを小さな女の子が持ってた、ゆーんも気になる。ガジェットや召喚師が出てきたら市街地付近での戦闘になる。なるべく迅速に、確実に片付けなあかん」

六課でははやてが聖王教会にいるカリム達と通信を行っていた。

「近隣の部隊にはもう？」

「うん、市街地と海岸線の部隊には連絡したよ。奥の手も出さなあかんかもしれへん」

「そうならないことを祈るがな」

カリムは俯き少しばかり何かを考える素振りを見せ、後ろへと顔を向ける。

「シグナム、あなたも向こうに戻っておいたほうがいいわ。シャツハに送ってもらえばすぐ戻れるから」

「ありがとうございます、騎士カリム」

女の子の発見地点のすぐ近くのビルの屋上にヘリは緊急着陸をしており、既にシャルマルが診察をしていた。

「バイタルは安定してるわね。危険な反応も無いし、心配ないわ」

「よかった」

シャルマルの診断結果に安堵の声を上げるスバル。他のメンバーも声にこそ出さないものの、安堵の表情が浮かんでいた。

「ごめんねみんな、せっかくのお休みだったのに」

「ケースと女の子はこのままヘリで搬送するから、みんなはこっちで現場調査ね」

「スザク君、この子をヘリまで抱いていってもらえる？」

「あ、はい。分かりました」

シャルに頼まれたスザクは女の子をお姫様抱っこの要領で抱きかかえると、ヘリへと歩いていく。

その様子をなのはとフェイトは少々羨ましそうな視線で見っていたとか。

「ガジェット来ました!」

六課ではガジェットの反応を捕らえたシャーリーが焦ったように声を上げる。

「地下水路に数機ずつのグループで総数、16、20!」

「海上方面12機単位が5グループ!」

「多いな」

どうすべきか悩んでいるはやての元へ通信が入る。

「スターズ02からロングアーチへ。こちらスターズ02、海上で演習中だったんだけどナカジマ三佐が許可をくれた。今現場に向かっている。それからもう1人」

「陸士108部隊、ギンガ・ナカジマです。別件捜査の途中だったんですが、そちらの事例とも関係がありそうだったんです。参加してもよろしいでしょうか？」

「うん、お願いや。ほんならヴィータはリインと合流、協力して海上の南西方向を制圧」

「南西方向了解です」

「なのは隊長、フェイト隊長、スザクくんは北西部からや」

「「了解」「」」

「ギンガは地下でスバルたちと合流、道々別件のほうの話も聞かせてな」

「はい」

はやてはみんなに的確に指示を出す。さすがは若くして1つの部隊を立ち上げた指揮官なだけはある。

とあるビルの上に、紫の髪をした少女ルーテシアが1人立っていた。そこにスカリエッティとモニター越しに話していた女性から通信が入る。

「ヘリに確保されたケースとマテリアルは妹たちが回収します。お嬢様は地下のほうに」

「うん」

「騎士ゼストとアギト様は？」

「別行動」

「お1人ですか」

「1人じゃない」

そう言うルーテシアのデバイス、アスクレピオスからは黒く小さい

楕円形をした物体が現れる。
ルーテシアはそれを大事なものを抱きかかえるように、顔の前へと持ってくる。

「私にはガリユーがいる」

「失礼しました。協力が必要でしたらお申し付けください、最優先で実行します」

それだけ言うと女性からの通信は切れる。

「行こうか、ガリユー。探し物を見つけるために」

その言葉が終わるとともにルーテシアの姿は魔方陣とともに消える。
その後には何も残されていなかった。

「ギンガさん、お久しぶりです」

「うん、ティアナ。現場リーダーはあなたでしょ？指示をくれるかな？」

「分かりました。ひとまず南西のF94区画を目指してください。途中で合流しましょう」

「了解」

どうやらティアナとギンガには面識があるようだ。

「ギンガさんて、スバルさんのお姉さんですよね？」

「そう、私のシューティングアーツの先生で歳も階級も2つ上」

ギンガはスバルのお姉さんだった。どうりで同姓な訳だ。ちなみにシューティングアーツとは格闘技法のことである。

「ギンガさん、デバイス同期で相互位置確認と独立通信が出来ます。準備よろしいでしょうか？」

「うん、ブリッツキャリアーお願いね」

<Yes sir.>

その頃、海上ではスザクたちがガジェットと交戦に入っていた。スザクがガジェットを引き付け、なのはとフェイトがそれぞれアクセルシューターとプラズマランサーを撃ち出して撃墜していく。

「スターズ01、ライトニング01、スザクさんエンゲージ」

アルトが戦況を報告する中、はやてはギンガとの通信を続けていた。ちなみにその通信は聖王教会にも繋がっている。

「私が呼ばれた事故現場にあったのはガジェットの残骸と、壊れた生体ポットなんです。ちょうど5、6歳の子供が入るくらいの。近くに何か重たいものを引きずって歩いたような跡があって、それをたどっていいこうとした最中連絡を受けたしだいです。それからこの生体ポット、少し前の事件でよく似たものを見た覚えがあるんです」

「私も、な」

「人造魔導師計画の素体培養機。これはあくまで推測ですが、あの子は人造魔導師の素体として作り出された子供ではないかと」

「人造魔導師って？」

どうやら先ほどの通信はスバルたちのところにも繋がっていたようで、人造魔導師についてよく知らないキャラが疑問を浮かべていた。

「優秀な遺伝子を使って人工的に生み出した子供に投薬とか、機械部品の埋め込みで後天的に強力な魔力や能力を持たせる、それが人造魔導師」

「倫理的な問題は勿論、今の技術じゃどうしたって色んな部分で無理が生じる。コストも合わない。だからよっぽどどうかしてる連中でもない限り手を出したりしない技術のはずなんだけど」

スバルとティアナが説明している間、エリオはなにやら思いつめたような表情を浮かべていた。

そのとき、突然ケリユケイオンに反応が出る。

<A movement reaction perception,
at the Gadget Drone.>

「あ、来ます！小型ガジェット6機！」

海上ではヴィータとリインが1グループ目を撃破したところだった。

「おしっ！いい感じだ」

「リインも絶好調です！」

「ガンガン行くぞ。さっさと片付けて他のフォローに回らねえと」

「はいです！あっ、あれは」

リインが遠くの海上で何かを発見したようだ。
そこには今までよりも遥かに多い数のガジェットが向かってきていた。

そしてそれはスザク達の所も同様だった。

雲の上、そこにソレは居た。

青いボディースーツを着て白いマントを羽織り、メガネをかけた人物だった。

「うふふっ、クアットロのインヒューレントスキル、シルバーカーテン。嘘と幻のイリュージョンで回ってもらいましょう」

その人物は自身を指してクアットロと言った。果たしてクアットロ、即ち4という数字が指す意味とは何なのだろうか。

「航空反応増大！これ・・・嘘でしょ！？」

アルトが驚きの声を上げる。無理もないことだった。ガジェット
の反応が増えたかと思うと、海上を埋め尽くすほどまで増えたのだ。

「波形チェック！誤認じゃないの？」

「問題出ません。どのチェックも実機としか」

「なのはさんたちも目視で確認できるって」

そのとき、突然はやてが立ち上がる。

「グリフィス君」

「はい」

はやては一体何をするつもりなのだろうか。

「幻影と実機の構成編隊？」

フェイトがそう言う様に、先ほどから攻撃を受けると撃墜できるものと攻撃をすり抜けるものがあった。

どうやら大量に確認できるうちのいくらかは幻影のようだ。だがその見分けがつかないために全てに攻撃するしかないのが現状だった。

そこでスザクたちは一度攻撃の手を止め、なのはが展開した全方位を球状に覆うオーバルプロテクション内へと入る。

「防衛ラインを割れない自信はあるけど・・・」

「全てを攻撃していたんじゃない。どうする？」

「ここまで派手な引き付けをするってことは」

「地下かへりに主力が向かっているということか」

「スザク、なのははいやな予感がする。2人は戻って。私が限定解除して広域殲滅で――」

「割り込み失礼」

3人がどうするか話しているところへはやてから割り込みの通信が入る。

その姿は部隊の制服ではなく、騎士甲冑を身に纏っていた。

「ロングアーチからライトニング01へ。その案も限定解除申請も部隊長権限において却下します」

「はやて？」

「なんで騎士甲冑!？」

「いやな予感私も一緒でな。クロノくんから私の限定解除許可を貰うことにした。空の掃除は私がやるよ。ちゅーことで、3人は地上に向かってヘリの護衛、ヴィータとリィンはフォワード陣と合流。ケースの確保手伝ってな」

『『了解!』『』』

聖王教会に居るクロノの元へはやてから、限定解除申請の通信がき

ていた。

「君の限定解除許可を出せるのは現状では、僕と騎士カリムの一同
ずつだけだ。承認許諾の取り直しは難しいぞ。使ってしまったいい
のか？」

『使える能力を出し惜しみして、後で後悔するんは嫌やからな』

「場所が場所だけにSSランク魔導師の投入は許可できない。限定
解除は3ランクのみだがそれでいいか？」

『シングルS・・・それだけあれば十分や』

「はぁ・・・」

クロノは一度ため息をついた後、すぐに限定解除の許可を出す。

「八神はやて、能力限定解除3ランク承認。リリースタイム120
分」

『リミットリリース!』

モニターに映るはやては強い輝きに包まれる。

「完全解除でない分、許諾取り直しもいくらか優しくなるかもしれ

ませんし、ね」

「気休め程度ですがね。地上部隊は上層部が厳しいですから」

3ランクのリミットを解除したはやては雲の上へと出たあと、夜天の書を出現させる。

「よし、久しぶりの遠距離広域魔法、行ってみよか！」

下水道ではフォワード陣とガジェットによる戦闘が行われていた。ちょうど第一波のガジェットを叩いたところのようだ。

「空の上はなんだか大変見たいね」

「ケースの推定位置までもうすぐです」

そのとき突然近くの壁が吹き飛んだ。フォワード陣はすぐさま警戒

態勢へと入る。だが現れたのがガジェットではなかった。

「ギン姉！」

「ギンガさん！」

「一緒にケースを探しましょう。此処までのガジェットはほとんど叩いてきたと思うから」

そう言うギンガに呆然とした顔をしているエリオとキャロ。そんな2人にギンガは微笑みを向ける。

それを見て我に返った2人は敬礼をするのだった。

「ロングアーチ01、シャリオからロングアーチ00、八神部隊長へ」

「はいな！」

「サイティングサポートシステム準備完了です。シュベルトクロイ

ツとのシンクロ誤差調整終了」

「うん、了解。ごめんな、精密コントロールとか超距離サイティン
グはリインと一緒にやないとどうも苦手で」

「その辺はこっちにお任せください。準備完了です」

「おおきにな」

はやての言うとおり、彼女は広域魔法の精密コントロールを苦手と
している。故に普段はリインがサポートしているのだが、現在リイ
ンはいない。

そのため、ロングアーチにはそのためのシステムが備わっている。
そしてはやては広域魔法使用のための詠唱に入る。

「来よ、白銀^{はくぎん}の風、天よりそそぐ矢羽となれ」

詠唱とともに投射面にミッド式の魔方陣が中央に大きなものが1つ、
四方に小さいものが4つ展開される。

「スターズ01、ライトニング01、スザクさん安全域に退避。着
弾地点の安全確認」

「よっし、第一波行くよ！フリース・・・ヴェルグ！」

そして轟音と共に超長距離砲撃、フレースヴェルグが5発一気に発射される。

「フレースヴェルグ第一波発射。発射軌道正常」

「グループEに着弾します。5、4、3、2、1、0！」

ゼロのカウントと共にフレースヴェルグは周囲を巻き込んで炸裂する。

その効果範囲の広さと威力の高さは「殲滅兵器」の域にあり、はやての保有魔法の中でも、ほぼ最大の効果範囲を持つ。

「グループE消滅。続いてB着弾、消滅」

「同じくA」

「追撃第2波、発射」

「消滅時のデータから実機と幻影の判別パターンの割り出しを！」

下水道では相変わらずガジェットの撃墜が続いていた。小型である？型ばかりだったが、不意に？型が現れる。だが今のフォワード陣には？型であろうと問題は無かった。スバルとギンガは？型に向かって駆けて行く。

「スバル、一撃で決められる？」

「決める！」

<Are you ready?>

<Yes.>

マッハキャリバーとブリッツキャリバーも互いに確認を取る。ギンガが先行し、スバルがその後続く。

「行くよ相棒！」

<Load cartridge.>

リボルバーナックルから2発のカートリッジが排出され、ナックルスピナーが回転する。ガジェットが銀河へ向け数発のビームを放ち、アームを伸ばす。

「トライシールド！」

ベルカ式の魔方陣を盾のように使用してガジェットのビームを防ぎ、左拳を突き出す。

ガジェットはそれをアームで受け止めるが、ギンガの攻撃は四でしかなかった。

「ディバイーーン」

後ろに続いていたスバルがギンガの頭上を飛び越え、既にチャージが完了していたディバインバスターごと右腕をガジェットの内部へと突き入れる。

「バスターーーン！」

ゼロ距離で放たれた攻撃はガジェット？型を一撃の下に破壊し、機能停止させた。

少し離れた場所で戦っていたほかのメンバーと合流すると、再びケースの搜索を始める。

開けた場所にケースはあるらしく、全員が手分けして搜索する。

「ありましたー！」

キャロがケースを発見し、皆がキャロのほうへ移動を始めると同時ににやらガンッガンッ、という音が聞こえてくる。

「何、この音？」

キャロのほうへ突然黒い魔力弾が放たれ、彼女の周囲に着弾する。その衝撃でキャロは吹き飛ばされ、ケースは彼女の手を離れる。そして姿を現したのは人型の黒い虫のようなものだった。そちらに気を取られている隙に、ケースは紫の髪の少女ルーテシアが拾う。

「邪魔」

「きゃあっ！」

すぐに取り返すためにキャロはその少女の下へ向かうが、少女が放った魔法によりバリアを破壊されて吹き飛ばされてしまう。キャロを受け止めようとしたエリオだが、そのまま一緒に吹き飛ばされ柱へと激突する。

「うおおおおお！」

スバルが黒い人型の虫——ガリユーに向け跳び蹴りを放つが簡単

に回避される。

ギンガも攻撃に加わるが一向にダメージを与えることが出来ない。それゆえに当然ルーテシアの持つケースを奪い返すことも出来ずにいた。

だが次の瞬間、状況は一変する。

「っ!？」

「ごめんね、乱暴で。でもね、これ本当に危ないものなんだよ」

オプティックハイドにより、姿を消していたティアナがダガーモードのクロスミラージュを首元へと突きつけていた。

しかし何処からとも無く魔力弾のような飛来し、地面に着弾すると音響閃光弾のような効果を生み出す。

「くっ!？」

フォワード達目を瞑って耳を押さえる。その間にルーテシアは立ち去ろうと歩みを始める。

「まったく。アタシ達に黙って勝手に出かけちゃったりするからだぞ。ルーラーもガリユーも、本当に心配したんだからな」

そう言って現れたのはリインと同じくらいの大きさの人物だった。

彼女もまた融合騎なのだろうか。

「ま、もう大丈夫だぞルールー。何しろこのアタシ、烈火の剣精アギト様が来たからな！」

下水道から現れた小さな女の子との出逢いにより、物語は動き出す。六課のメンバー達を待ち受けるのはどんな運命なのだろうか。今はまだ、誰も知らない。

第9話「動き出す物語」(後書き)

本当は市街地での戦闘終了まで書くはずだったんですけどね。
予想より長くなってしまったので切りました。

次回は作者も待ちに待ったスザクの戦闘回です！
お楽しみに！

第10話「本当の戦場」(前書き)

まずは、PVが10万を超えました。

この駄文を見てくださっている皆さん、ありがとうございます。これからも頑張ります。

9話でPVが10万ということは平均して1話辺り111111回なわけで・・・

スゲ・・・まさかこんなに見てもらえるとは。感謝です。

それにしてもですね、この小説の続編がStS編を早く終わらせろと頭の中でうるさいんですねW
ちなみに続編がどんなものかというのはまだ秘密です。

第10話、始まります。

第10話「本当の戦場」

アギトの放つ炎により辺り一帯に爆発が起こる。

近づくことが出来ないために一旦距離を取るフォワード達。

「ティア、どうする？」

「任務はあくまでケースの確保よ。撤退しながら引き付ける」

「こっちに向かつてるヴィータ副隊長とリイン曹長に上手く合流できれば、あの子達も止められるかも、だよな」

「そう」

『よし、中々いいぞ。スバルにティアナ』

『ヴィータ副隊長！？』

『私も一緒です。2人とも状況をちゃんと読んだナイス判断ですよ』

作戦の確認をしていたフォワード達に突然念話が入る。

予想よりも早く到着したヴィータ達に驚いたようだ。

「ルルー、何か近づいてきてる。魔力反応・・・でけえ！」

「っ!？」

ルーテシアとアギトは接近するヴィータ達の魔力反応に気づき、上へと視線を向ける。

「アイゼン！」

<G i g a n t f o r m . >

「行くぞリイン！」

「はいです！」

「うおりやああああ！」

ヴィータは叫び声と共にギガントフォームへと変形したグラーフアイゼンを壁へ思い切り叩きつける。

フォワード達を助け、ケースを確保するために。

フォワード達より少し前に出て、ガリユーと対峙しているギンガ。そのギンガとガリユーの中間あたりの天井が突然崩壊する。

いきなりの出来事にその場に居る全員がそちらへと目を向ける。

崩落した天井の残骸が巻き起こした粉塵の中からリインが飛び出し即座に魔法を発動させる。

「捕らえよ、凍てつく足枷」

「「っ!?!」」

ルーテシアとアギトを中心に波の様なものが円を描くように出現する。

「フリーレンフェッセルン!」

リインがそう叫ぶと同時に、波がトグロを巻いたような形状に固まって氷となる。

その直後にヴィータもまた粉塵より飛び出し、ルーテシアたちの方へと注意が逸れていたガリユーへと突撃する。

「ぶっ飛べええええ!」

ギガントフォルムのままのグラーフアイゼンをガリューへ叩きつける。

ガリューはそれを左腕で受け止めるが、ヴィータの強引な力技によって数十メートル先にある柱の一部に激突するが、それでも止まらずその先にある壁へと激突する。

だがその壁さえも破壊し、壁の向こうへと吹き飛んでいった。

「おう、待たせたな」

ヴィータはそう言いながらグラーフアイゼンをハンマーフォームへと戻す。

「皆無事で良かったです」

「・・・副隊長達やっぱつよい」

フォワード達は自分達が苦戦していた相手を、あっという間に片付けてしまったヴィータ達に驚いているのか、呆れているのか声が出ていない。

「でも局員が公共施設を壊しちゃっていいのかな？」

「まあ、この辺はもう廃棄都市区画だし」

声の調子から察するに呆れていたようだ。
そんな話をしている間にキャロが意識を取り戻したようでゆっくりと目を開ける。

「ちっ」

「こっちもです。逃げられた、ですね」

ヴィータとリインは自分達の攻撃した相手の確認をするが、ガリューの方は既に姿が無く、ルーテシアとアギトの方は地面に穴を開けて逃げたようだ。

その時、突然建物が大きな揺れを起こす。

「何だ？」

「大型召喚の気配があります。多分それが原因で」

先ほど意識を取り戻したキャロがエリオに支えられながら歩いてくる。

「一先ず脱出だ、スバル！」

「はい！ウイングロード！」

ヴィータの指示でウイングロードを発動するスバル。
螺旋階段のように上へと形成されていく。

「キャロ、レリックの封印処理お願いできる？」

「はい、分かりました」

「ちよつと考えがあるんだ。手伝って」

ティアナには何やら考えがあるようで、ウイングロードを駆け上がっていく途中でキャロに封印処理を頼むのだった。

上空では依然、はやてのフレースヴェルグによる超長距離砲撃が続いていた。
もう何発も撃って魔力をかなり消費しているのだろう、はやては肩で息をしていた。

「さあ後何機や？」

「9編隊、いえ8編隊に減りました」

「幻術パターンの解析、出来始めてます」

「観測隊からの連絡、複合識別作業順調です」

「いけます！」

「うん、さすが機動六課のオペレーター陣や。さあガンガン行くよ！
照準よろしく」

はやては改めて構えなおす。前線メンバーもロングアーチも頑張っている。

自分ひとりが先に音を上げるわけにはいかないのだ。

「なんだ、一体何事だこれは」

「本局遺失物捜査部、機動六課の戦闘。そのリアルタイム映像です。撃たれているのは兼ねてより報告のあるAMF能力保有のアンノウ。撃っているのはおそらく六課の部隊長、魔導師ランクは総合SS」

映し出される映像は今現在行われている戦闘がリアルタイムで映し出されていた。

とは言っても、映し出されるのは上空にて砲撃を行っているはやてが主で、地下で戦っていたフォワード達の映像は映し出されていなかった。

「地上部隊にSS？聞いておらんぞ」

「所属は本局ですから」

「後見人と部隊長は？」

「後見人の筆頭は本局次元航行部隊提督、クロノ・ハラオウン提督とリンディ・ハラオウン統括官。そして聖王教会の騎士、カリム・グラシア殿の御三方です」

「ちっ、英雄気取りの青二才共が」

不機嫌丸出しの表情と声でそう言うのは、地上本部の数多くの実権を握っている人物レジアス・ゲイズ中将。その質問に答えているの

は彼の副官であり娘でもある、オーリス・ゲイズ三佐である。

「部隊長は八神はやて二等陸佐」

はやての映像が映し出された瞬間、レジアスの表情が変わる。

「八神はやて？あの八神はやてか！？」

「はい。闇の書事件の八神はやてです」

「近く、お前が直接査察に入れ」

「ハッ、了解しました」

「ここまでです」

リンがルーテシアとアギトにリングバインドを使用する。

脱出したヴィータ達は、すぐ近くで大型召喚をしていたルーテシア達の捕縛に成功していた。

「くっそお」

「ふう、子供いじめてるみてーでいい気分はしねえが、市街地での危険魔法使用及び公務執行妨害、その他もろもろで逮捕する」

とあるビルの屋上に2つの影があった。1人は少し前に雲の上に居た人物、クアットロだった。

もう1人は布で包まれた何やら大きなモノを持っていた。

「ディエチちゃん、ちゃんと見えてる？」

「ああ、遮蔽物も無いし空気も澄んでる、よく見える。でもいいのかクアットロ？ ケースは残せるだろうけど、マテリアルのほうは破壊しちゃうことになる」

「んふふつ、ドクターのウーノ姉様曰く、あのマテリアルが当たり

なら、本当に聖王の器なら砲撃くらいでは死んだりしないから大丈夫、だそうよ」

それを聞いたディエチと呼ばれた人物が布を取ると、大砲のようなものが現れる。

それと同時にクアットロに、スカリエッティとよく通信をしている女性から通信が入る。

『クアットロ、ルーテシアお嬢様とアギト様が捕まったわ』

「あゝそういえば例のチビ騎士に捕まってましたねゝ」

『今はセインが様子を伺ってるけど』

「フォローします？」

『お願い』

短く告げると通信は切れる。クアットロはすぐにセインと呼ばれた人物へ念話を送る。

『セインちゃん』

『はいよゝクア姉』

『こっちから指示を出すわ。お姉様の言うとおりに動いてね』

『うゝん、了解』

捕まったルーテシアはヴィータ達に囲まれるように立っていた。

六課のメンバーが何かを言っているが、ルーテシアは念話が来たため、全く聞いていなかった。

『はあい、ルーお嬢様』

『クアットロ』

『何やらピンチのようで、お邪魔でなければクアットロがお手伝いいたします』

『お願い』

『はあい、ではお嬢様、クアットロの言うとおりの言葉をその赤い騎士に』

その頃スザク達はヘリの護衛ために飛んでいた。

「見えた」

「良かった、ヘリは無事」

「っ!？」

ヘリが見え安堵したのもつかの間、スザクが何かを見つける。
ほぼ同時にロングアーチでもソレを捉えていた。

「市街地でエネルギー反応! 大きい!？」

「そんな、まさか!？」

「砲撃のチャージ確認! 物理破壊型、推定Sランク」

クアットロ達がいるビルの屋上では、ディエチが先ほどあらわにし

た大砲——イノーマスカノンを構え、チャージしていた。

「インヒューレントスキル、ヘヴィバレル発動」

「逮捕はいいけど」

その横ではクアットロがルーテシアに念話を送っている。

「大事なヘリを放っておいていいの？」

「発射まで12秒。10、9・・・」

「ああ、お嬢様、もう一言いいですか？あなたはまた守れないかもね」

「あなたはまた守れないかもね」

「っ!？」

ルーテシアがその言葉を口にする、ヴィータは目を見開く。
ヴィータは数年前になのはの撃墜事件があったときのことを未だトラウマの如く抱えていた。

それを今の発言により思い出したのだった。

「発射！」

同時にエネルギー弾が発射され、ヘリへと一直線に向かっていく。
それを止められるものは無く、無情にもヘリへと直撃する。

「砲撃・・・ヘリに直撃。そんなはずない！状況確認！」

「ジャミングが酷い、データ来ません！」

それは勿論ヴィータ達にも繋がっている。

「そんな・・・」

「ヴァイス陸曹とシャル先生が」

「てんめえく!」

「ヴィータ副隊長落ち着いて」

「うっせえ!」

激昂したヴィータはルーテシアの肩を鷲掴みにする。そんなヴィータをスバルは何とか落ち着かせようとするが、ヴィータは聞く耳を持たない。

「おい、仲間が居んのか!? 何処に居る! 言え!」

そんな彼女たちの背後には地面から腕が一本生えていた。その腕はだんだんとエリオに近づいてきている。

「エリオ君! 足元に何か!」

「えっ? うわっ!?!」

「いただき」

それに気付いたギンガが叫ぶが、地面から人が飛び出しエリオの持つケースを奪って再び地面へと姿を消す。

そちらに気を取られていた隙に先ほどの人物——セインはルーテシアの所に現れる。

「あっ、こいつ！」

ヴィータがセインへと飛びつくが、間に合わずまたもぐられてしまう。

「あっ!？」

セインに気を取られている隙にアギトも逃げたようで、リンの手にはアギトを縛っていたバンドのようなものだけが残されていた。

「反応、ロストです」

「くそっ、ロングアーチ・・・ヘリは無事か？あいつら、堕ちてねえよな！」

「うっふふのふゝ、どう？この完璧な計画」

「黙って、今命中確認中。．．．．．あれ？まだ飛んでる」

確認しているディエチの瞳には機械的な物体が出現しており、大量のデータなども表示されている。
それに先ほどの攻撃の際に出現していた歪な形をした魔法陣のことを考えても、人間ではないのだろうか？

「スターズ02とロングアーチへ、こちら枢木スザク。ヘリの防衛に成功」

「よ、よかった。間に合って」

「でも、あれって．．．」

ヘリが無事だったことに喜びの声を上げるロングアーチだが、すぐにスザクの変化に気付く。

爆煙が晴れたそこにはスザクがヴァリスを正面に構えているのだが、今までと違い、背中から伸びるユニットが連結されていた。

「あら」

「こっちもフルパワーじゃないとはいえ、マジで？」

ディエチの砲撃を防がれたことに驚いている二人だが、次の瞬間上から射撃魔法が飛んでくる。

爆煙から飛び出し近くのビルの屋上に着地して状況の確認をしようとする2人だが、すぐさま2人の後ろにフェイトが現れる。

「見つけた」

「速い!？」

フェイトを確認するとすぐさま逃走を開始する2人。当然ながらフェイトはそれを追跡する。

「止まりなさい！市街地での危険魔法使用及び殺人未遂の現行犯で逮捕します！」

「今日は遠慮しときます。IS発動、シルバーカーテン」

ISの発動と共に2人の姿が消える。さすがにこうなるといくらフェイトでも攻撃の仕様がなない。こういうときにはやての出番である。

「はやて！」

『位置確認、詠唱完了。発動まで後4秒』

「了解」

それを聞くとフェイトは180度方向転換し、引き返していく。
それを見たクアットロとディエチの2人は疑問に思いながらもシルバーカーテンを解除する。

「まさか」

「広域空間攻撃!？」

「うっそおくん!？」

2人が空を見上げると、空間攻撃のための魔力球が形成されていた。

「遠き地にて、闇に沈め。デアボリック・エミッション！」

上空にいるはやてが広域空間攻撃を発動、魔力球は一気に巨大化し
辺り一体を飲み込んでいく。

本来、この魔法は自身を中心として発動させる魔法だが、はやての
資質「遠隔発生」により遠距離での発生が可能となっている。

飲み込まれかける2人だが、クアットロが飛行能力の無いディエチを抱きかかえて空へと逃げる。

<They never surrender. Judged
to have in danger of escape.>
<Knock out by buster. After that,
arrests it.>

2人が逃げた先にはなのはとフェイトが待ち構えており、既に砲撃の体制に入っていた。

『ディエチ、クアットロじつとしてろ』

「「っ!?!」」

『IS発動、ライドインパルス』

絶体絶命かと思われた矢先、2人の元に念話が届く。

その人物は腿と足首、手首付近から濃い紫のエネルギー翼を発生させていた。

フェイトはバルディッシュから2発のカートリッジをロード、なのはは大口徑カートリッジを1発ロードする。

「トライデントスマッシュー!」

「エクセリオンバスター！」

2つの砲撃がクアットロ、ディエチへと迫る。

エクセリオンバスターは言わずと知れた砲撃である。トライデントスマッシャーは放射面の魔法陣中央から一本、続いて同じく放射面の魔法陣の中央を基点に上下に一本ずつ、枝分かれするようにトライデント（三ツ又の矛）状に3つに分かれた直射砲撃が飛び、着弾点で結合することで反応、雷撃を伴う大威力を発生させる砲撃魔法である。

『ビンゴっ！』

「じゃない、避けられた！」

ロングアーチでは喜びの声が上がるが、すぐさまなのはによってそうではないことが告げられる。

『え？』

「直前で救援が入った」

「え、でもリーダーには何も」

アルトがそういうようにリーダーには救援の反応が無かった。

だがそれは仕方が無かった。先ほどの人物が発動したライドインパルス、その最大速度は人間の視認速度を凌駕、レーダーの追尾も振り切るのだ。

「ふう、トーレ姉様助かりました」

「感謝」

「ボーっとするな、さっさと立て。馬鹿者共め、監視目的だったが来ていて良かった。セインはもうお嬢とケースの確保を完遂したそうだ。合流して戻るぞ」

クアットロは特に変わった表情は浮かべていなかったが、ディエチはもうコリゴリだとも言いたげな表情を浮かべていた。

時間はスザクがヘリの防御を成功した後まで遡る。

なのはたちが犯人たちを捕まえるべく戦闘を行っている時だった。スザクがコンクエスターユニットを元の状態に戻し終わると同時に赤黒い弾丸が飛来する。

その攻撃自体は問題なく防御する。問題は現れた人物のほうだった。

「やはり・・・ブラッドリー卿」

「久しぶりだな枢木卿」

「何故ここにいる！」

「戦場だからさ」

「何!？」

「聞こえなかったのか？ 貴様のようなサル共の大事なものを奪えるからだと言ったんだ！」

叫ぶと同時に飛び槍の右腕を突き出す。

だがスザクは身体を右へ回転させながら左側に回りこむことで簡単に回避し、その勢いのまま右手でMVS抜き、切りつける。

だがそれはルキアーノが左手に持つ盾で防がれる。弾くようにして互いに一度距離を取る。

「投降しろブラッドリー卿。僕には勝てない」

「そんなことやってみなければ分からないだろう」

再び距離を詰めての近接戦闘に入るが、スザクの言葉通りルキアー

ノの攻撃はことごとく避けられ、スザクの攻撃ばかりが当たったいく。
当たるといっても防御はされているが、だがどう見てもスザクのほうが優勢なのは明らかだった。

「諦めて投稿しろ。貴様の攻撃は僕には当たらない」

「確かに今のままでは部が悪いか。だがこれならどうだ？ パーシヴアル、フルドライブ！」

「何だ！？」

ルキアーノが光に包まれたかと思うとほんの2、3秒で光は晴れる。そしてその姿を見たスザクは目を見開く程驚く。

「そんな、どうして・・・」

スザクが驚くのも無理は無かった。本来ルキアーノが持ち得ないはずの力があつたのだ。

彼の背中には濃い紫の色をした6枚羽根のエナジーウイングが装備されていた。

「いくぞ枢木卿」

次の瞬間ルキアーノの姿が視界から消えうせる。

スザクは左腕にブレイズルミナスを発生させると同時に後ろを振り向く。

その瞬間にパーシバルの槍がブレイズルミナスに接触し、火花を散らす。

「よく反応した、さすがはナイトオブゼロと言ったところか」

「貴様、何故それを知っている!？」

「おおっと、口が滑ってしまったな」

「言え!どうやってそれを知った!」

「そんなことを言っている余裕があるのか?」

「くっ!」

ルキアーノがそう言うように、ブレイズルミナスには僅か数秒でヒビが入り始めていた。

一点突破に特化している上に、第9世代に相当する能力を持ってしまったパーシバルの槍をランスロットのブレイズルミナスが防ぎきれずが無かった。

スザクは右足での蹴りを入れるが一瞬で間合いを取られ回避される。そして次の瞬間には第2撃目の攻撃のために、すでに超高速飛行に入っていた。

だがスザクはこの圧倒的不利な状況の中、確信を得ていた。

（相手はエナジーウイングを装備していて、第9世代に相当する能力がある。でもそれでもなんとかついていける）

スザクはヴァリスをコンクエスターユニットと連結させ、左手にMVSを持つ。

（理由は一つ、ブラッドリー卿が能力を完全に引き出しきれて居ない。なんとか一瞬隙を作らせれば）

「喰らえっ！」

今度は右から槍が突き出される。だがスザクには見えており、ハドロンブラスターを撃ち出す。

「何!？」

しかし速度はルキアーノのほうが圧倒的に速く、見えていたところでスザクの攻撃は当たらない。

次いで正面から槍が突き出される。勿論それも見えている。見えているのだが、スピードがついて来ない。それ故に避けることも出来ない。

「コアアルミナスコーン全力展開！」

コアルミナスコーンにより受け止めるが、それも長くは持たない。

「枢木卿、貴様は守るしか能が無いのか？よくそれでラウンズになれたものだ」

「貴様・・・」

「「スザク（君）！」」

その時だった。なのはとフェイトが救援に駆けつけるが、その表情には驚きが浮かんでいる。

スザクはリミッターが掛かっているとはいえ、シグナムと引き分ける程の力があつた。だがそのスザクが防戦一方になっていた。

「今助けるから！」

「2人とも来るな！離れるんだ！」

「どうして！？えっ？」

「ふっ」

突然ルキアーノがスザクへの攻撃を中断し、なのはたちに向かう。スザクはルキアーノが何をしようとしているのかを瞬時に理解する。

「来るよ、フェイトちゃん！」

「うん！」

「止めろ！ブラッドリー卿！」

コアルミナスコーンを解除してルキアーノを追う。
が、それと同時にルキアーノはスザクのほうを振り向く。

「この瞬間を待っていたぞ枢木卿」

ルキアーノの標的はなのは達に変わってなどいなかった。スザクに
ブレイズルミナスを解除させ、直接急所を攻撃するための演技だっ
たのだ。
スザクに右腕の槍が迫る。

「ダメ、間に合わない！」

「スザク！」

なのはとフェイトの位置からでは発動まで時間が掛からない魔法で
も間に合わない。

2人ともルキアーノの危険性は身をもって知っている。そのため2

人の脳裏には最悪の事態がよぎった。

スザクにはルキアーノの槍がやけにゆっくりに見えていた。

（終わるのか、ここで？ダメだ！終わるわけにはいかない！）

その瞬間スザクの瞳の周囲が赤く染まる。

突き出された槍を体勢を低くすることで避ける。が、スピードがついて来ないために避けきれずコンクエスターユニットに直撃し、破壊される。

だがそれを見越していたのか、ヴァリスの連結は解除されている。

「はあっ！」

そこから左手に持つMVSをルキアーノの右脇腹へと突き刺す。

「ぐうっ！？このサルがあ！」

「捕まえた！」

そこでスザクが体を起こし、左手でルキアーノの首を鷲掴みにする。ルキアーノは右腕を引こうとするが、スザクがルキアーノの正面から少し右にずれた位置で身体を起こしたため、槍を戻すのに手間取ってしまい、その隙にバーストモードのヴァリスが至近距離で右腕に放たれる。

「うぐっ！貴様あゝ！？」

ルキアーノの叫びと同時に、スザクはバーストモードのままのヴァリスをルキアーノの胸部へと押し付ける。

「これで終わりだ、ブラッドリー卿！」

「終わるのは貴様だあ！裏切りの騎士があ！」

スザクがヴァリスを押し付けると同時にルキアーノは大腿部にあるハドロン砲の発射口を開いていた。

そして同時に弾丸が発射され、2人を中心に大きな爆発が起こる。

「「スザク（君）」」

ほんの数秒間に行われた攻防になのはたちは手を出すことが出来なかった。

そして同時に感じた。戦場で命のやり取りをしてきた者同士の、本当の殺し合いなのだ。

自分たちも命を掛けて戦った場はあった。だが殺し合いをした訳ではなかった。

改めて、スザクと自分達のいた環境が違うということを感じた瞬間だった。

そして今はただ、この爆煙が晴れた後にスザクが無事な姿で居ることを祈るばかりだった。

第10話「本当の戦場」(後書き)

ついにスザクと変態が戦闘！しかもエナジーウイングでWコンクエスターもいつのまにか普通に登場しましたね。

変態がエナジーウイングを装備するというのは当初から考えていたもので、

スザクがコンクエスターで戦うのも予定どおりでした。

当初はコンクエスターで多少の苦戦はしながらも普通に勝つと考えていたんですが、

エナジーウイングの性能を考えたときに、やはり普通には無理だなと思い変更しました。

あと、スザクに限らずギアスキャラはKMFを鎧のように纏って装備しているのですが、

頭部に限ってはインカムのみ装備している状態です。

早い話が、頭部以外の部分を機会の鎧化しているわけですね。

ちなみにその下はパイロットスーツです。

一言で言うなら、ナイトメアが擬人化したと言っても言っておきましよう。

ではまた次回に。

第11話「美と戦いの女神」(前書き)

前書きに書くことが無さ過ぎて・・・

後書きじゃないと裏話とか書けないし・・・

魔法少女リリカルなのはStrikers ～白き円卓の騎士～
始まります。

第11話「美と戦いの女神」

スザクとルキアーノ、2人の相打ちのような攻撃で起こった爆煙は徐々に晴れていく。

なのはとフェイトはスザクの無事を願うばかりだった。

爆煙が完全に晴れるとボロボロになりながらも2人の姿を確認することが出来た。

「よかった・・・」

「なのは！」

「あっ!？」

姿を確認できたことに安堵するなのはだが、スザクの異変にフェイトが気付いた。

スザクの身体にはまるで力が入っておらずグッタリとしている。

そう、意識を失っていたのだ。それに対しルキアーノは意識を保っている。

「サルがあ！」

叫び声上げると共に、腹部に刺さっていたMVSを引き抜くとスザクへと向かう。

「あっ！」

「スザク！」

それを見たのはスザクの元へ、フェイトはルキアーノへと飛ぶ。だが少し離れた位置に居た2人は間に合わない。ルキアーノがMVSを振り下ろす。

今度こそ絶体絶命かと思われた矢先、スザクはコアルミナスコーンに包まれる。

もしルキアーノが右腕に形成する槍ならば意味を成さなかっただろう。

だがそれは既に破壊され、MVSによる攻撃のためソレは十分な効力を発揮する。

「くっ！意識が無いのに何故だぁ！・・・っ！？」

ルキアーノは何かを感じ取ったのか咄嗟に後退する。

次の瞬間、ルキアーノが居た場所を数発のプラズマランサーが通過していった。

「なのは！スザクをお願い！こっちは私が」

「フェイトちゃん気をつけて！」

（スザク君、やっぱり意識が・・・）

なのはスザクの隣で止まるとオーバルプロテクションを発動、自身とスザクを包み込む。

ちなみなのはが隣に来る寸前にコアルミナスコーンは解除されていた。

スザクの意識が無いにも拘らず、落ちずに浮いていたりコアルミナスコーンが発動していた。

それはランスロットが自己判断で簡単な飛行をしたりすることが出来る故だった。

要するに危機的状況に置いて、使用者を守るために自身の能力を使えるということだ。

無論、使用者に魔力が残っていなければ不可能であるが。

一方フェイトはルキアーノと高速戦闘を行っていた。

（やっぱり思ったとおり。これならソニックを使わなくてもいける）

「投降しなさい！今のあなたでは勝ち目はありません！」

「黙れサルが！あいつを殺す邪魔をするなら、貴様の大事なものから飛び散らせてやる！」

万全の状態のルキアーノならば、インパルスフォームで渡り合うことなど出来ない。

だが今はスザクとの戦闘でルキアーノ、パーシヴァル共にかなりのダメージを受けているため飛行速度が格段に落ちていた。ルキアーノは盾から何発もエネルギー弾（ランスロットに限らずナイトメアは使用者の魔力をエネルギーに変換しているため魔力弾ではない）を発射するが、フェイトもプラズマランサーを発射して相殺させる。

「バルディッシュ！」

<H a k e n F o r m>

「はあああああ！」

<H a k e n S a b e r>

相殺させている間にハーケンセイバーを放つ。

ハーケンセイバーを落とすためルキアーノは尚もエネルギー弾を撃ち続ける。

しかし命中したところでハーケンセイバーにエネルギー弾を切断されるだけだった。

それほどまでに高い切断力を持つ攻撃なのだから、避けたほうがいいに決まっている。

だが撃ち落そうとしたために、避けるタイミングを失ってしまっていた。

「くっ！」

盾で受け流すことで身は守ったが、盾を持っていかれてしまう。

「投降しなさい！あなたの負けです！」

「私は負けていない。負けるということは私が死ぬということだ」

「何を！？」

フェイトは焦った。死ぬまで戦いを止めないということは、現状止める方法は気絶させるしかない。

だがそれなりの攻撃をしなければ気絶などさせることは出来ない。ならばすれぱいいと思うだろうが、ルキアーノは腹部からかなりの出血をしておりボロボロなのだ。

いかに非殺傷設定の魔法とはいえ、下手をすれば今のルキアーノならば本当に死んでしまうかもしれない。

それがフェイトに決定的な一撃を入れることを躊躇わせていた。

「なら僕が引導を渡してやる」

フェイトとルキアーノは共に声のしたほうへ視線を向ける。

そこには右手にMVSを持ち、左手にはヴァリスとは異なる形状の銃を持っているスザクがいた。

「フェイトちゃん・・・」

なのはは高速戦闘をするフェイトを見ていた。その表情には不安の色が隠せない。

ダメージで攻撃力、スピードが落ちているとはいえ、スザクをここまで追い込んだ相手と戦っているのだから無理もない。

フェイトとルキアーノが戦闘を始めてから少しした頃スザクが意識を取り戻した。

「う・・・」

「あ、スザク君！大丈夫！？」

「なのは・・・そうか僕は。ブラッドリー卿は！？」

「今はフェイトちゃんが戦ってる」

なのはが視線を向ける先をスザクも見る。

そこにはルキアーノと対等に、いやフェイトのほうが優勢に見えた。優勢にも関わらずフェイトは追い詰められたような表情を浮かべて

いた。

「フェイトちゃんならきつと大丈夫。あの人もきつと諦めて——」

「ダメだ、ブラッドリー卿は言葉では止まらない」

「え?」

「止めるには倒すしかない」

「で、でも今の状態で強い攻撃なんかしたらあの人——」

「だからフェイトは躊躇しているんだ。・・・僕が止める」

「無茶だよ! そんな状態で——」

「それでも!・・・僕がやらなきゃいけないんだ」

そんなときだった。戦闘中にほぼ話しかけてくることがないランスロットが話しかけてきたのは。

<Master! I have a method.>

「ランスロット?」

<Let's shoot it, F.L.E.I.J.A.>

「なっ!？それは・・・確かにそれなら一撃で決められる。でも・・・」

スザクの脳裏にはあの時の光景が浮かび上がる。

あの時は自分の意思で撃った訳ではないにしろ、自分がしたことであることには変わりはない。

だが今のスザクがルキアーノを止めるにはもうそれしか手段が残されていなかった。

自分がしなければおそらくフェイトが攻撃する。しかしそれでルキアーノが死ぬことになれば、フェイトは人殺しということになってしまう。それだけはどうしても避けたかった。

<I believe master. Trust me, my master.>

「・・・分かった、君がそこまで言うなら君を信じる。ただし、威力は最低まで落とすんだ」

<All light, my master.>

(それにここは廃棄都市区画だ。あのときのようなことにはならない)

「あの、スザク君・・・フレイヤって?」

「悪いけど今は説明してる暇はない。とにかく此処から離れるんだ」

「え?..どうい——」

「早く！」

何をするつもりなのか聞こうとするがスザクはそれを許さず、とにかく離れるように言うだけだった。

その場から離脱するなのは、この場面で使おうというのだからそれなりに奥の手なのだろう、と納得するしか無かった。

「なら僕が引導を渡してやる」

スザクが発した声に2人は反応し、スザクのほうへ視線を向ける。

「スザク意識が！」

「フェイト、此処から離れるんだ。後は僕がやる」

「無茶だよスザク、そんな状態で――」

「いいから行くんだ！君が居ると邪魔だ」

「っ！？・・・ごめん、スザク」

フェイトは自分の躊躇いを見透かされていると悟り、謝罪を述べて離脱していく。

「自ら殺されに來たか、樞木卿」

「馬鹿を言うな、僕は貴様を倒しに來ただけだ。これで邪魔は入らない、一騎撃ちだ」

互いに一直線に距離を詰めてMVSを振るう。数回斬り結んだあと、鏑迫り合いになる。

そして再びルキアーノは腿部にある弾丸タイプのハドロン砲を撃つために発射口を開く。

「これでえ！」

「それはもう見た！」

ルキアーノが発射口を開くと同時に、スザクは腰部にあるスラッシュハーケンを撃ち込んで破壊する。

「貴様あ！」

スザクが鏑迫り合いになっているMVSを振り切ると、ルキアーノが持つほうのみが折れる。

ルキアーノが持っていたものは、先の戦闘で既にダメージが蓄積しヒビが入っていた。

「何い!？」

「はあっ！」

MVSが折れたことによりルキアーノに僅かな隙が生まれる。
そしてその隙を逃すスザクではない。立て続けにMVSを振るって
エナジーウイングの片方を切り落とす。

(今だ！)

「これで終わりだブラッドリー卿！」

スザクはルキアーノに向けて引き金を引く。フレイヤという美と戦
いの女神の名を冠した、大量破壊兵器の引き金を。

スザクとルキアーノの戦闘地点から離れた場所でなのはとフェイト
は待機していた。

「スザク君大丈夫かな・・・やっぱり助けに行った方が・・・」

「・・・・・・・・」

なのは心配しているが、フェイトは邪魔だと言われた理由を未だに気にしているのか、なのは言葉は聞こえていなかった。

その時だった。戦闘地点で今までとは比べ物にならない程の巨大な爆発が起こる。

いや、爆発というよりは空間攻撃魔法と言ったほうが表現的には合っているかもしれない。

はやてのデアボリック・エミッションほどの規模ではないにしろ、巨大であることに変わりは無かった。

「もしかして・・・これがフレイヤ？」

「スザク！」

「フェイトちゃん!？」

現実に戻されたフェイトはすぐさまスザクの元へと飛んでいく。それを見てなのはも慌ててついて行く。

2人が戦闘地点に着くころには、先ほどの巨大な球体はすでに収まっていた。

「ロングアーチ！スザクを探して！」

『はい！』

空中で使用したこと、スザクが威力を最低まで下げていたことにより地上への被害は殆ど無く、高いビルの一部が破壊された程度で済んでいた。

「見つけた！スザク！」

「こっちもルキアーノ・ブラッドリーを発見！・・・大丈夫、生きてる！」

『すぐにヘリを手配します！待っててください』

スザクもルキアーノもそれぞれが別のビルの屋上に倒れていた。

ランスロットはかなりのダメージのようで、スタンバイモードになっておりヒビが入っていた。

それに対して、スザク自身はそれほどのダメージではないようだった。

ところどころ出血こそしているものの、呼吸も安定していた。

「スザク・・・よかった」

フェイトはスザクが無事だったことに緊張の糸が切れたのか、力が

抜けたようにその場に座り込んでしまった。
その瞳には涙が光っていた。

——スカリエッティのアジト

「やっと戻ってこれた」

「お嬢の集団転送のおかげですね、ありがとうございます」

「うん」

あの戦闘のあと、ルーテシアの集団転送によりクアットロ達はアジトへと戻ってきていた。

ルキアーノは捕まったためここには居ないが。

「あゝんセインちゃん、ケースの中身確認」

「はいよゝ・・・・・・・・じゃじゃゝん！」

セインがケースのロックを解除して蓋を取ると、そこにはレリックが――なかった。

「空っぽ!？」

「どういうことだ!」

「セインちゃん、あなたまさか」

「つて、私はちゃんと運んできた!」

「ディープダイバーの使い方間違えて中身だけ落としてきたとか?」

「間違えねえ!」

彼女たちがそんな言い合いをしている中、ルーテシアはレリックの刻印ナンバーを確認すると残念そうな表情を浮かべていた。

「ちゃんとスキャンして本物のケースだって確認して――」

セインは自分がスキャンしたときの映像を映し出して、自分の責任ではないと主張する。

他のメンバーもそれを見て、ケースは本物だと納得する。だがトーレだけがあることに気付いた。

「馬鹿共が、お前らの目は節穴か！ここだ！」

そういつてトーレが指差したのはキャロの帽子の中だった。

「してやられた訳だ」

「すみませんお嬢、愚妹の失態です」

「別にいい、私が探してるのは11番のコアだけだから」

そういつて去っていくルーテシアだった。

「ん？これ6番か」

「ケースはシルエットではなく本物でした。アタシのシルエットつ

て衝撃に弱いんで、奪われちゃった時点でバレちゃいますから」

「なのでケースを開封してレリック本体に直接嚴重封印を掛けて」

「その中身は」

「こんな感じで」

ティアナが指を鳴らすと、キャロの頭の上にあった花がレリックへと変わる。

「敵との直接接触が一番少ないキャロに持ってもらおうってことになって」

「なぐるほど」

「は・・・ははは」

リインは感心し、ヴィータはしてやられたといった感じで顔を引きつけていた。

フォワード達による咄嗟の判断でレリックを2個とも確保することが出来たのだった。

——聖王医療院

ここは聖王教会付属施設の病院である。ここに救出した女の子とスザクは運び込まれていた。ランスロットは損傷が激しかったため六課へ持ち込まれ、シャーリによる修復を受けていた。

『検査のほうは一通り終了、大きな問題はなさそう。スザク君も大丈夫だって』

『そっか、よかった』

『これからそっちに戻るね』

『了解』

『私も戻って報告書書かなきゃ。今回は枚数多そう』

『大丈夫、資料とデータはそろえてあるから』

『にやはは、ありがとう』

フェイトと念話をしながら廊下を歩いていたのはは売店の前で立ち止まる。

そこでウサギのぬいぐるみを見つけた。

六課へ帰る前に救助した女の子の病室へ立ち寄り、枕元へぬいぐるみを置く。

「・・・ママ」

「あ・・・」

一瞬起きたのかと思うが、寝言だったとすぐに分かりその子の頬をそつと撫でた。

「大丈夫だよ。ここにいてよ、怖くない」

「・・・ママ」

その子の寝顔を見つめるのはは、悲しげな表情を浮かべていた。

——翌日

救助した女の子の検査結果を聞くために、なのは聖王医療院を訪れていた。

その際、ちょっとしたトラブルがあったものの、結局女の子は六課で引き取ることとなった。

トラブルの際の出来事で、ヴィヴィオと名乗った女の子がなのはに懐いてしまったのが大きな理由だろう。

その後、なのはとフェイトははやてに呼ばれ、共に聖王教会へと来ていた。

そこで六課設立の真の理由を聞くことになっていた。

本当はスザクも連れてくるつもりだったのだが、未だ聖王医療院で眠っているため断念せざるを得なかった。

「——古い結晶と無限の欲望が集い交わる地、死せる王の下、彼の地より聖なる翼が蘇る。死者たちは踊り、なかつ大地の法の塔は空しく焼け落ち、それを先駆けに数多の海を守る法の船も砕け落ちる」

「それって！」

「まさか!？」

「ロストログアをきっかけに始まる管理局地上本部の壊滅と、そして管理局システムの崩壊」

なのは達は聖王教会での話しが終わった後、六課へと戻ろうとして
いるときのことだった。

聖王教会を出る前に医療院からスザクが目覚ましたとの報告を受
けたため、共に六課へ戻ってきていた。

六課へ戻ってきたスザクが見たものは、救助した女の子に「ママ！
と、泣きつかれるのはだった。

「ママ？えっと・・・これは？」

「まあ色々あってなのはが保護責任者ってことになったの。」

「へえ」

フェイトがスザクに事の成り行きを説明していると、ヴィヴィオを
抱っこしたなのはが近づいてくる。

「ねえスザク君、お腹すいたでしょ？ご飯食べよう？」

「あ、そうだね。昨日から何も食べてないし」

食堂に行こうとする一同だが、ヴィヴィオがじつとスザクのほうを見ていた。

その視線が何なのか分からなかったが、何となくこれじゃないのかという答えが出る。

「?・・・あ、そうか。僕は枢木スザク」

「ヴィヴィオ」

「うん、よろしくね。なのはがママになったんだってね、良かったね」

「うん。・・・パパ?」

「「え・・・」」

ヴィヴィオがそんなことを言い出すとは思わなかった3人は見事に同じ反応をする。

「ヴィ、ヴィヴィオ! スザク君はパパじゃないから」

「そ、そうだよヴィヴィオ」

「・・・ダメ?」

焦る2人をよそに、ヴィヴィオは寂しそうな瞳をスザクに向ける。

「ヴィヴィオ・・・パパになってあげられたらいいんだと、ごめんね。僕は君のパパになっていいような人間じゃないんだ」

「・・・パパ」

「本当にごめんね」

「「スザク（君）・・・」」

スザクはヴィヴィオの頭を撫でながら、つらそうな表情を浮かべてただ謝るのだった。

食事も終えヴィヴィオも寝た後、スザク、なのは、フェイトは部隊長室に呼び出されていた。

「スザクくん、呼んだ理由は分かるか？」

「・・・フレイヤのことだろうか？」

「そうや。あんなんあるなんて聞いてへんよ」

「それは・・・二度と使うつもりは無かった。だから言わなくてもいいと思ったんだ。すまない」

「はやて、スザクを責めないで。あれは私のせいだから」

「フェイトちゃんはちょっと黙っとってくれるかな？」

「はやて・・・」

スザクを庇おうとするフェイトだが、はやては今はフェイトの言葉を聞く気はないらしく黙らせる。

はやてはスザクの目をしばらく見つめていた。スザクも視線をそらすことなくはやてを見据えていた。

「はぁ・・・今回は廃棄都市区画で人は居らんへんかったし、ルキア・ブラッドリーも死なへんかったから良かったものの・・・
今後は二度と使わんって約束してくれるか？」

「ああ、約束するよ」

「そうか・・・ホントはランスロットの変化とか聞きたいことはあったんやけど、先に聞きたいことが出来てしもたわ」

「何かな？」

「あのフレイヤってゆーの・・・前に使ったことあるんやな？」

「・・・ああ、大きな被害が出たよ」

「じゃあ、ヴィヴィオのパパになってってお願いを断ったのも、それが原因？」

大きな被害が出たということは、おそらく死傷者も沢山出たのだろうと3人は思う。

そして今まで黙っていたのはだが、ヴィヴィオの件に関してはそれが原因と思ったのだろう。

「それもあるけど・・・今更隠しても意味は無いな」

「隠すって・・・裏切りの騎士、とか言われてたこと？」

「そんなことまで聞いていたのか」

「ルキアーノ・ブラッドリーが言ってたから・・・」

「フォワードの4人も含めて皆に話すよ、僕の世界や過去のことを」

「話してくれるんか？」

「ああ」

「分かった。明日改めて話し場を作るから、そのときでええかな？」

「それで構わない」

スザクが部隊長室から退室した後、なのはたちは表情を暗くしていた。

「やっぱり・・・人を殺してるんだよね」

「そう・・・だろうね」

「軍人やからって言ってしまえばそれまでやけど・・・やっぱり私らとは歩いてきた道が違うんやな」

スザクの今までの発言や昨日の戦闘を見れば、やはり戦争の中で戦ってきた軍人で人を殺してきたのだと、そう思わざるを得なかった。部屋にはただただ重苦しい雰囲気漂うのだった。

第11話「美と戦いの女神」(後書き)

フ・レ・イ・ヤキタ——、（。▽。σ）、∇。・；、——
|!!!!!!|

もしかすると、タイトルで気付いた方もいるかもしれませんがね。

当初の予定ではフレイヤを使用する予定はなく、むしろ頭の中からフレイヤが抜けていました。

ですがフレイヤのことを思い出すと、使いてえええ!!!!!!ってなりまして・・・

そうすると、もうこの戦闘以外では使用出来なさそうだったので使いました。

ちなみにフレイヤ未使用の場合、今回の話はいきなり医療院のベッドで目覚めるところから始まる予定でした。

それと、本編では触れていませんが、スザクが比較的ぴんぴんしているのは

フレイヤ発射↓ルミナスコーン発動↓コーンはフレイヤで壊れる↓腕のブレイズルミナスで何とか守る↓その間にフレイヤの効果範囲から脱出↓ランスロット重傷って感じで

あとフレイヤは爆弾の一種な訳ですが、この小説ではあくまでスザクの魔力をエネルギーに変換したものを使っているので爆弾ではないです。

擬似的にフレイヤを再現しているだけで、あくまでエネルギー体です。

第12話 「 柩木 スザク 」 (前書き)

どうもです。なんかものすごく眠い中書いていたので変なところあるかもしれません。

第12話「樞木 スザク」

スカリエッティのアジトの一室にて、廃棄都市区画での戦闘がモニターに映し出されていた。

今回の戦闘にてルキアーノという戦力を欠くことになったのだが、スカリエッティは笑みすら浮かべていた。

「素晴らしい、実に素晴らしい。あの白い騎士、まさかルキアーノに勝ってしまうとはね。」

「こちらの勢力の一つを欠いたというのに随分嬉しそうだな」

「あの少年にとっても興味が出てきてね。圧倒的なデバイスの性能差をひっくり返すとは思わなかったよ。ぜひ調べてみたいものだ」

「お前は相変わらずだな」

ビスマルクはその様子を見てロイド・アスプルンドを思い出し、科学者は皆変わった人間ばかりだな、と改めて思うのだった。

「ふふ、そういう君こそ仲間を捕らえられても平然としているよう

に見えるが？」

「私は止めたが奴が勝手に出て行ったのだ、どうなろうと私の知ったことではない。それに、騎士道精神の風上にも置けん奴だ」

「面白い事を言うね。騎士道精神などと言うわりに私の側についているのは何故だい？」

「こちらにも事情というものがあるのだ」

「まあそういうことにしておこう」

そう言って再びモニターに向かったスカリエッティだが、何かを思い出したのかすぐにビスマルクの法を振り向く。

「そうそう、近々公開意見陳述会というものが開かれるんだ、その時は君もよろしく頼むよ。データもそれなりに集まったし、そろそろ計画を進めさせてもらう」

「いいだろう」

間違いなく歴史に残る大きな事件が動き出すときが、刻一刻と近づいていた。

スザクが退院し六課へと戻ってきた翌日、朝食後に前線メンバーが部隊長室へと集められていた。

隊長達はこれから何が始まるのか知っているがフォワード達は知らないため、緊急事態なのかと内心焦っていた。

「今日皆に集まってもらったんはな、スザクくんから私らに大事な話があるからなんよ」

「話、ですか？」

「ああ、僕の過去と世界のことを」

「どうして急にそんな話をする事になったんですか？」

「僕は君たちの事を仲間だと思っている。でも僕は大切な話を話していない。話したら軽蔑されるかもしれない。それでもこれから一緒に戦っていく上で隠し事をしていくは無いから・・・だから話すよ」

スザクの真剣な表情と纏う空気から、とても大切に、そしてとても悲しい話を今からするのだと誰もが理解し、覚悟を決めるのだった。

「まずは――」

スザクが話の初めに切り出したのは、この世界に来てすぐの頃、フ
ェイトとはやてに話したときのことだった。

当然、一字一句全く同じ風に話したわけではないが、ほぼ同じ内容
を話した。

「これが前にフェイトとはやてに話したことなんだけど、これでま
ずは時代背景がどんなものなのかは分かってもらえたと思う。それ
とフェイト、はやてごめん。話した内容に嘘はないけど、全て話し
たわけでもない。それには気付いてたと思うけど、謝らせてもらう
よ」

「ええよ、気にせんといて」

隊長達は知っていたため特にリアクションを見せることも無かった
が、フォワード達にとってはかなりショックな内容のようだった。
そしてスザクは語り始める。自身の過去とその真実の全てを。

「ブリタニアと戦争をしていた当時の日本の首相は僕の父、枢木ゲ
ンブだった。彼は徹底抗戦を唱えておきながら真っ先に自決したと
言っただけ、本当はそうじゃない。・・・僕が殺した。」

「っ!？」

「自分の・・・お父さんを」

「当時10歳だった僕にはそれしか出来なかった。そうすれば戦争は終わって、またルルーシュやナナリーと平和に暮らせるって。だけど、そうじゃなかった。ブリタニアによる植民地支配が始まっただけだった」

「ルルーシュって子と、ナナリーって子は？」

「ルルーシュは僕の一番の親友で、ナナリーは彼の妹なんだ。2人とも枢木の家で預かってたんだけど、日本が敗戦したあと離れ離れになったんだ」

スザク以外で実際に植民地支配されている状況を体験している者はいない。

それ故にいまいちピンと来ない一同だったが、いい状況ではないことだけは理解できていた。

そして大切な友達とすら引き離された。その悲しみは体験していても想像に難くなかった。

「そして僕は思うようになった、間違った方法で得た結果に意味などないと。だから僕は名誉ブリタニア人として軍に入り、認められて中から変えていこうと決めたんだ。でも名誉ブリタニア人は日本人からすれば裏切り者だった。それでも日本のためにと、軍に入った。そして僕はランロットのパイロットになって、ブリタニアから日本を開放しようとする組織・黒の騎士団と戦った。そんなときにユフィと出逢った。」

「そのユフィさんって人は？」

「ユフィはブリタニアの皇女だったけど、日本とブリタニアの平和的共存を願ってくれる人で、そして僕を必要としてくれた人だった。」

「大切な人、だったんだね」

「ああ・・・だけど彼女は黒の騎士団のリーダー・ゼロに殺された。その後、僕はゼロを捕まえたよ。ゼロの正体は、ルルーシュだった。薄々そう感じてはいたけど、確証が無かったから逮捕はしなかった」

スザクにとって大切な存在がどんどん彼の前からいなくなっていく、そんな内容に何人かは涙ぐんでさえた。

「本来ならユフィが提案した行政特区日本で全ては収まるはずだった。だけどユフィはルルーシュのギアスに掛かって、日本人の虐殺命令を出した挙句、殺されて虐殺皇女の汚名まで着せられた。」

「ギアスって？」

「ギアスとは個人によって能力は異なるけど、ルルーシュのギアスはどうな相手にでも一度だけ命令を聞かせることが出来る絶対遵守の力だった」

「そ、そんな力が・・・」

「行政特区日本が実現しなかった以上、日本を取り戻すために利用できるものは利用した。ルルーシュを皇帝に献上して帝国最強の

十二騎士、ナイトオブブラウンズに入った。ナイトオブセブンとなった僕は今まで以上に戦いへ身を投じていった。ナイトオブワンになるために」

帝国最強の十二騎士に入ったと聞いた時点で、一同は納得していた。単純に考えて帝国内で十二番以内の強さを持っていたと解釈すれば、スザクの高さの能力の高さも納得できるというものだ。

「どうしてナイトオブワンってのになろうとしたんだ？」

「ナイトオブワンの特権に、好きな植民地エリアを1つ貰えるというのがある。それで日本を取り戻すつもりだった。そして1年近くが過ぎた頃、ゼロが再び現れた」

「またルルーシュって子だったの？」

「いや、そのときは既に24時間体制でルルーシュを監視していたからね、報告ではルルーシュは白だった。だけど僕の心はずっとルルーシュは黒だと、ゼロだと言っていた。そしてゼロは47ヶ国から成る連合国・超合衆国を作り上げ、それを守る武装集団を黒の騎士団とした。超合衆国の最初の決議は日本奪還だった」

「なんか世界が少しずつ纏まりを持ち始めてるっていう風にも取れるね」

「確かにな。そやけど、そんな纏まり方うれしないわ」

大きな理想をもつはやてにとって、人或いは国を倒すことを目的として纏まっていくのは嬉しいことではなかった。

目的の根源には平和のために、というのが少なからずあるだろう。そして勝利を得たとしても、平和な世界は勝者側にしか訪れない。敗戦国は発言など出来る立場では無くなってしまふのだから。

だからはやては全ての人が明日を求められる世界へと変える事を望んでいるのだった。

「決議第壱号により日本開放戦が始まり、僕は第二次東京決戦に参加した。そこで第9世代に相当するナイトメアを操る黒の騎士団のエースと戦って、圧倒的ポテンシャルの前に成す術も無く敗北したよ」

「え、スザク君が・・・」

「成す術も無くって・・・」

ただ信じられなかった。模擬戦では超人的ともいえる身体能力を見せてシグナムと引き分け、ルキアーノとの戦闘においても躊躇いを見せない強い覚悟で、圧倒的不利な状況から引き分けに持ち込んだ。そんなスザクが成す術も無かった相手。考えただけでも恐怖が脳裏を過ぎった。

「追い詰められた僕は死を覚悟した。いや、それどころか今まで犯してきた罪の償いだと思っただけどルルーシュに掛けられた「生きろ」というギアスによって、死ぬことすら許されなかった。そして僕はランスロット・コンクエスターに搭載されていたフレイ

ヤを撃つ事で生き延びた」

「あの・・・フレイヤって2日前のやつですよ？」

「ああ、だけど規模はあんな物じゃない」

「あれよりもすごいんですか!？」

「あれは僕の魔力を使用して擬似的に再現したものだから限度がある。僕が向こうの世界で使った時は1000万以上の人を消滅させた。更に2次被害によって2500万人もの死傷者を出し、トウキョウ租界は完全に崩壊した」

「なっ!？」

まさかの数字だった。ここに居るメンバーは程度の差はあれ、スザクが軍人だということは知っていた。

そうなれば当然人を殺しているだろうとの予測も出来ていた。

だが、今の話で告げられた人の数は予想を遥かに超えていたというレベルではない。予想すらしていなかったほどの数を告げられたのだ。

なのはたちには信じられない、有り得ないといった表情しか浮かんで居らず、思考ついてきているかも怪しかった。

「ス、スザク・・・嘘、だよな？」

「ホンマなんか？」

「ああ。それにリミッターを解除すれば僕が撃った時の約10倍にもなる威力になって、半径100kmが荒野に変わるよ。これはブリタニアの首都・ベンドラゴンが丸ごと消し飛ぶ威力だ。実際に消し飛んだしね」

「10倍・・・」

「首都が丸ごとって・・・」

出来ることなら否定して欲しかった。出来ることなら嘘だと信じたかった。だがそれは全て事実であり、過去の出来事を今更変える事など出来るはずがなかった。

そして首都が丸ごと消し飛ぶような威力に、ただ啞然とするばかりだった。

「で、でもギアスっていうやつで、スザク君が自分の意思で撃ったんじゃないんでしょ？」

「ギアスのせいだとか、僕の意味じゃないとかそんなことは関係ないんだ。僕が撃った、その事実が変わりはないから。だから僕はそれまでの自分を否定した、必要なものは結果だと。そして僕はナイトオブワンになるために、シュナイゼル殿下にクーデターを持ちかけ皇帝暗殺を買って出た。同じく皇帝を殺すために来ていたルルーシュと共に、Cの世界で僕等は知った。人々が明日を求めていることを」

「Cの世界？」

「Cの世界とは人の集合無意識。過去を含め全人類の心や意思、記憶が蓄積され、溶け合っている仮想空間のことを言うんだ」

「な、なんやそれ・・・信じられへん」

「信じられなくてもこれが事実なんだ。それに魔法なんてものがあるんだよ？」

「それはそうやけど」

「人々が明日を求めていることを知った僕たちは、人々に明日を与えるための計画、ゼロレクイエムを完遂することを誓った。ルルーシュはブリタニア皇帝に即位し、僕は彼の専属騎士でありブリタニア帝国最強の騎士・ナイトオブゼロとなった。」

「ゼロレクイエムってのは具体的には？」

「皇帝ルルーシュが世界を手に入れ世界中の憎しみをその一身に集め、ゼロとなった僕がルルーシュを討つことで憎しみの連鎖を断ち切り、全世界が議論によって平和を実現させる計画さ。ルルーシュは「魔王」として歴史上最悪の汚名を着たままこの世を去り、僕は個を捨て伝説の英雄「ゼロ」としてその一生をただ世界のためだけに捧げることになるはずだった。」

「そんで黒の騎士団のエースとの戦闘中にこっちへ飛ばされて来た訳やな」

「まさに命懸けで・・・ってやつですね」

「だからゼロレクイエムを完遂させるためにも、早く戻らなきゃい

けないんだ」

どうして世界にはこんなにも辛い事が多いのだろうか。

親に捨てられた、家族を亡くした、道具のように扱われてきた、クローンだった、周囲から危険視され見放された。

なのはたちには程度の差こそあれ、辛い事や悲しいことが沢山あった。しかしスザクの話を知っているとそれらは全て霞んで見えた。現在、いかに暖かい場所にいるのかということを実感させられるのだった。

話が終わった後、スザクは修復中のランスロットの所へと向かうために部屋を出て行った。

残されたメンバーは誰一人として口を開こうとせず、ずっと座っていた。

「私たちって・・・甘い、のかな？」

「私はなのはと敵同士で戦ったけど、殺しあったわけじゃなかった」

「それに自分のお父さんを殺したって」

「10歳って言ったら今の私やエリオ君と同じくらいの時期に……」

「今の私らに出来ることは、話聞く前と後で態度変えへんってことや。いや、今まで以上に仲良うすることや。今皆の居る、この六課が帰ってくる場所やって思わせたらなあかん」

「そう、だね」

「はいはい、解散！ 考えたい事とかあったら自分等の部屋で考えてな」

全員が退室するまで明るく振舞っていたはやてだが、ドアが閉まると一転しその表情は曇ってしまう。

「キツイな、あんな事聞かされたら」

「はやてちゃん……」

「リイン……大丈夫、私は諦めへんよ。スザクくん等が命懸けで成そうとしたんや、私も命懸けで向かってくよ」

「リインも頑張るです」

「ありがとうな、リイン」

——あれから数日が過ぎた

ランスロットの修復も終わり、スザクの手許に戻ってきていた。

そしてこの数日での変化といえば、フォワード達が以前にも増して話しかけて来る様になっていた。

過去の話題には触れたりはずせず他愛も無い話である事が多かった。時には戦い方を教えて欲しいだの、自主トレはどんなメニューが良いかなどというのもあった。

「最近皆がよく話しかけてくれるんだ。他愛も無い内容がほとんどだけどね。なのはやフェイトも僕と居る時間が増えたよね？」

「確かにそうだね。あ、もしかしてイヤだった？」

「ヴィヴィオも！」

「そうだったね、ごめんヴィヴィオ」

「うん！」

「嫌なら止めるけど・・・」

「嫌な訳ないさ。嬉しいくらいだよ」

なのはとフェイトがいるという事はヴィヴィオも一緒にいるという事だった。

ちなみにヴィヴィオはあれ以来スザクをパパとは呼ばなくなった。だが本心では呼びたいらしく、時々「pap」といいかけてしまう事もあった。

そして、一番変化があったのはなのはとフェイトだった。時間があ
る時はとにかくスザクと一緒に居た。

元の世界が見つかり、帰ることになればスザクは間違いなくゼロとして人生を世界に捧げるだろう。

そうなればスザク個人の幸せはない。だからせめて今の内に少しでも楽しい思い出を、幸せを感じて欲しかった。

過去話を聞いた時から、2人は心の中にあつたある感情の正体に気付いていた。スザクが好きかもしれない。いや、おそらく好きなんだと。

だが想いを伝える事はしなかった。正確には出来ないというほうが正しい。

伝えてしまえばそれは枷となり、ただスザクを苦しめる事にしかないと分かっていたから。

「それでね――」

「あ、なのはさん！ 私たちも混ぜてくださいよ」

（これが幸せってやつなんだろうか？）

なのはが中断していた話を再開しようとしたときスバル達も入ってくる。

他愛もない話をしているだけでしかない。だがそれでも今のスザクにはこの上なく幸せな事のように感じられるのだった。

第12話「柩木 スザク」(後書き)

スザクの過去編が終わりました。やっぱり報われないのは悲しいですね。

実は前回の話を投降した後にリクエストが来しました。

ルル(悪夢ナナリー)を出して欲しいとのリクエストでした。

まさかの事態にビックリしましたが、嬉しかったです。

しかし基本的にこの小説ではリクエストは受け付けておりませんので、そこはご了承ください。

ですが作者が女オリ主でやっています、「魔法神記リリカルなのは」ではオリキャラを募集しています。

名前 出来れば日本人っぽいカッコイイ&可愛い名前で(ただし女オリ主のようにカタカナ表記)

性別・性格・年齢・デバイス・体格etc・・・キャラの特徴

注) 敵側の幹部的な位置づけとして出す点に留意。出せるキャラは8人まで。

よければどうぞw

第13話「怒りの日」(前書き)

13話です。

ようやくここまで辿り着きました。

あとは残すは最終決戦ですね。そこまでが長いですが・・・
多分20話までには完結するでしょう。するはずです。

後書きにすこし質問があるのでお暇がありましたらお答えください。

第13話「怒りの日」 始まります。

第13話「怒りの日」

――9月12日 中央管理局 地上本部 AM02..35

ついに公開意見陳述会の日が訪れた。六課のメンバーも本部の警備の部隊の一つに入っており、夜勤シフトで警備に当たっていた。

だが全員が来ている訳ではなく、はやて、フェイト、シグナムの3人は早朝からになっていた。

例年通りならば通常の警備をしていれば問題はなかった。

だが今回は違う。先日の戦闘機人戦を含め事件の背後に広域次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティがいることは明白になっている。

もちろん現在のところ表舞台には出てきていないものの、それも時間の問題だろう。

「ん？」

ヘリにて待機していたヴァイスが何かの気配を感じ外へと出る。そこには水筒のようなものを持ったティアナとスザクが居た。

「おう、どうした？」

「警備部隊の方々からお茶の差し入れを頂きましたんで、お届けに」

「お、いいねえ。ありがとよ」

「僕は付き添いでって感じかな」

「お前は保護者かよ。そこは嘘でも俺の様子を見に来たとか言うところだろ？」

「ゴメン」

「・・・っ、あっははははは。ご、ごめんなさい、あはは」

スザクとヴァイスのやり取りにティアナは思わず吹き出してしまう。その様子を見た2人もティアナにつられるように笑い出す。

笑い終わったところでティアナはヴァイスにお茶を差し出し、ヘリにもたれ掛かるようにしていたヴァイスの横に同じように立つ。

「連中は？」

「警備の端っこの方ですし、交代でのんびりやってます」

「実は・・・失礼かと思ったんですが、ヴァイス陸曹のことちょっと調べちゃいました。数年前までエース級の魔導師だったって」

「なんだそりゃ・・・エースなもんかい。俺の魔力値なんざお前の半分以下だっつーの」

「それでもアウトレンジショットの達人で、優秀な狙撃手だったって」

「ふう・・・昔はどうあれ今の俺は六課のヘリパイロットだ。お前が聞いて参考になる話なんざねえぞ」

ヴァイスの発言は「何も話すつもりはない」と言っているのと同じことだった。

それはスザクもティアナも理解していた。だがそれでもティアナは真剣な表情でヴァイスのほうを見ていた。

そのティアナを見てヴァイスはムツとしたような表情を浮かべた。

「大体オメーは余計なこと考えてる場合か？ボケっとしてっとなまたミスショットで泣くぞ、バカタレが」

「すみませんでした」

ヴァイスはもうこれ以上聞くなと言わんばかりに、空になった紙コップをクシャツと握り潰した。

「分かればよし、行け」

「はい」

ティアナは一礼すると駆け足で皆が警備している所へと戻っていった。

「君が元魔導師だったとは、驚いたよ」

「そうか、お前も知らなかったんだったな」

「エース級の狙撃手か、すごいな」

「そんなことねえよ、ヘボ狙撃手さ。さ、お前も行けよ。警備あん
だろ？」

「ああ、そうするよ」

スザクが去っていった後、1人残されたヴァイスは空を見上げていた。

「昔の話さ、そうだろ？ ストームレイダー」

< I t h i n k s o . >

夜が明け空は次第に明るみを帯びていく。

「さて、じゃあ私とスザク君はそろそろ中に入るよ」

「はい！」

「でね、内部警備のときデバイスは持ち込めないそうだからスバル、レイジングハートのことお願いしていい？」

「あ、はい」

「ランスロットも頼むよ」

「わ、分かりました」

2人からデバイスを渡されたスバルは、自分なんかが預かってもいいのだろうかという考えが浮かび、少々困惑気味であった。

「前線の皆でフェイト隊長からも預かっておいてね」

「はい！」

（スバル・・・）

隣に立つギンガはスバルを見てどこか安心したような表情を浮かべていた。

「あつ、始まりましたね」

「おお」

外の警備をしてる魔導師達にも陳述会はモニター越しに見ることが出来るようになっていた。

「ひとまず何も起こらなそうな雰囲気ですが」

「油断すんなよ、しっかり警備してろ」

「「はい！」」

『それにしてまだ』

エリオとキャロから離れていったヴィータは、内部警備に当たっているのはに念話を送る。

『いまいち分からねえ。予言どおりのことが起こるとして、内部のクーデターの線は薄いんだろ？』

『アコース査察官が調査してくれた範囲ではね』

『そーすつと外部からのテロだ。だとしたら目的は何だよ？犯人が例のレリックを集めてる連中、スカリエッティ一味だっけか？奴等だとしたら、さらに目的が分からねえ』

『陽動かもしれない』

『どういうことだ？』

なのはとヴィータの念話にいきなりスザクが入ってきた。だが2人は然程驚いた様子を見せるでもなく、スザクの発言に食いついていた。

『以前に大きな基地を落とす作戦があってね、その時に僕も陽動の役割をしたことがあったんだ。だからこんな場所を狙うのは何か意図があって当然だろうって考えたら、陽動かもしれないって思っ
さ』

『陽動か・・・だとしたら本当の目的は何だ？』

『さすがにそこまでは分からないよ』

『とにかく相手にどんな目的があったとしても、私達は私達に出来ることをするしかない。でしょ？』

『『ああ』』

——時刻は夕方、陳述会もそろそろ終わりという頃だった。

特に何かが起こったわけでもなく、順調に終わりを迎えようとしていた。

そんな時、管制室に突如異常が発生し通信すら満足に行えないような状況に陥っていく。

何処からともなく現れた大量のガジェットが緊急防壁に取り付き、内部をAMFで覆い魔力が結合できない空間が出来上がる。
戦闘機人も現れ、警備の魔導師達は次々に撃墜されていく。

「本部に向かって航空戦力!？」

「別方向からも来ます！速い！」

「ランク・・・推定、共にオーバーS」

「リイン！」

「はいです！」

「地上は任せる！」

ヴィータはリインとユニゾンし、本部へ向かう敵航空戦力の元へと向かって行った。

だが別方向からも来ている為どちらか一方にしか向かえなかった。フォワード達は隊長達のデバイスを届けるために地下から内部へと向かった。

内部でも事態は深刻になっていた。濃度のAMFのせいでろくに魔法は使えず、隔壁も降りているために簡単に外へ出ることが出来なくなっていた。

「ちょっと荒業になるけど付き合ってくれる？ フェイトちゃん、スザク君」

「うん、勿論」

「どうするんだい？」

「此処の扉を開けて、地下へ降りれば外へ出られるから」

「じゃあこの扉を開ければいいんだね」

「うん、だから皆で——」

なのはは周りに居る局員に協力してもらい、開けようと考えていたのだが。

次の瞬間には扉が開いていた。

「・・・あれ？ なんで？」

「さあ、早く行こう」

「いや、ちょっと、あの・・・」

「な、なのは考えるのは後にして行こう」

扉を1人で開けてしまった状況になのはは思考が付いてきていなかった。

フェイトも思考が飛びそうになったが、ギリギリ大丈夫だった。

「こちら管理局、あなたの飛行許可と個人識別表が確認できません。

ん？この声」

本部に向けて高速で飛行している2つの反応の内、ヴィータ達が向かった方の魔導師はゼストとアギトだった。

「直ちに停止してください。それ以上進めば迎撃に入ります」

<Schwalbefliegen>

「っ!？」

突然雲から何発もの赤い魔力弾が飛んでくる。1発たりとも命中はしなかったが、誘導型射撃魔法であるため方向転換して再び向かってくる。

「にやろう、ブレネン・クリューガー！」

アギトが魔力弾を発射しシュワルベフリーゲンと相殺した、かに見えたが爆煙から鉄球が尚も飛んでくる。

「実体弾!？」

予想していなかった展開に驚くアギトだが、それとは対照的にゼストは冷静にシールドで弾く。

「ギガントハンマーー！」

だがその直後に背後から現れたヴィータがグラーフアイゼンを振り下ろす。

辺り一体に大きな衝撃が走り、周囲の雲は衝撃のあまり吹き飛んでしまう。

「外したです。相殺と防御で防がれました」

「ダメージは通った、続けてぶっ潰す！」

爆煙が晴れると、そこには先ほどまでと違い金髪になっているゼストがいた。

「やっぱり融合型」

「あたし達と同じか。管理局機動六課スターズ分隊副隊長ヴィータだ！」

「ゼスト」

ゼストは自らの名前だけ告げると、槍型のアームドデバイスをヴィータに向けて構える。

2人は向き合ったまま空中に浮いていた。

だがそれもすぐに終わり、両者は一気に距離を詰めて攻撃を行う。

「ゼストっていったか、目的を言えよ。納得できる内容なら管理局はちゃんと話を聞く」

「若いな、だがいい騎士だ」

「旦那褒めてる場合かよお」

『リイン、気付いたか?』

『はい。向こうのユニゾンアタック、微妙にですがタイミングがずれてます。融合の相性があまりよくないと思います』

念話をしている間にも数度、デバイスを交える。

そのたった数度の攻撃で互いに相手の情報を得ていた。

「くっそお、あいつら融合相性もいいんだろうが練度も高え、しっかり合わせて来る」

「アギト、融合を解除しろ。俺がフルドライブで一撃で落とす」

「冗談！？フルドライブなんか使ったら旦那の体が」

「終わらんさ、成すべきことを終わらせるまではな」

「旦那のことはアタシが守るって言っただろ。旦那の命は削らせねえ、アタシが必ず旦那の道を通してやる！猛れ炎熱、烈火刃！」

ゼストが構えるデバイスに炎が宿る。それを見たヴィータはこれで決めに来ると考え、グラーフアイゼンを構えなおした。

フォワード達はなのは達との合流ポイント、地下のエントランスホールに向けての移動中に戦闘機人に襲撃されていた。
エリオは後衛のポジションにいる戦闘機人からの射撃を素早い動きで回避していく。

「ちっ、このっちょこまかと！」

「ウェンディ、このグズ。さっさと仕留めろ」

仲間にそう暴言を吐いているのは、赤い髪をした少女なのだが。
その少女——ノーヴェの武装・魔法は共にスバルと酷似していた。

ティアナの後ろへ回りこんだノーヴェは跳び蹴りを放つが、その攻撃はティアナをすり抜けてしまう。

「なっ!？」

「幻影!？」

気付けばティアナによる幻影で、周囲一帯にスバル達が居た。
戦闘機人特有の解析システムにより、熱源感知で探そうとしたがそれすらも幻影の前には役に立たなかった。

「くっ！」

「っ！」

ノーヴェ達からは見えない位置でティアナとキャロは苦しそうな表情を浮かべていた。
ティアナは当然ながら幻影を発動し、キャロはそのサポートを行っていた。

<The load by the silhouette control increases.>

<The limit of the energy boost is near.>

『あともうちよつと』

『脱出タイミングが出来るまで頑張っ！』

<Yes sir.>

<All right.>

「私等を騙すなんて、この幻術使い戦闘機人システムのことを知ってる!?!」

予想しなかった事態にウエンディ驚きと焦りが混じったような表情を浮かべていた。

「幻術だろうが何だろうが全部潰しやいーんだろうが！っ！？」

ノーヴェが攻撃を仕掛けようとしたその時、何かの気配を察し後ろを振り向く。

「うおおおおお！」

幻術で沢山いるフォワード達の中から本物のスバルが飛び出し、ノーヴェに向けて右腕を突き出す。

咄嗟に腕でガードするものの、それでスバルの攻撃を防ぎきれずはらずも無く吹き飛ばされてしまった。

「ノーヴェ！っ！？」

いきなりの出来事にウエンディはノーヴェのほうへと意識が向かってしまう。

その一瞬の間にエリオは攻撃態勢へと移っていた。

<Form Drei. Unwetterform>

「サンダーレージ！」

ウェンディはライディングボードをエリオに向け、周囲に居るガジェットも攻撃態勢に入るがそれよりも早くエリオの攻撃が決まる。周囲に電撃が走りガジェットは一斉に爆発する。

「撤退！」

ティアナの合図と共に4人はエントランスホールへ続く道へと走っていく。

他の通路には幻術によって作り出されたスバル達が向かい、どれが本物なのか分からなくなっていた。

「この野郎」

「くっ・・・」

『ノーヴェ、ウェンディちょっとこっちを手伝え』

苛立ちを隠すことなく立ち上がったノーヴェたちの下に銀髪の少女から通信が入った。

『もう一機のタイプゼロ、ファーストの方と交戦中だ』

その映像にはギンガが映っていた。

「高町一尉！」

スザク達がエントランスホールに到着したと同時にシスターシャツハが駆け寄ってきた。

「シスターシャツハ、会議室に居たんじゃ？」

「会議室のドアは有志の努力で何とか開きました。それで私も急ぎみなさんを追って」

「はやてちゃんたちは？」

「お三方ともまだ会議室にいらっしゃいます。ガジェットや襲撃者などについて現場に説明を。ところで、あなたが枢木スザクさんですわね？」

「はい、そうです」

「シャツハ・ヌエラと申します。以後お見知りおきを」

「よろしくお願いします」

挨拶を終えたところへフオワード達がちょうどいいタイミングで到着した。

「お待たせしました」

「ありがとうございます」

スザク達が自分のデバイスを受け取る中、はやてとシグナムのデバイスはシャツハが受け取った。

「こちらは私がお届けします」

「ギン姉？ギン姉？」

突然スバルが焦ったようにギンガの名を呼び出した。

「スバル、どうしたの？」

「ギン姉と通信が繋がらない」

「戦闘機人2名と交戦しました。表にはもっと居るはずですから」

「ギン姉、まさかあいつらと!?!」

「こちらライトニング01、ロングアーチ」

「こち・・・ロングアー・・・」

ロングアーチともともに通信が繋がらなかった。この事態に3手に別れることとなった。

スターズ分隊はギンガの元へ、ライトニング分隊は六課へ、そしてスザクは表の救援へと。

六課の隊舎は既に炎上していた。

シャマルとザフィーラが応戦しているものの、2人だけではどう考えても対応しきれない状況ではなかった。

「たった2人でよく守った。けどもう終わり。僕のIS、レイストームの前では抵抗は無意味だ」

「クラールヴィント防いで！」

<Ja.>

一人称が僕というこの戦闘機人——オットーは見た目は少年のようだが、れっきとした女性である。

オットーは右掌から幾本にも拡散された緑色の光線、レイストームを発射する。

シャマルがその光線の軌道上に風の護盾を発動させて隊舎を守った。

「うおおおおお！」

そしてレイストームの発動中の隙を突いてザフィーラが攻撃を仕掛ける。

「デイド」

「IS・ツインブレイズ」

「ぐあああつ」

背後に瞬時に現れた、デイドと呼ばれた戦闘機人の一撃によりザ

フィーラは撃墜されてしまった。

その落下点のすぐ近くにシャマルがいたため、その衝撃で吹き飛ばされてしまう。

そして隊舎を守っていた風の護盾もレイストームに突破され、隊舎は大きな爆発に飲み込まれるのだった。

なんとか立ち上がる2人―1人と1匹といったほうがいいかもしれないが―だが、オットーは無情にもレイストームで追撃を掛けるのだった。

ライトニング分隊の3人は六課へ向けて飛行中だった。

飛行とは言っても、エリオとキャロは飛べないのでフリードに乗っているが。

「っ!？」

<S o n i c M o v e . >

フェイトが突如移動し、プロテクションを発動させる。

そこへすぐに砲撃のような攻撃が到達する。その攻撃の先にいたの

は2人組みの女性だった。

「戦闘・・・機人。エリオ、キャロ先に行って」

「でも、フェイトさん」

「すぐ追いかける、行って」

「フリード」

エリオの声に反応したフリードは六課へ向けて再び移動を開始する。

「エリオ君」

「空戦でアウトレンジで撃てる相手が居るんだ。僕達がここに居たらフェイトさんが全力で戦えない」

「うん」

2人はこの場を離れ六課へ向かう。今、自分たちに出来ることをするために。

「バルディッシュ、サードフォーム」

<Zamber Form.>

まだろくに交戦していないにも関わらず、フェイトはいきなりザンバーフォームを起動させる。

つまり、目の前に居る2人はそうしなければいけない相手であり、見ただけでそれが分かるのだった。

「小娘、面白いデバイスだな」

「っ!？」

突如背後から声をかけられフェイトは反射的に振り向いた。

そこには薄い紫と黒で構成された鎧を纏い、大剣を背負った中年男性が居た。

その男性の左目はピアスのようなもので塞がれていた。

「あなたもスカリエッティの仲間ですか？」

「まあそう思ってくれて構わん」

（この状況はさすがにまずい。この男の人、後ろの2人よりも強い）

「騎士ビスマルク、どういうおつもりで？」

「なに、この娘と戦ってみたくなっただけのことだ。手を出すなよ」

「仕方ありませんね。ですがここには居させてもらいますよ、デー

タを取る為にも」

「好きにすればいい」

フェイトは焦っていた。目の前に居る男は見ているだけ分かる。スザクでさえ苦戦したルキアーノよりも更に強いと。

「さあ勝負だ、小娘。せいぜい楽しませてくれ」

そう言いながら男は背中にあつた大剣を抜き正面に構えた。

ヴィータは肩で息をしていた。対峙しているゼストは息を乱すことなくデバイスを構えていた。ゼストは突然構えを崩した。何かに気付いたようで視線はヴィータから外れている。

「ん？ オーバーSが数人動き始めている。此処の守りはもう復活し

たか」

「くっそ、くっそお」

「ヴィータちゃん、シグナムがこっちに」

「ここまでか、撤退するでしょう」

守りが復活したことを悟ったゼストはユニゾンを解除して元の状態に戻った。

「せめて、せめてあいつ等だけは！」

「ヴィータちゃん上！」

未だゼストと対峙しているヴィータだったが、ラインの叫び声に視線を上に向ける。

そこには巨大な火球を作り出しているアギトの姿があった。

「アタシがここで叩いとく！」

「くっ！」

「っ！」

<Grenzpunkt freilassen.>

アギトへと攻撃を仕掛けようと、ヴィータは飛んでいく。

だがそれを見たゼストはフルドライブで非常に強力な一撃をヴィータに叩き込んだ。

グラーフアイゼンで受け止め、直撃は免れたヴィータだが――

「はあああああ！」

グラーフアイゼンのハンマーヘッド部分が破壊され、衝撃でビルの屋上へと叩きつけられてしまった。

「アギト、撤退だ」

「あ・・・ああ・・・うあああああ！」

ゼストにフルドライブは使わせないと決めていたのに使わせてしまった。

それも自分のせいで。アギトは大きな声を上げて涙を流していた。

「くっ、野郎。っ！？」

起き上がったヴィータに突然変化が現れた。ユニゾンが解除されてしまったのだ。

「リイン、おいリイン！」

シグナムはヴィータ達が交戦していたポイントへ向けて飛行していた。

その途中、自分とは反対方向へと飛んでいく人物を見かけた

「あれは・・・」

『シグナム』

「ん？」

『リインが・・・アイゼンも！くっ、うう』

スバルは言葉を発することも無く目を見開いていた。ただ信じられない光景が目の前に広がっていたから。

スバルの目の前には血を流し、意識が無いギンガが戦闘機人の1人

に髪を掴まれていた。

信じられなかった、信じたくなかった。自分にとって管理局の先輩でもあり、シューティングアーツの先生でもあり、そして何よりたった一人の姉であるギンガの惨状を。

「あ・・・ああ・・・うあああああ！」

瞬間、スバルの瞳が緑色から金色へと変化し、溢れ出たエネルギーが衝撃となって地を駆ける。

そしてリボルバーナックルから4発のカートリッジが排出される。

「返せ……ギン姉を返せええええええ！」

大きな叫び声と共に物凄いスピードで戦闘機人へと突撃する。

すぐさま反応したノーヴェが右腕に装備されたガンナックルからガンシューターを撃ち出す。

スバルはそれを避けるでもなく、ただ一直線に突っ込んでいく。牽制用の射撃であるため大したダメージは無いが、それでもダメージを受けない訳でない。

「うおおおお！」

魔力最大で突っ込んでいるためにマツハキヤリバーの機構にもかなりの負担が掛かっている。

だがそんなこともお構い無しに右拳を思い切りノーヴェへと突き出す。

ノーヴェはバリアを展開して攻撃を防ぐものの、拳の前に戦闘機人特有の歪な魔方陣が現れる。

そして直接触れていないにも拘らずガンナツクルが砕け散った。

「なっ!？」

「どおけえええええ!」

驚いている暇もなくスバルが右足で蹴りを繰り出す。ノーヴェもそれに合わせ、ジェットエッジから噴射推進による加速を行っての蹴りを繰り出した。

「ぐわあはああ!？」

「うわあっ!？」

威力はほぼ互角だったようで、爆発を起こして互いに壁に思い切り叩きつけられる。

「ノーヴェ、ウェンディあれは姉が抑える。ここから離脱しろ」

「了解っす」

「くそっアイツのIS、接触兵器か」

「IS発動、エリアルレイヴ！行くっすよノーヴェ」

「でも、チンク姉1人じゃ」

「案ずるな、姉ならば触れずに戦える！」

チンクと呼ばれた右目に眼帯をした小さな少女は、スローイングナイフをスバルへと投函した。
投函されたナイフはスバルの前の床へと刺さり瞬時に爆発を起こす。
それによりスバルの動きが止まると共に2人は離脱していく。

「うあああああ！」

スバルはギンガの元へと行こうとするが、チンクの攻撃により行くことが出来ない。

「邪魔・・・すんなあああああ！」

ノーヴェもウェンディも焦燥感に駆られていた。

タイプゼロ・セカンドの能力は危険だ、このままではマズイと。

「セイン、セイン！急いで手え空けてくれ！チンク姉を助けに！」

「分かった、すぐ向かう。お姉ちゃんに任せとけ」

残されたチンクはスバルの攻撃をバリアで防いでいた。だがそんなもの、今のスバルの前には役に立つはずが無かった。

しかしスバルのIS・振動破碎は何もいいことばかりではない。

振動がスバル自身にも伝わり、身につけたデバイスと共に甚大な影響を被っている。

攻撃を受けたわけでもないのに拳から血を流しているのがいい証拠だろう。

「うおおおおお！」

数回の攻撃は何とか防げたものの、再び歪な魔方陣が現れバリアを破壊してチンクを吹き飛ばす。

その衝撃でスバルも少し後ろに吹き飛ばされ、着地の衝撃でマッハキャリバーには更に負担がかかりショートしている。

「ギン姉！」

「いか・・・せん」

チンクを吹き飛ばし、離脱した2人を再び追おうとするスバルだったがチンクはそれを許さない。

スバルの行く手を阻むかの用に何本ものナイフが現れる。

「っ!？」

<Protection.>

ナイフが一斉にスバルに集中射撃をかけて爆発を起こす。

<—————>

オーバーデトネーション発動前に、マツハキヤリバーの自動詠唱によりプロテクションが発動したおかげで直撃は免れた。

しかしプロテクションがオーバーデトネーションの威力に耐え切れず破壊され、爆風がスバルに襲い掛かる。爆風が襲い掛かる寸前、マツハキヤリバーが何か音声を発していた。

だがそれは爆音により聞き取ることは出来なかった。

「くっ!」

既に身体にダメージがあり満足に起き上がることさえ出来ないチンクの瞳に、爆煙の中からスバルが歩いて出てくる姿が映った。その映った姿はバリアジャケットは無く、全身から血を流し、左腕に至ってはケーブルが剥き出しになっており、マツハキヤリバーは完全にショートしていた。

リアクティブパージ、バリアジャケットに搭載されている最終防御機構である。防御魔法やバリアジャケットで防ぎきれない巨大な衝撃に対して、装甲部分であるバリアジャケット外装に使用されている魔力を爆破、衝撃力を緩和させ術者の生命を保護するようになっている。

もつとも外装部分を爆破する為、内装部分のアンダージャケットにも相応のダメージが通り、アンダーも破損してしまうので発動後は実質的に無防備な状態に陥ってしまう。

これがバリアジャケットが無くなった理由であり、スバルがなんとか行動可能な状態になっていた理由である。

「返せ・・・ギン姉を・・・返せよおおおお！」

（やられる！）

チンクは覚悟した。もう身体は動かない、これで終わると。だが次の瞬間――

「セインさん到着！」

「た、助かった」

セインのISディープダイバーによりチンクを連れて地面へと潜っていた。

スバルも当然満足に動けるような状態ではない。故にそれを止める

事は出来ず逃がしてしまった。

「あ・・・うあ・・・」

スバルは力が抜けたかの様にその場に膝を着いて四つん這いの様な状態になる。

それと同時にマツハキヤリバーのローラー部分が完全に折れ、マツハキヤリバーもシステムダウンしてしまう。
もう完全に追うことは出来なくなっていた。

<The main body was... The system rests.>

「あ・・・う・・・ひっ・・・うあああああああ！」

「スバル！」

そこへようやくなのはとティアナが到着した。
その場にはスバルの泣き声だけが響き渡るのだった。

燃え盛る六課の隊舎内ではヴァイスが1人、射撃魔法でガジェットを撃墜していた。

そんな彼の前に紫の髪をした少女、ルーテシアが現れた。

彼女を視界に入れた瞬間に過去の辛い記憶が呼び起こされる。

立てこもり犯の狙撃任務で人質となっていた自分の妹の左目を撃ってしまったという過去を。

その少女が妹と重なり手が震えてまともに照準すら合わせることが出来ない。

「邪魔」

その一言と共に放たれた攻撃でヴァイスは吹き飛ばされ、意識は闇に沈んでいった。

他の六課メンバーも同様に、意識を保っているものは居なかった。

「酷い」

六課に到着したエリオとキャロの目に映ったのは炎上する六課だった。

「あれは！」

「あの子、ヴィヴィオが！」

そして六課からルーテシアとガリユーがヴィヴィオを連れ去ろうと
していた。

「ストラーダ！フォルムツヴァイ！」

<D?senform.>

「エリオ君？」

「キャロ、フォローお願い」

それだけ告げるとエリオはフリードから飛び降り、ストラーダを抱
え込むように持つ。

<Explosion.>

「ブースト！」

<Start!>

ストラーダのヘッドブースターから勢い良く噴射剤が噴射し、一直
線にルーテシア達の元へと向かっていく。

ガリユーが向かってくるエリオに対して跳び蹴りを放つと、ストラ

ーダで受け止めるが受けきれずに吹き飛ばされる。
だがそれでもその場でサイドブースターから噴射し、回転して再び勢いを付けるとガリューに向かっていく。
今度は互いに攻撃を繰り返し出しガリューの左腕にある爪のようなものを折るが、エリオ自身もその爪の攻撃により負傷する。

「失礼」

次の攻撃に移ろうとしたエリオの背後に突然女性が現れる。
現れたのは少し前にザフィーラ達と戦っていた戦闘機人、デイドだった。

デイドの攻撃により海へと落ちていく。

「エリオ君！きゃっ!?!」

そのキャロの背後にも戦闘機人、オットーが居りバインドを掛けられ海へと落ちていった。

「さっきのはFの遺産でしたか。まあ死んではいないでしょう。後の始末はガジェットたちがしてくれます」

「ガリュー行こう」

ルーテシア達はヴィヴィオを連れて六課から去って行くのだった。

空の上で、何度も何度も大剣同士をぶつけ合っている2人が居た。

「スカリエッティは何処にいる！何でこんな事件を起こす！」

「私に聞かれても困る。後ろの2人に聞いたらどうだ？」

フェイトが反射的に後ろを向くと、相変わらず何をするでもなく、ただこちらを見ているトーレとセツテの姿があった。

「お望みでしたらいつでもご案内します」

「もちろん、あなたが我々に協力してくれるのならですが」

「彼は犯罪者だ！それも最悪の！」

「悲しいことを言わないでください。ドクターはあなたやあの少年の生みの親のようなものですよ」

「あなた方の命はドクターがプロジェクトFの基礎を組み立てたからこそ」

「黙れ！」

フェイトが激昂し、2人に切りかかろうとした瞬間後ろから剣が振り下ろされる。

「くっ！」

振り向いて受け止めることで、何とか防ぐことは出来た。しかし力の差もあり、弾き返すことが出来なかった。

「私との戦いの最中にいつまで喋っているつもりだ。いい加減本気を出せ、そのままでは私に勝つことなど出来ん！」

言い終わると同時にビスマルクは大剣を振り切ってフェイトを弾き飛ばした。

「どうやらこのままでは本気になってもらえんようだ。私の力を見せるとしよう」

するとビスマルクの左目を塞いでいたピアスが砕け散り、目をゆつくりと開ける。

そして彼が持つ大剣——エクスカリバー——がピンク色をしたエネルギーフィールドを放出します。

「プラズマランサー、ファイヤ！」

「そのようなもの！」

ビスマルクは避ける素振りを全く見せず、近づいてきたプラズマランサーを大剣を振るうことで消し去ってしまった。

これには驚いたフェイトだが既に次の攻撃に入っており、ソニックムーブでの高速移動で背後へと回り込んでいた。

だがそこには信じられない光景があった。フェイトが後ろに回ったとき、ビスマルクは既に後ろを向いていた。

「視えているぞ！」

ザンバーを振り下ろしたフェイトに対し、エクスカリバーを横薙ぎに振るビスマルク。

両者の剣が激突し火花が散る。だがそれもほんの僅かな時間。

「なっ!?!」

次の瞬間にはザンバーの刀身が消失していた。

刀身は魔力刃として形成されているため、折れるなどということはない。

文字通り初めからそこに無かったかのように消えたのだ。

「何をした！」

「そう聞かれて答えるとも思うか？」

「くっ！」

フェイトは再び魔力刃を形成する。だが形成するだけで攻撃を仕掛けようとはしない。

攻撃したところでどうせ先ほどのように消されるのは目に見えていたからだ。

（多分、あの剣の力だ。でもザンバーの刀身すら消すなんて、どうすれば。それにさっきの動き、まるで私が後ろに来ることが分かっていたかのようにだった）

「これで少しは本気を出してくれるか？」

（こうなったらソニックを・・・）

「騎士ビスマルク」

フェイトが今まさに全力を出そうとした瞬間、トーレが声を上げた。

「何だ？」

「作戦終了のようです。この場は引きましょう」

「そうか・・・小娘、次に戦うことがあれば最初から全力で来い。
今日のような調子で戦えば、次は一瞬で終わるぞ」

「っ!？」

ビスマルクが言い終わると周囲を光が包み込み、次の瞬間にはその場にフェイトが1人残っているだけだった。

キヤロはエリオとフリードを助け、何とか海から脱出していた。

「ハアハア・・・」

「これより5分後に上空の大型ガジェットと航空戦力による施設への殲滅作戦を行います。我々の目的は施設の破壊です。人間の逃走は妨害しません。抵抗せず、速やかに非難して下さい」

「なんで・・・こんな」

何故か非難の警告を告げているが、六課のメンバーたちは全員気を失っているため非難など出来る状態ではない。

このままでは殲滅作戦に巻き込まれて命を落とすだろう。

唯一意識があるキャラも、1人で六課の全員を非難させることは出来ない。

もちろん転送魔法を使えば出来るかも知れない。だがキャラはそれを行おうとはしない。

なぜなら、自分の居場所である六課そのものを見捨てることなど出来ないのだから。

キャラは涙ながらに魔方陣を展開する。

「竜騎召喚・・・ヴォルテール！」

「ガアアア！」

キャラの後方に巨大な魔方陣が現れ、そこから巨大な竜が雄叫びを上げて出現する。

体長は凡そ15メートルほどで、腕があり2足で立っている姿から竜というよりも竜人と言った方がしっくりくる。

本来長い詠唱が必要なのだが、キャラが危機に瀕した際は詠唱をカット、キャラが意思を込め呼ぶ事によって召喚される。

更に状況が逼迫した場合は呼ぶ必要すら無く現れる。これはキャロの巫女としての資質であると同時に、ヴォルテール自身の意識によるものである。

「壊さないで・・・」

キャロが小さく声を上げると同時に巨大な竜——ヴォルテール——が周辺大地から魔力を集め、3つの巨大な魔力球を作り出す。

「私達の居場所を・・・壊さないで———！」

キャロの悲痛な叫びと共にヴォルテールが殲滅砲撃、大地ギオ・エルガの咆哮を発射する。

放たれた巨大な砲撃は上空にいたガジェット群を一撃で殲滅させるのだった。

「ミッドチルダ地上の管理局員諸君、気に入ってくれたかい？ ささ

やかながらこれは私からのプレゼントだ」

「何だ!？」

地上本部ではジェイル・スカリエッティが大きなモニターに映っていた。

スザクは外でガジェットの撃墜を行っていたが、急にガジェットが引いていった。

そしてすぐにスカリエッティがモニターに映ったのだった。

「治安維持だのロストログア規制だのといった名目の元に圧迫され、正しい技術を促進したにも拘らず罪に問われた稀代の技術者たち。

今日のプレゼントはその恨みの一撃とでも思ってくれたまえ。しかし私もまた人間を、命を愛する者だ。無駄な血は流さぬよう努力はしたよ。可能な限り無欠に人道的に。忌むべき敵を一方的に制圧することが出来る技術、それは十分に証明できたと思う。今日はこのくらいにしておくでしょう。この素晴らしき力と技術が必要ならばいつでも私宛に以来をくれたまえ、格別の条件でお譲りする。フフフ・・・ハッハッハッハッハ」

（これが・・・スカリエッティか）

スカリエッティを見たスザクは拳を強く握り締めてモニターを睨みつける。

その瞳には強い怒りが込められていた。

第13話「怒りの日」(後書き)

さて、前書きに書いた質問なのですが。

この小説、作者が可能な限りデバイスの発言を英語やドイツ語で書いています。

そしてその部分については日本語表記・和訳を一切しておりません。そこで質問です。

？ フォーム名や魔法名などについて

現在は英語 or ドイツ語のみの表記になっていますが、日本語でルビを振ったほうがいいのか、振らないほうがいいのか。2回目以降の表記にはどちらがいいのか。

ちなみに、振る場合は公式サイトで表記されているものではなく、デバイスの発言どおりに振ります。

例) 公式↓シュベルトフォーム デバイス↓シュヴェアトフォーム

？ デバイスの文章になっている発言について

All right. や Ja. など、「はい」というような受け答えを除き、

文章になっているものに対して和訳をつけたほうがいいのか、つけないほうがいいのか。

ついていないほうが見た目はカッコイイと思っています。(↑バカWですが読む上では和訳を付けないと分からないのではないかと思っています。)

意見をくださった方全員の回答がどちらかのみだった場合は、考えるまでも無くそういたします。

ですが、どちらも似たような票数であれば、答えてくださった方の意見を参考に決めさせていただきます。

よろしくお願いします。

第14話「決戦」(前書き)

もうすぐ第一部(StS編)が終わりますね。
な、長かった。

第14話「決戦」

地上本部及び機動六課襲撃から一夜が明けた。この襲撃で負傷した局員の数は少なくなかった。

そして当然六課のメンバーもかなりの人数が負傷していた。

隊長副隊長陣とフォワード後衛組^{バックス}、スザクだけが特に怪我も無くほぼ無傷の状態だった。

そんな状態になっても仲間達の見舞いを十分にする時間すらなく、動けるメンバーは事後処理に追われていた。

しかし、だからといって全く見舞いに行かないわけではない。順次交代で見舞いに行っていた。

「腕、もう動かせるんだ」

「神経ケーブルが逝っちゃったからまだ上手く動かせないんだけど、何日かで元通りだって」

「そう」

そして今現在、入院しているスバルとエリオの部屋にスザクとティアナ、キャロの3人が様子を見に来ていた。

「でもまさか君が戦闘機人だったとはね。正直、かなり驚いたよ」

「スザクさん……すみません、今まで黙ってて」

「あの、私が止めてたんです。体のことはしばらく秘密にしときなさいって」

「そうか……でも誰にだって言いたくないことくらいあるんだ、気にしなくていいさ」

俯き気味になっていたスバルの気を少しでも晴らそうと思って言ったのだが、スバルはまだ俯いたままドリンクの缶を見つめている。

「それにさ、大切なのは人間だとか戦闘機人だとかそんなことじゃないだろう？」

「え？」

スバルはスザクへと視線を向ける。彼が何を言いたいのかいまいち理解出来ない。いや、本当は心の奥底では理解しているのかもしれない。

だからこそ、その言葉を聞きたかった。それがスザクの言葉の続きを聞くために、彼のほうへ視線を向けるという行動に繋がっていた。

「大切なのは心だ。心の在り方でどんな風にだってなる。だから今

まで通りに生きていけばいい。自分の夢を目指して、明日へ向かっていくんだ」

「スザクさん……」

「そうそう、なのはが言ってたんだけど、六課はこれからレリック捜査からスカリエッティ一味の追跡捜査に切り替わるそうだよ。それじゃ僕は他の皆の様子を見てくるよ」

「あ、えと……僕とキャロは何か飲み物買ってきますね」

3人は病室を後にし、ティアナとスバルの2人だけが残された。彼等なりに気を使っているのだろう。

「ゴメンね」

「何に対してのゴメンよ。あたしやなのはさんの言うこと聞かずに先行しすぎたこと？大怪我して皆に迷惑掛けたこと？」

「いろいろ」

「後でマッハキャリバーにも謝ったときなさいよ。酷い破損状況だったんだから」

「うん。スザクさんってホントに強いね……戦闘技術とかだけじゃなくて、心が」

「そりゃそうでしょ。あたし達とは潜った修羅場の数が違うのよ。」

それに何たってブリタニア帝国最強の騎士だったんだから」

2人は暫し沈黙する。彼女等なりに改めてスザクの強さを実感していた。そしてスザクの元の世界での地位を管理局に当てはめていた。若干顔が引きつっていたのは気のせいだろうか？

「そういえばティア、スザクさんが言ってたことだけど」

「ああ、六課の任務が切り替わったこと？」

「そうそう」

「ホントよ。だからギンガさんを助けに行けるチャンスがある。だから今度は失敗なんてしない。必ず守るし必ず助ける、全部よ」

「うん」

——— 時空管理局 次元航行部隊 L級巡航艦 「アースラ」

経年劣化などにより「長期任務には耐えられない」として退役にして廃艦処分にする事が決定していた。

だが、機動六課本部施設の壊滅により新本部兼新司令部を欲していたはやてとクロノの要請により、「移動できる本部」として旗艦機能を持たせて投入が決定した。

このアースラは一部のメンバーにはとても懐かしい船なのだが、それはまた別のお話である。

前線メンバー一同は一室に集まり、はやてから今後の六課の方針について話を聞いていた。

「――誘拐されたギンガ・ナカジマ陸曹となのは隊長とフェイト隊長の保護児童、ヴィヴィオを捜索・救出する、そういう線で動いていく。両隊長、意見があれば」

「方針に依存はありません」

「そうか。ほんなら捜査及び出動は本日中の予定や。万全の体制で出動命令を待っててな」

「はい！」

「それと、フェイトちゃんが交戦したこの男性やけど」

はやてが映し出したのは、鎧を纏った大柄な中年男性。

「スザクくんに聞いたんやけど、名前はビスマルク・ヴァルトシュ

タイン。ブリタニア帝国の騎士で、ナイトオブワンとのことや」

「この人、本当に強かった。ザンバーの刀身が消されちゃったし」

「彼が持つ大剣、エクスカリバーにはエネルギーを拡散させる力がある。だから君たちでは分が悪すぎる。僕が相手をする」

「そやな、この人物に関してはスザクくんに任せる」

部屋から退室しかけたはやてだが、急に何かを思い出したかの用にスザクのほうへ振り返る。

「あ、そうそう。いい忘れとったんやけどな、スザクくん」

「なんだい？」

「ランスロットなんやけどな、見た目も普通のデバイスとちゃうし単にインテリジェントデバイスって呼ぶんもどうかと思って名前考えとったんよ」

「名前？」

「そうや。機械部品で出来とるけど何かこう鎧みたいやろ？そやからアーマーデバイスって呼ぶことにしたんよ」

「アーマーデバイス・・・」

「まあ深い意味とかあるわけちゃうし、そんな気にせんでもええよ。」

ほな」

アーマーデバイスというネーミングに「確かにそんな感じだ」と、一同は納得していた。

「ゴメンね、マツハキヤリバー。私の事怒ってるよね」

< Perhaps I don't have the feeling of "anger." Worry is not needed. >

スバルはマツハキヤリバーに申し訳ない気持ちで一杯だった。

初めての出勤の時から一緒に戦ってきた相棒なのに、先の戦闘時にはその相棒のことなど頭に無かった。

自分勝手に道具扱いして、挙句の果てに大破までさせてしまったから。

「こんなに・・・傷つけちゃった」

<No. I had a problem. Your
best stage was not supported
due to my power shortage.>

「あ、ゴメン。大事な話中？」

ドアが開いたようで、スバルがそちらへ視線を向けるとシャーリーとマリエル・アテンザが立っていた。

マリエルという女性はレイジングハートとバルディッシュにカートリッジシステムを組み込み、シュベルトクロイツを制作した人物だ。ちなみに愛称は「マリー」である。

「いえ」

<Reconsideration meeting>

「シャーリーさんもういいんですか？」

「六課が大変な時期だし、デバイスたちの様子も見なきゃだし、寝てられないよ。ねえスバル、マツハキヤリバーね修理ついて自分で強化システムのプランを自分で考えちゃったのよ」

「え？」

「アウトフレームの強化とか装甲強度のアップとか」

「かなり重くなるし扱いづらくもなるだろうからスバルに聞かない

とって言ったんだけど」

それを聞いたスバルはすぐにモニターを覗き込んだ。

ただ立っている場所がシャーリーの対面に位置するため、逆さまに見える。

「魔力消費1，4倍、本体重量2，5倍・・・やれます！この程度なら確実に！」

「じゃあこのプラン採用。よかったね、マッハキャリバー」

<Thank you. Please give me one more chance. Your best will be supported without fail this time. So that you can go as far as you want.>

「うん」

短く答えたスバルは涙を流していた。それはおそらく嬉し涙だろう。マッハキャリバーが自身を相棒だと認めてくれているから。

「それにしても問題はランスロットのほうなんだよね」

「えっ、どういことですか？まさかどこか壊れて——」

スバルは涙をゴシゴシ拭くと浮かない顔をしているシャーリーへ質問する。そしてまさかの事態が脳裏を過ぎる。

「ううん、万全の状態だよ。ただフルドライブのアルビオンモードが・・・」

「何か問題でも？」

「うん・・・エアキャヴァルリーもコンクエスターもかなり高性能だったんだけど、その2つのモードに比べてフルドライブのスペックが極端に跳ね上がってね、到底常人には扱えないようなスペックしてるの」

「え・・・」

スバルは自身の脳裏を過ぎった返答でないことに安堵していた。だが返って来た返答はある意味、まさかの答えだった。

「えと・・・それってかなり問題あるんじゃないですか？」

「そう思ったんだけど、ランスロットはスザクさんなら問題ないって言い切るからそれを信じるしかなくて」

「あ、でもスザクさんなら普通に使えそうな気がしないでもないです・・・」

何というか、もう全員苦笑している。
その部屋には何とも言いがたい空気が漂っていた。

ミッドチルダ東部にある森林地帯。そこから巨大船が大地を押し
け浮上してきた。

その様子をシスター・シャツハとアコース査察官は間近で見ていた。

「騎士カリム、これがあなたが言っていた」

「踊る死者たち、死せる王の下聖地より帰った船。古代ベルカ聖王
時代の究極の質量兵器、天地を統べる聖女の船。聖王の・・・ゆり
かご」

それと同時にゆりかごからアースラへと映像が送られてきていた。
そこには、コードのようなものが何本も繋がれた玉座に座るヴィヴ
イオが映っていた。

「ママ・・・ああっ！？痛いよお怖いよお！ママ！ママー！」

「ヴィヴィオ・・・」

その映像を見てなのは胸の前で拳を硬く握り締める。

いや、なのはだけではない。六課のメンバー全員が怒りに震えていた。

「――ほんなら隊長陣も出動や！」

浮上したゆりかごは軌道上を目指して高度を上げていく。

軌道上に到達すれば2つの月の魔力を得て、高い防御性能を発揮する。

そしてそれだけでなく同時に精密狙撃や魔力爆撃など強力な対地・対艦攻撃が可能になるほか、次元跳躍攻撃も行えるようになる。

故に軌道上到達までに破壊しなければならなかった。だが破壊するといっても全長数キロメートルもある戦艦を魔導師の魔法だけで破壊できるはずが無い。

そのために作戦行動を行っているのが本局次元航行部隊で、ミッド

チルダへ向けて何十隻もの次元航行艦が発進した。

だが到着までには時間が掛かるため、このままではゆりかが先に軌道上へ到達してしまう。

そこでゆりかが内部に侵入し動力炉の破壊及びヴィヴィオの奪還を行うことになった。

アースラの後部ハッチが開き、そこから5人が飛び出す。
なのは、フェイト、はやて、ヴィータ、そしてスザク。

「エクシードドライブ！」

<Ignition.>

なのはは最初からエクシードモードを起動、そのバリアジャケットはかつての形状と酷似していた。

「僕達も行こう、ランスロット」

<All light. Drive ignition.>

スザクが淡い緑の光に包まれる。光が消えると、そこにはいつも通り白銀の鎧を纏うスザクが居た。

だが大きく異なる点があった。背中にあった赤いフロートユニットが消えていた。

「それがアルビオンなんか？」

「ああ」

「フロートユニットが消えてるけど・・・大丈夫なの？」

「問題ないよ。エネルギーウイング展開」

するとスザクの背中にあるパーツが展開し、薄い緑色をした半透明の6枚羽根が出現する。

なのはたちはその姿に暫し見とれてしまっていた。

「キレイ・・・」

「先に行ってガジェットを叩いてるよ」

「うん・・・って、え？」

「それじゃ」

次の瞬間、スザクはすでにそこに居なかった。
なのは達が前方を見ると小さな姿が見えた。

「は、はええ」

「私等も行こう」

「うん。フェイトちゃん、気をつけてね」

「なのはもね」

フェイトは3人と別れて降下していく。元凶であるスカリエッティを逮捕するために。

「あのヘリがガジェットを落としていつてる？」

とあるビルの屋上でオットーは地上に居るナンバーズの指揮を執っていた。

ティアナをビル内に結界で閉じ込めているのもオットーの仕業だ。

「がっ!？」

ガジェットを落としているヘリを確認したときだった。突然強い衝撃がオットーを襲い、ビル内へと落ちていった。

「指揮官と思われる戦闘機人を撃墜。身柄の確保を願う」

その通信を行ったのはオットーがいたビルの屋上の数十メートル上空にいるスザクだった。

シャルから敵指揮官の居場所を突き止めた連絡を受けたスザクが、ゆりかご周辺にいる大量のガジェットを撃墜している現場から急遽駆けつけたのだった。

「これで少しは・・・っ!？」

背後に何かの気配を感じ取ったスザクはすぐに振り向く。その瞳に映ったのは、ビスマルク・ヴァルトシュタインだった。

「久しいな枢木」

「ヴァルトシュタイン卿・・・もう何も言うつもりはありません」

「前は破れたが、デバイスの性能さが埋まった今貴様に勝ち目はない」

ビスマルクもすでにフルドライブの状態になっているのか、背中にはエナジーウイングが装備されていた。

（オットー、落ちたっすね）

ティアナを閉じ込めていた結界が消えたことにより、オットーが落ちたことを察したウエンディ、ノーヴェ、デイドの3人。その3人は今、手負いのティアナを囲んでいた。

「このお、うおおおおお！」

ノーヴェとデイドがティアナに向かって駆け出し、ウエンディが射撃のチャージをし出した瞬間だった。

「そこっ！」

叫び声と共にティアナが周囲に待機させていた魔力弾を2発、ノーヴェとデイドに向けて発射する。当然そんな丸見えの攻撃は避けられて当たらない。

だがディアナにはそれで十分だった。避けさせて僅かに時間を作ることこそが目的なのだから。

すぐさま振り返り、ウエンディがチャージしているエネルギー弾に向けて魔力弾を撃ち出す。

その間にもディードはツインブレイズをティアナの後ろから振り下ろしていた。

「ぐっ!？」

命中した魔力弾はウエンディのエネルギー弾を暴発させ、土煙を撒き散らした。

土煙が晴れると、ツインブレイズをダガーモードをツーハンドモードで使用し受け止めるティアナの姿があった。

そして煙が舞っていた間に発射していた誘導型の魔力弾がディードの後頭部を直撃し昏倒させる。

何とか起き上がろうとしていたウエンディの顎を、これまた先ほどの間に撃ち出していた魔力弾が下から突き上げるように命中し、彼女もまた昏倒する。

「ウエンディ! ディード!」

「あなた達を保護します。武装を解除しなさい」

「くっ!」

あっという間の出来事だった。先ほどまで優勢だった自分たちが、

数秒の間にノーヴェ1人になってしまった。
ノーヴェの表情には焦りと、仲間がやられた怒りが見えていた。

スバルは空中に投げ出されており、意識も飛んでいた。

ギンガを取り戻すために戦っていたものの、やはりギンガは強く、
まともに一撃すら入れられずに居た。

ギンガはウィングロードを走り、スバルへと一気に距離を詰める。

「リボルバー・・・ギムレット」

左手が回転しドリルのような、いやまさにドリルと表現して差し支えない状態になっている。

こんなものが当たれば間違いなく孔が空く。今のギンガはスカリエ
ッティの調整を受けているために攻撃に一切の迷いがなかった。

<Wing Road!>

攻撃のために腕を突き出そうとしたまさにそのときだった。
マッハキャリバーの自動詠唱でウイングロードが発動し、足が蹴り
の要領でギンガの左腕の攻撃を食い止めた。

<Calibur shot, left turn! Shoo
t it!>

そして空中で体制を立て直し、右腕で突きを繰り出す。
その威力で弾かれてギンガは後退する。その表情は驚きで一杯だっ
た。

「え？」

<Just as rehearsed.>

意識を取り戻したスバルは何か起きたのか理解できていなかった。

「マッハキャリバー？」

<We can still take actions...
you and I.>

「っ!？」

<We can still fight. So why ab

a n d o n n o w ? Y o u t a u g h t m e t h e r
e a s o n o f m y b e i n g h e r e , m y s t r
e n g t h a n d p o w e r w h i c h y o u a d o r
e s o m u c h . D o n ' t m a k e e v e r y t h i
n g a l i e . >

マツハキヤリバーの言葉を聞いてスバルは思い出した。自分の夢を、
困っている人を助けられるようにしたいという夢を。

戦うことは怖かった。いつも不安で手が震える。だけどこの手の力
は壊すためにあるのではないから。

守るために、悲しい今を撃ち抜く為にある力なのだから。
もう怖くは無い、大切な相棒が傍にいてくれるから。

「行くよ、マツハキヤリバー」

< A l l r i g h t b u d d y . >

リボルバーナックルからカートリッジが3発排出される。

「フルドライブ！」

< I g n i t i o n . >

「ギア・・・エクセリオン！」

< A . C . S . S t a n d b y . >

フルドライブになると同時にマツハキヤリバーから魔力光と同じ色をした羽根が出現する。

その羽根はなのはのフライアーフィンを思い出させる。だが意義的にはレイジングハートの先端部の魔力翼と同義の物で、飛行能力が付与される訳でない。

「行くよ、ギン姉」

しばらく睨み合った後、両者は一気に駆け出す。数回拳を交えるもののどちらも決定打は無い。

一度距離を取って構え直すと、ギンガはカートリッジを排出して再びリボルバーギムレットを発動させる。

互いにプロテクションで防いでいるが、ギンガの攻撃が次第にスバルのプロテクションを貫通していく。

だがスバルは腕力と魔力で強引にバリアブレイクを行う。

「一撃必倒！うおおおおおおおおお！」

更に体重を掛けて無理矢理前に突っ込もうとする。だがプロテクションが耐え切れず破壊され、ギンガの左腕がスバルの顔面へと向かう。

しかし寸前でなんか回避することに成功し、同時にギンガのプロテクションも破壊した。

今の突撃の際に同時進行でチャージしていた、デイベインバスター

A・C・Sをギンガの腹部へと向ける。

「ディバイーーン」

「っ!？」

拳より少し大きいだけだった魔力球は一気に数倍の大きさまで膨れ上がった。

「バスターー!」

放たれた光の奔流はギンガを飲み込んだ。

「私の大切な人は、皆私を忘れていっちゃう。独りは嫌だ」

ルーテシアと戦っていたエリオとキャロは彼女を止めたかった。

彼女が戦闘機人であるならば攻撃して機能停止させれば問題ないが、彼女は戦闘機人ではない。

そして何より、倒すのではなく止めたかった。力になってあげたかった。

だがどんな言葉を投げかけても彼女は止まらなかった。そして究極召喚で白天王を召喚してしまった。

「寂しいのはもう嫌だ。独りぼっちは嫌だー！ー！」

「キャロ！」

「うん」

キャロもまた魔方陣を展開し、白天王共々ルーテシアを止めるために真竜を召喚する。

「天地貫く業火の咆哮、遙けき大地の永遠とわの護り手、我が元に来よ、黒き炎の大地の守護者」

「よく似てるんだ、僕達とルーは。ずっと独りぼっちで、誰も守ってくれなくて、誰も信じられなくて、何も分からなくて、傷つけることしか出来なくて・・・だけど変わるんだ。きっかけ一つ、思い一つで変わっていきけるんだ！」

「竜騎招来、天地轟鳴、来よ、ヴォルテール！」

「でやあああああ！」

エリオの攻撃をガリユーが受け止めるが足場が衝撃に耐え切れずに崩落する。
ガリユーがストラダを掴んでいるためにエリオも共にビル内へと落ちていく。

「紫電一閃！」

エリオが魔力変換資質・雷により電撃を纏った拳をガリユーへと叩き付ける。

ストラダを掴んでいたために避けることができず、ガリユーはその場に倒れた。

「はあはあ・・・キャロ」

ビルの屋上でも決着が着こうとしていた。

地雷王の放った電撃をフリードがブラストレイで相殺し、白天王の放っている魔力砲もヴォルテールのギオ・エルガによって相殺された。

そしてルーテシアが意識を失ったことにより、召喚虫たちはその行動を停止した。

はずだったが、ルーテシアの尚も戦おうとする意思により召喚虫達は再び行動を起こしていた。

「それが君の切り札か」

スカリエッティのアジトでは、フェイトがスカリエッティと2機の戦闘機人、トーレとセツテと対峙していた。

フェイトは既に肩で息をしており、バルディッシュもライオットブレードへと姿を変えていた。

ただ元々の魔力の負担が大きい上に、このアジト内は高濃度のAMF空間となっているために、余計に負担が掛かってしまっていた。

「このAMF状況下では消耗が激しそうだ。だが、使ってしまった方がいいのかね？ここに居る私を倒したとしても、ゆりかごも私の作品たちも止まらんのだよ？君と私は良く似ているんだよ」

「っ!？」

「私は自分で作り出した生体兵器達、君は自分で見つけ出した自分に反抗することの出来ない子供達。それを自分の思うように作り上げ、自分の目的のために使っている」

「黙れ!」

プラズマランサーを数発撃ち出すものの、さらにA M Fを展開したスカリエッティに届くこと無かった。

「違うかね？ 君もあの子達が自分に逆らわないように教え込み、戦わせているだろう？ 私がそうだし、君の母親も同じさ。周りのすべての人間は自分のための道具に過ぎん。そのくせ君達は自分に向けられる愛情が薄れるのには臆病だ。実の母親がそうだったんだ、君もいずれあなる。間違いを犯すことに脅え薄い絆に縋って震え、そんな人生など無意味だと思わんかね？」

『『違う！』』

まるで洗脳されるかの如く責められていたフェイトだが、彼女にとって大切な2人からの叫び声で我に返った。

『無意味なんかじゃない！』

『僕達は自分で自分の道を選んだ！』

『フェイトさんは行き場の無かった私に暖かい居場所を見つけてくれた』

『沢山の優しさをくれた』

『大切なものを守る幸せを教えてくれた』

『助けてもらって、守ってもらって、機動六課でなのはさんに鍛え
てもらって』

『やっと少しだけ立って歩けるようになりました』

『フェイトさんは何も間違っない』

『不安なら私たちがついていきます。困ってるなら助けに行きます』

『もし間違ったら僕達がフェイトさんを叱ってちゃんと連れ戻しま
す。僕達が、皆がついてる』

『だから負けないで、迷わないで』

『『戦って!』』

エリオとキャロの言葉の一つ一つがフェイトの心の隅々まで染み渡
っていく。

その瞳にはもう迷いは無かった。

<Get set.>

「オーバードライブ、真・ソニックフォーム」

<Sonic Drive. Riot Zamber.>

フェイトを包んでいた光が消えると、二刀流のライオットブレード——ライオットザンバー・ステインガー——を持つフェイトの姿があった。

「装甲が薄い、当たれば堕ちる」

フェイトは一瞬でセツテと間合いを詰めると、ライオットザンバーの一閃が決まる。

一撃でブルーメランブレードを破壊し、その上でセツテをも戦闘不能にしてしまった。

そしてすぐさまトーレへと向かう。

「ライドインパルス！」

高速戦闘で数回激突するも、両者共に決定打は入れられなかった。そして再び距離を詰める。だがフェイトは先ほどとは違い、途中で動きを止めて2本あったライオットザンバーを1本へと合体させる。大剣状になったライオットザンバー・カラミティをトーレに向かって思い切り振り下ろす。

「おおおおお！」

「はあっ！」

インパルスブレードで受け止め、数秒は持ちこたえたものの威力に耐え切れずにインパルスブレードが破壊され、そのままザンバーが叩きつけられる。

トーレは壁まで吹き飛ばされそのまま機能停止に陥ってしまう。

「はあああああ！」

次いでスカリエッティに振り下ろすも手で受け止められる。

「ははは、素晴らしい。やはり素晴らしい。ああ、この力欲しかったなあ。だが私を捕らえる代償に君は此処で足止めされる。私がゆりかごに託した夢は止まらんよ！」

「くっ！」

一旦距離を取ったかと思うとすぐに距離を詰め、フルスイングしてスカリエッティを吹き飛ばす。

その一撃で意識を失ったようで、スカリエッティが立つ事は無かった。

「広域次元犯罪者、ジェイルスカリエッティ。あなたを逮捕します」

スカリエッティは捕まえた。だがゆりかごは止まらない。

そして何より、戦闘機人の胎内にはスカリエッティのコピーが宿っ

ている。

ゆりかごを停止させ、戦闘機人を全て捕まえなければ事件は解決しない。

だがフェイトは信じている。この事件は必ず終わると。

自分1人では無理でも、自分が心から信じる仲間が必ず――

第14話「決戦」(後書き)

ホントにやりたいのは第二部だったんですが、いきなりスザクが管理局にいるのも変だと思い・・・

なので正直な話、第二部をメインと考えるとこのsts編は長いプロローグのようなものです。

此処へ来てかなり進展具合が速くなったのは、stsはTVでもやってたんだからグダグダ長くしなくてもいいかと思ひまして。

あと1話か2話でsts編は完結します。続編のタイトルはおそらく変更します。

『魔法戦記リリカルなのはKNIGHT』 coming soon.
on...

第15話「明日への翼」(前書き)

ストライカーズ編、これにて完結です。

まあ後はあとがきにでも。

では、どうぞ。

第15話「明日への翼」

ゆりかごの動力炉の前に赤い服を着てボロボロのハンマーを持った少女が居た。

その赤い服は元から赤いのか、それとも少女が流している血で赤く染まっているのか分からない。

・・・訳ではなかったが、それでもその少女がかなりの出血をしていることに違いは無かった。

その少女の名をヴィータという。古代ベルカの騎士で鉄槌の騎士の異名を持つ少女だ。

ヴィータは此処に来るまで数も覚えていないほどのガジェットを撃墜してきた。

高濃度のAMF空間の中でそれだけ戦ってきたのだ、消耗も半端ではなかった。

動力炉の前に立つ頃には限界に達しようかというところだった。いや、もしかしたらもう限界に達しているのかもしれない。

だがそんな状態でもヴィータは動力炉を破壊するために歩みを止めない。

「大丈夫か・・・アイゼン？」

<Kein Problem.>

「なのははもう、玉座の間に着いてる頃だよな？」

<Ja.>

「はやても外で戦いながら船が止まるのを待ってる」

<Richtig.>

「こいつをぶっ壊してこの船を止めるんだ。リミットブレイク、やれるよな？」

<Jawohl. Zerst?rungsform.>

2発のカートリッジ排出され、グラーフアイゼンは姿を変える。その姿は巨大ハンマーにドリルとブーストが付いた巨大な鉄槌で、ギガントフォルムとラケーテンフォルムの長所を併せ持っていた。ヴィータは魔方阵を展開してグラーフアイゼンを振りかぶる。

「ツェアシュテールングスハンマーー！」

叫び声と共にヘッド部を限界まで巨大化させ、ロケット噴射による加速と先端のドリル回転をさせて動力炉である赤い結晶体へと叩きつける。

爆発が起きて爆煙が周囲を覆う。だが爆煙が晴れた後、そこにあったのは傷一つ無い結晶体だった。

<Eine magische Reaktion wurde
ausfindig gemacht.>

辺りに警告音が響き渡り、人間の頭ほどの大きさの立方体が大量に出現する。

<Wir gehen in die Verteidigung
ssituation ein. Alles, was sic
h dem Kern annehmert, wird unbed
ingt z?gig angegriffen.>

「上等だよ。うおおおおお！」

立方体からビームのようなものがヴィータへと一斉に発射され、彼女が居た地点でぶつかり合って爆発を起こすのだった。

「同行をお願いします」

シグナムがレジアスの執務室に入ったとき、4つの影を認識するこ

とが出来た。だがそのうちの3つは倒れている人物の影だった。
2つはこの部屋の主であるレジアス中將とその娘のオーリス三佐。
そしてもう一つは戦闘機人だと思われる人物だった。

この3人の内、レジアスと戦闘機人――ドゥーエは既に死亡していた。

オーリスはどうやら気絶してるだけのようだった。

そしてレジアスのデスクの前で立ち尽くしていた人物――ゼストへ同行を促していた。

同行を促した理由は多々あるが、今一番の理由は殺人の現行犯だった。そしてそれは本人も認めたことだ。

「断る。ルーテシアを救いに戻り、スカリエッティを止めねばならん」

「スカリエッティと戦闘機人たちは既に逮捕、ルーテシア・アルピノも私の部下たちが保護すべく動いています」

「そうか、ならば俺の成すべきことは後一つだけか」

「旦那！？何で！」

「じっとしている」

アギトはこれでゼストも戦わなくていいようになる、そう思っていた。

だがゼストは槍型のアームドデバイスを構える。それを見たシグナムもまたレヴァンティンを構えた。

「夢を描いて未来を見つめたはずが何時の間にか随分と道を違えてしまった。本当に守りたいものを守る、ただそれだけの事の何と難しいことか」

シグナムはただ黙ってそれを聞いている。そして理解していた。ゼストを止めるには剣を交え、倒すしかない。

「はぁあっ！」

ゼストが仕掛ける。振り下ろされた槍はシグナムの髪を止めていたリボンを切り落とすだけに終わった。間髪置かずシグナムが斬りかかる。それをデバイスで受け止めるゼストだが、レヴァンティンによって真っ二つに切断されてしまう。

「ぐっ、はぁぁぁあ！」

切断されたデバイスを捨て、拳だけでシグナムへと挑むゼスト。彼の額からは先ほどの攻撃が掠ったのか、血が流れていた。

「紫電一閃」

レヴァンティンを振りかぶると同時に葉莢が排出され、刀身を炎が

包み込む。

「はぁっ！」

「旦那ー！」

両者がすれ違った後、一呼吸置いてゼストが崩れ落ちた。
シグナムがゼストを抱き起こすと、彼は自分がしている指輪をシグナムに見せる。

「これは？」

「俺が知る限りの事件の真相は此处に収めてある」

「お預かりします」

「アギトとルーテシアのことを頼めるか？巡り会うべき相手に巡り会えずにいた、不幸な子供だ」

「旦那ー！」

「アギト、お前やルーテシアと過ごした日々、存外悪くなかった」

自身の前へと移動してきたアギトの頭を優しく撫でるゼスト。
そして顔を窓の外へと向ける。

「いい空だな」

「はい」

「俺やレジアスが守りたかった世界。お前たちは間違えずに進んで・
・くれ」

ゼストから力が抜ける。目蓋も閉じられている。

自分たちが守りたかった世界、その想いを託して空高く旅立っていた。

「はあっ！」

ミッドチルダ市街地上空ではスザクとビスマルクが目にも留まらぬ速さで超高速戦闘を続けていた。

その戦闘はガジェットと交戦している局員達の間を通り抜ける時もあった。

だがあまりにも速すぎる速度のためにそれほどランクの高くない魔

導師達は気付くことが無かった。
そしてこの2人は実力が伯仲しているために、互いに決定打を入れられずに居た。

「くそっ！」

スザクがビスマルクの左側に回りこむが、やはりブリタニアで戦ったときと同じく動きが読まれてしまう。

だがお構い無しにお得意の回転キックを繰り出す。
蹴りを出してくることが視えていたビスマルクは、左腕にブレイズルミナスを発生させて防ぐと同時に右手に持つエクスカリバーを振り下ろした。

しかしその攻撃が当たるのならば、ビスマルクがスザクに負けることなど無い。

スザクは驚異的な身体能力でビスマルクの攻撃を悉く避けていた。
振り下ろされたエクスカリバーを身体を捻って避け、スーパーヴァリスを胸部へと押し付ける。

「もらった！」

「甘い！」

引き金を引く寸前に左手の指から放たれたスラッシュハーケンにSヴァリスが貫かれる。

瞬時にSヴァリスを手放し、距離を取ってMVSの二刀流へとスタイルを変えて再びビスマルクへと向かって行った。

「はあはあ、ちくしょう」

動力炉を守るために出現した立方体はすでに全て落とされており、再びヴィータと結晶体の2つの存在だけがあった。

「でえええりやあああああ！」

再び重い身体に鞭を打って攻撃するヴィータだが、魔力が爆発する際の衝撃で吹き飛ばされる。
もう衝撃にも耐えられないほどボロボロになっていた。

「何だよ・・・何で通らねえ。コイツをぶっ壊さなきゃ皆が困るんだ。はやてのことも、なのはの事も守れねえんだ！こいつをぶち抜けなきゃ意味ねえんだ！だから、アイゼン！」

<J a w o h l . >

カートリッジから3発の葉莢が排出され、ヴィータは再び攻撃の態勢に入る。

「うおおおおお！ぶち抜けえええええ！」

全力を込めた最後の一撃を叩き込むべく、グラーフアイゼンを結晶体に振り下ろす。

魔力の爆発でヴィータは吹き飛ばされグラーフアイゼンは碎け散る。そしてヴィータも落下していく。

（ダメだ。守れなかった）

「はやて、皆ごめん」

尚も落下していく——かに見えたが、突然ヴィータを白い光が包み込む。

それに気付いたヴィータはゆっくりと目を開ける。

「ん？」

「謝ることなんて何もあらへん」

「あ……はやて」

そこには外で戦っているはずのはやてが居て、ボロボロのヴィータを抱きかかえていた。

「鉄槌の騎士ヴィータとグラフアイゼンがこんなになるまで頑張っ
て」

何かが軋むような音が聞こえてくる。

「それでも壊せへんもんなんて」

軋む音が大きくなっていく。

「この世の何処にも在るわけないやんか」

ヴィータが結晶体へと視線を向けると同時に結晶体は大きな爆発を起こして砕け散った。

皆を守れてなくなど無かった。きっちりと自分の役目を果たしていた。

ゆりかごの最深部にクアットロはいた。そこであらゆる戦況をモニターしていた。それ故なのか彼女は気付かなかった。

「はっ！？これは」

<Wide Area Search successful.
Coordinates are specific. Distance
calculated.>

「見つけた」

なのはは戦闘中もずっとWASでクアットロの居場所を探していた。このWASにはレイジングハートの性能の大半をつぎ込んでいた。その為ヴィヴィオとの戦闘ではレイジングハートのサポートはほぼ無かったに等しかった。

<Restrict Lock.>

「っ！？」

ブラスタービットがレストリクトロックでヴィヴィオの動きを封じる。

「エリアサーチ!?まさかずっと私を探してた?だ、だけどここは最深部。ここまでこられる人間なんて——っ!?!」

クアットロはモニターに映し出されているのはを見て目を見開く。床に向かってレイジングハートを構えて魔方陣を展開していたからだ。

「壁抜き!?!まさかそんな馬鹿げた事が!?!——はっ!?!」

クアットロの脳裏にとある映像が浮かび上がった。4年前の空港火災の時なのはが壁抜きで地上まで道を作っていたことを。

「あ……ああ……うああああ!?!」

<Clearance confirmation. Firin
g lock is cancelled.>

「ブラスター3!デイベイ——ン」

レイジングハートのマガジンから大口径カートリッジが在るだけ排出される。

空になったマガジンがパージされ、新たにマガジンを取り付けるのは。
形成されている魔力球はすでになのはの体の大きさを優に超えている。

「バスターーーーーー！」

巨大な砲撃が隔壁を次々と破ってクアットロへ一直線に向かっていく。

「ああ・・・嫌あああああ！」

背を向けて逃げ出すクアットロだが間に合うはずも無くディバインバスターが直撃し、周囲にあるものも丸ごと破壊してしまった。
そこに残されていたのは全く原型を留めていない、元々そこにあつたものと機能停止したクアットロだけだった。

もうどれだけ剣を交えただろうか。

スザクとビスマルクは双方にダメージが無い状態を保っていた。未だ一向に決着がつく気配が無い。

そこらにいる局員を人質に取れば簡単に決着が着くだろう。だがビスマルクはそのようなことはしなかった。

もしこれがルキアーノならばすぐにそうしていただろう。

だがビスマルクはしない。何故ならば、彼が騎士だからである。

しかしこのままでは一向に決着が着きそうにもないのが現状だった。

（これじゃあ皆を助けに行けない）

「ん？」

そんな時、急にビスマルクが動きを止めスザクではない方向を見ていた。

（卑怯かもしれないが、今はそんなことは言っていられない！）

「これで！」

「くっ」

斬撃に反応が遅れたがビスマルクは回避に成功していた。

だが、本人は回避出来ていても剣はそうでもなかった。

先端部分から3分の1ほどが切り落とされていた。

「これなら」

「氣を取られてしまったな。ゆりかごを見る枢木」

ビスマルクが先ほど見ていた方向にゆりかごがあったことを思い出したスザクは、警戒をしながらもそちらへ目を向ける。その瞳に映ったのは、上昇速度が明らかに落ちているゆりかごだった。

「あれは!？」

「どうやらスカリエッティたちはしくじったようだ」

「ならばこれ以上の戦闘は無駄です。投降してください」

「それは出来ん相談だな。スカリエッティの計画が失敗した場合は戻るように言われているからな。さらばだ」

「なっ!?! 逃げるのか!」

背を向けてどこかへ去ろうとするビスマルクを追いかけようとするスザクだったが、ビスマルクの言葉によってそれは止められてしまう。

「私を追っている暇などあるのか?」

「何だと？」

「ゆりかご内には貴様の仲間がいるのだろうか？早く助けに行かなくて良いのか？」

「それはあなたを捕まえてから――」

「高町なのは」

「なのはがどうした！」

「早く行ってやらねば死ぬぞ？」

「な・・・どういう意味ですか？」

「そのままの意味だ。いずれ決着は着ける、が今はその時ではない。さらばだ」

なのはが死ぬと言う発言に、ビスマルクを追うことを一瞬躊躇ってしまった。

その一瞬でビスマルクとの距離は大きく開いており、今から追いかけても追いつくことは出来なかった。

「くそっ！なのはが死ぬ？どういうことだ・・・」

『スザク君！』

ビスマルクを逃がしてしまい、苛立っていたスザクの元へ通信が入った。

「ん？ シャマル先生、どうしました？」

『もうすぐ次元航行部隊の主砲による攻撃が行われるんだけど、中に突入したなのはちゃん達と連絡が取れないの！』

「連絡が！？」

『お願い！ 救出に向かって！ スバルとティアナが向かってくれたんだけど、内部は魔力もともに結合できないような状況だし』

「分かりました、救出に向かいます！」

通信を切るとすぐにゆりかごへ向けて飛行する。

（ヴァルトシュタイン卿の言っていた事は本当なのか？ だとしたら、なのは！）

事件の終結を目前にしてなのはに迫るピンチとは一体何なのか。
ビスマルクを仕留めきれず、逃がしてしまったことに苛立ちながらも仲間の元へ急行する。

本当ならばビスマルクを倒すことを最優先すべきだったのかもしれない。

だがスザクは感じていた。今此処でなのはよりビスマルクを優先すれば必ず後悔すると。

< R e s t r i c t L o c k . >

クアットロを撃墜したことにより、ヴィヴィオの思考は元に戻っていた。

だが身体は未だ自由にはなっておらずなのはと戦い続けていた。ヴィヴィオを助けるため、魔力ダメージでレリックを破壊することを決めたのはヴィヴィオに再びレストリクトロックを掛けて動きを封じた。

「あ・・・」

ヴィヴィオの周囲に5つの巨大な魔力球が形成されていく。その中でもとりわけ大きいものがなのはの前で形成されているものである。

大きさはなのはの身長の10倍以上であろうかという大きさだ。

他の4つもそれほどではないがかなり巨大なサイズになっている。そしてその球体にまるで流星のように周囲の魔力が収束していく。

「防御抜いて魔力ダメージでノックダウン、行けるね？ レイジングハート」

<Clear to go.>

「全力全開！ スターライト・・・ブレイカーーーーーー！」

桜色をした光の奔流がヴィヴィオを飲み込む。

もはや何が起きているのか分からないような状況になっている。

「あ・・・うあ・・・あああああ！」

なのははレイジングハートを杖のようにして立っている。そうしていなければ立ってられないほど疲労しているのだ。

スターライトブレイカーex-fbの負担は半端ではなく、レイジ

ングハートにもひび割れが起きている。

そしてヴィヴィオが立っていた床が大きく抉れてる様子から、凄まじい威力であることが伺えた。

「ヴィヴィオ？」

「来ないで・・・強くなるって約束したから」

以前になのはと交わした約束を守ろうと、フラつきながらも必死に1人で立とうとする。

そんなヴィヴィオに感情がこみ上げ、涙が溢れる。

駆け寄ろうと一步を踏み出したその時だった。

ヴィヴィオの隣に落ちていたレリックが光を放って形を変えていく。

「何！？——え？」

なのはは信じられない光景を目の当たりにしていた。

そこにはなのはが立っていた。とはいっても着ているバリアジャケットは黒だったが。

「邪魔者は排除します」

「っ！？」

「パイロシューター」

「ああっ!？」

「ママッ!」

エネルギー弾(?)を撃ち出してなのはを攻撃する。
ろくに魔力も残っておらず、防御すら出来ないのははまともに喰らってしまい壁へと叩きつけられる。

「ママッ!」

「陛下、少しおとなしくしていただきます」

なのはに瓜二つな容姿をしている女性は、なのはに駆け寄ろうとしたヴィヴィオをクリスタルケージの中へ閉じ込める。

「さて、止めを刺しましょうか」

謎の女性なのはに、これまたレイジングハートに瓜二つなデバイスを向ける。

その時、いきなり天井が崩落する。

「なのは!」

飛び込んできたのはスザクだった。

スザクは目の前になのはが居ることを視認していたが、違和感を感じていた。

（なのは？ 雰囲気が違う気・・・いや、それ以前になのはのバリアジャケットは白だったはず）

「ス・・・ザク・・・君」

「なのは？」

声がしたほうを振り向くと倒れているのがいた。

「それは・・・レリツ・・・クだから。ヴィヴィオを・・・助け」

抱き起こしたなのはが何かを言うが、いまいちこの状況を理解できずに居た。

だが、いい状況ではないことだけは理解できていた。

「君は一体誰だ？」

「私はマテリアルS、星光の殲滅者。どちらでも好きにお呼びください。まあ・・・もっと分かりやすく言ってしまうばレリックなのです」

「レリック！・・・ヴィヴィオをそこに閉じ込めたのは君か？」

「はい。陛下を渡すわけにはいきませんから」

「目的は何だ？」

「邪魔者の排除です」

「それだけ聞けば十分だ。悪いが時間がない、3分でケリを着ける」

スザクは一瞬で距離を詰めるとMVSを振り下ろす。

だが強固なバリアで防がれ、それと同時にエネルギー弾を撃ち出す。距離を詰めた時と同様に一瞬で離れて回避するが、エネルギー弾はなのはの元へと向かっていく。

なのはがろくに動けないことは承知しているスザク即座になのはの前に移動し、ブレイズルミナスで全てを防ぐ。

「卑怯な！」

「卑怯？戦いにおいて相手の弱点を狙うのは当然だと思いますが？」

「くっ」

（このままでは・・・）

いくらスザクでも動けないのはを守りながら戦うのは苦戦を強いられる。

その時いきなり壁が吹っ飛んだ。まるでスザクが突入してきた時のようだ。

「お待たせしました、助けに来ました！」

そこにはスバルの姿があった。一緒に突入したティアナは途中ではやてを拾って先に帰還していた。

「って、スザクさん！？何で此処に……」

「ブラストファイヤー」

「うわっ！？」

マテリアルSがスバルに向けていきなり砲撃を発射する。

スバルは思わず目をギュッと閉じてしまうが、いつまでたっても思っていた衝撃がこなかった。

ゆっくり目を開けるとスザクが左腕でなのはを抱え右腕のブレイズルミナスでスバルを守っていた。

「あ、ありがとうございます」

「それよりも、なのはを連れて此処を脱出するんだ」

「で、でもスザクさんは？」

「まだヴィヴィオがいるんだ。あいつを倒して取りもどす。時間がない、行くんのだ！」

「は、はい！必ず戻ってきてくださいね！ヴィヴィオと一緒に！」

「ああ」

スバルは約束を取り付け、なのはを背負って来た道に戻っていった。

「黙って行かせてくれるとはね」

「私の役目は陛下を守ることです。ここから出て行くのなら攻撃する理由はありません」

「そうか」

「パイロシューター」

再びエネルギー弾が発射されるがスザクは流麗な動きで回避している。

その間にチャージが終わったのか、マテリアルSは砲撃の体制に入っていた。

「ブラストファイヤー！」

Sヴァリスをハドロンモードに切り替えて発射する。
青白い光がビームのように放たれ、ブラストファイヤーと相殺する。

「これならどうですか？」

そう問いかけるマテリアルSの周囲には先ほどとは比べ物にならないほどの数のパイロシューターが浮かんでいた。

「パイロ——」

「時間がないと言ったはずだ」

「なっ!？」

瞬間、エナジーウイングが巨大化してそこからエネルギー矢が放たれる。

無数に放たれる矢は次々とパイロシューターを撃ち落していく。そしてSヴァリスをノーマルモードで連射してマテリアルSをその場に釘付けにする。

そしてスザクが背後に回ろうと考えた瞬間、何かの気配を感じ後ろへと下がる。

だがその行動は途中までしか行えなかった。

「くっ、しまった」

「ルベライト」

スザクの左足はバインドに絡め取られていた。本来全身を拘束するはずだったが、スザクが先ほど後ろへ下がったことにより左足のみに残っていた。

「左足のみですか・・・まあ十分でしょう。集え、赤星！」

マテリアルSの前でエネルギーが収束し、巨大な球体が出来上がっていく。

これだけ巨大なエネルギー体にヴァリスを撃ち込むのは危険だと判断したスザクは左足にブレイズルミナスを展開する。

「ルシフェリオーン——」

「はぁっ！」

蹴りを繰り出すように左足を振ると、ブレイズルミナスが刃の役目を果たしてルベライトが破壊される。

そして次の瞬間にはマテリアルSの目の前まで距離を詰めておりMVで彼女の胸を貫いた。

「かはっ」

胸を貫き彼女の体から力が抜けると同時に巨大なエネルギー体は霧散していった。

「最後まで・・・無茶苦茶な人ですね」

「すまない」

「さあ、早く脱出しなければゆりかごと共に消滅しますよ？」

「なのは達はまだか！」

ミッドに到着し、後は主砲による攻撃でゆりかごと消滅させるだけになった。

だが艦長、クロノ・ハラOWNは焦っていた。

直にゆりかごは軌道上へ到達する。だが未だ突入したなのは達が脱出していない。

最悪の場合、彼女たちもろともゆりかごを撃たなければならない。

だがそれだけは絶対に避けたかった。

「艦長！」

「何だ！」

「高町一尉の脱出を確認しました！」

「よし！全艦主砲——」

『待……って……クロノ、君』

「なのは！？どうした！」

『まだ……スザク君が中……に』

「なっ！？……だが、もう時間が」

『お願い……あと少し……だけ』

「……分かった。だが後1分だ、それ以上は待てない」

スザクが中に居るとはクロノも思っていなかった。なのはの救出に向かったとは聞いていたが、なのはと共に脱出していると思っていた。

（スザク……急げよ、本当にもう待てない）

「艦長！もう時間が！」

「・・・分かった。全艦主砲発射！」

スザクの脱出が確認されない中、浮上を続けるゆりかごに遂に主砲の発射命令が下される。

数秒でチャージが終了し一斉に放たれる。

大きな爆発を起こしてゆりかごは跡形も無く消滅した。

「巨大船、撃墜！任務完了です！」

ミッドのあちらこちらで歓喜の声が上がっている。

世界が悪夢から覚めた瞬間だった・・・のかもしれない。

しかし、六課のメンバーは全員が表情を曇らせていた。いや、雨が降っていたと表現するほうがいいだろう。

「スザ・・・ク・・・君・・・ヴィヴィオ」

「そんな・・・嘘、やろ？」

「おい！てめえ！どっかに隠れてんだろ！？出て来いよ！」

「スザクさん・・・約束したのに。ヴィヴィオと一緒に帰ってくるって！」

ヘリの中では失意呆然とする者、叫ぶ者、自分を責める者いろいろ居たが、総じて言えば平常心を保っている者はいなかった。絶望だけがヘリとアースラを支配していた。

ただ、クロノが命令を出す直前にゆりかご付近で流れ星のようなものが確認されていた。

だが今の六課のメンバーにはそんなこと知る由もなかった。

――0076年 4月28日 機動六課隊舎

「長いようで短かった一年間、本日を持って機動六課は任務を終え

て解散となります。みんなと一緒に働けて、戦えて心強く嬉しかったです。次の部隊でも皆どうか元気に頑張って」

はやてが挨拶を終えると拍手が沸き起こった。

本日、遂に六課が運用期間を終えて解散する日となった。

1年間やってきた部隊が終わるとあって寂しくもあったが、みんな笑顔だった。

「全力全開って聞いてませんよ!？」

フェイトが何やらおろおろしている。何をしているのだろうか？

「にやはは、フェイトちゃんに言ったら絶対反対すると思ったから」

「と、当然だよ!」

「フェイトママ、大丈夫。皆楽しそうだよ?」

「え?」

フォワード+ギンガは楽しそうに作戦を練っていた。

「ああ・・・もう」

「頑張って」

「あ、あの～もしかしてスザクさんも参加するんですか？」

「もちろんだよ、最後なんだからさ」

「うわあ～そんなあああああ！」

スザクが模擬戦に参加することに思わずorzの体勢になるスバル。フォワード達は思った。絶対勝てない、これほど最初から結果が見えている全力の模擬戦ってほかにあるかな・・・と。

「そんじゃ始めよか。レディー・・・ゴー！」

スザクは翼を広げる。広げた翼で飛んでいく空の向こうに誰もが望む明日があると信じて。

——機動六課解散から約2ヶ月

次元空間内を航行している薄い蒼と白でカラーリングされた一隻の船があった。

本局の次元航行部隊が運用している船ではない。個人的に使用されている船なのだろうか？

外見以外は謎に包まれた船だった。

「本当に行くのか？」

「ああ、勿論だ」

「しかしなあ、お前さん1人じゃ」

「大丈夫だ。それに彼は来る、生きているならば必ず」

——
Mission Incomplete

第15話「明日への翼」(後書き)

この駄文に此処まで付き合っていたくださりましてありがとうございます。

この15話を持ってストライカーズ編は完結いたしました。

途中(14、15は特に)からかなり超速展開になりました。

大事だったのはスザクがどうしてなのはたちと一緒に戦うのか、そこさえ書ければ後は2部(メイン部分)になるまで基本的に原作辿るだけなので、敢えて高速化しました。

そして・・・スザクとビスマルクとの対決を楽しみにされていた方々、すみません！

ですが2部に繋がる都合上あするより他なかったのです。

そのまま原作通りエンディングを迎えるとアルビオンの(第一部における)見せ場が無さ過ぎたので

急遽レリックをマテリアルS化させました。

さて、sts編が終わってスザクがミッドチルダに來た話を終わらせることが出来ました。

ようやく自分がやりたかった話へ持つていけそうです。

今回はstsを辿りましたが続編はオリジナルストーリー化します。なので更におかしな事になるかもしれませんが、今しばらくこの駄文に付き合っていただければ嬉しいです。

『魔法戦記リリカルなのはKNIGHT』

2010・4・9 天使 再臨

「あとがきと 天使再臨」

今更後書きもクソも無いと思うのですが、この作品を此処まで書いてこられたのは読者の皆さんのお陰だと思うので書くことにしました。

そもそも何故スザクを主人公として始めようと思ったのか。

そんな深い理由が在る訳ではないんですが・・・最初は00から刹那を連れてこようかなあ〜と考えていました。

ですが00クロスで刹那が出てくるのは既にいくつか書かれていました。

なので刹那ではない、誰か。それでいてロボットに乗って戦う人物。そう考えた時に、「あ、スザクって見たこと無いな」と思ったので彼に決定したわけです。

ちなみにですが、ロボットに乗って戦う人物限定にしたのは、本編を読めば分かると思いますが、ロボットのパーツを鎧のように各部に装備させたかったからなんです。

所謂ロボットが擬人化したような感じですね。

まあそんなわけで始まったこのクロス小説なのですが、書いている途中で思う様になりました。

「ストライカーズの話を書いたところであんま面白くなくね？」と。どうせならオリジナルストーリーリー化させたほうが面白いだろうと考える、この作品を後半ハイスピード展開で終わらせてしまいました。

もっとじっくり進めて欲しかったという方も居られるかと思いますが。

しかし、作者としてはやりたかったのがこの続編に当たるものなので、そうなってしまいました。作者の拙い文章を此処まで読んでくださった方々、本当にありがとうございます。御座いました。

まあそんなこんなで続編に突入いたしました。気付いていない方が結構居られるようで・・・

あえて此処で宣伝しておきましょう（笑

G H T

「魔法戦記リリカルなのはK N I

2010. 4. 9 天使再臨

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7599j/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS ～白き円卓の騎士～

2010年10月30日18時33分発行